

特254
876

×
複写

東京八大新聞連載
濱口熊嶽記事録

始

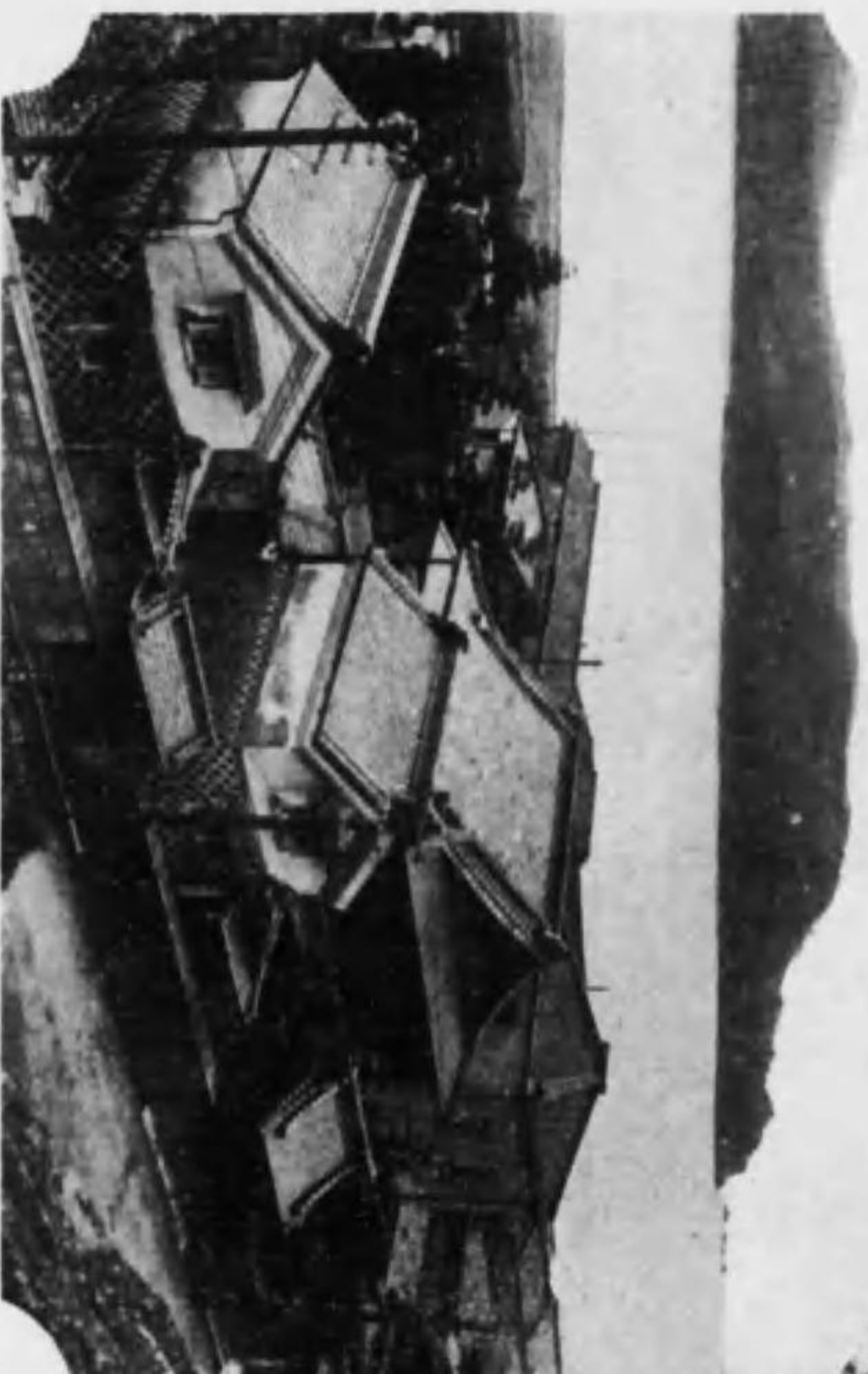
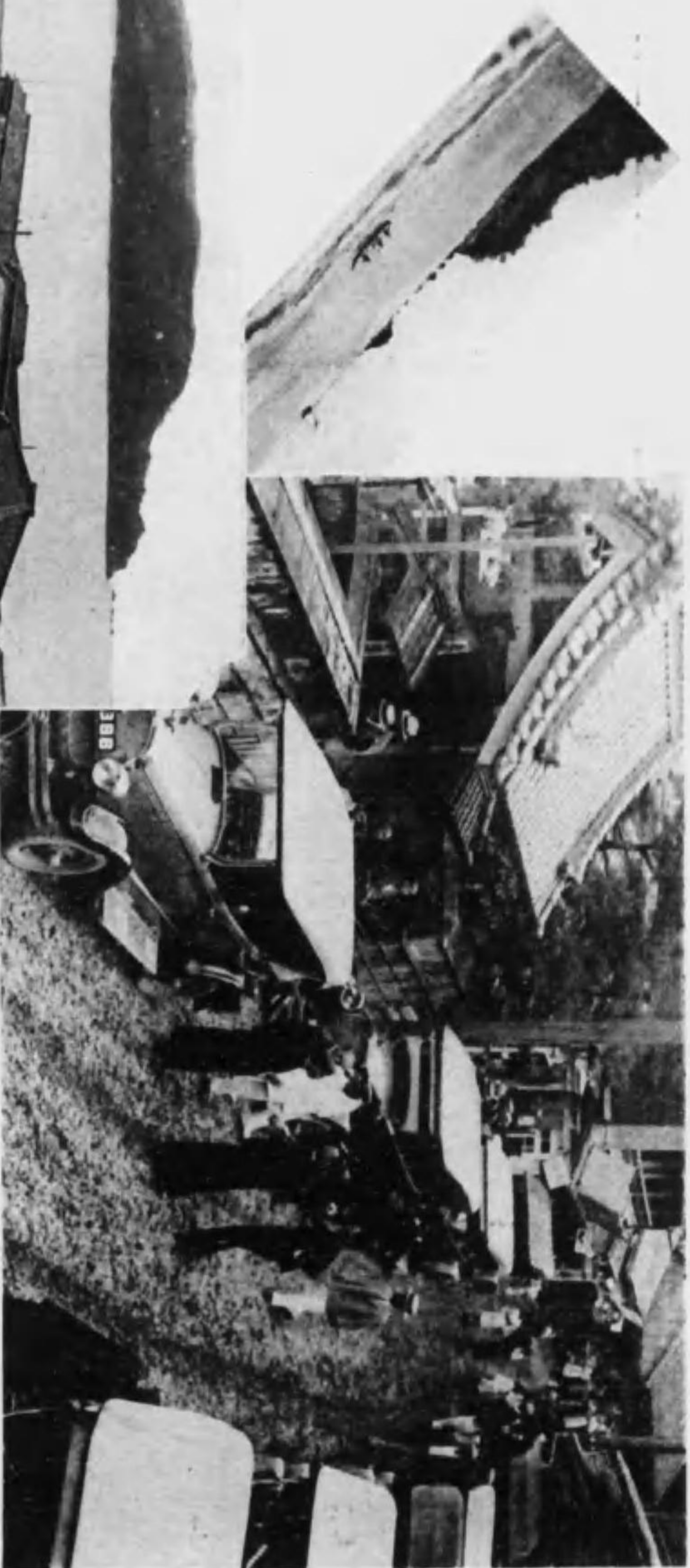


時 254
876



(像肖近最) 師 嶽 熊 口 濱

長島別邸正門



濱口熊嶽長島町別邸ノ全景

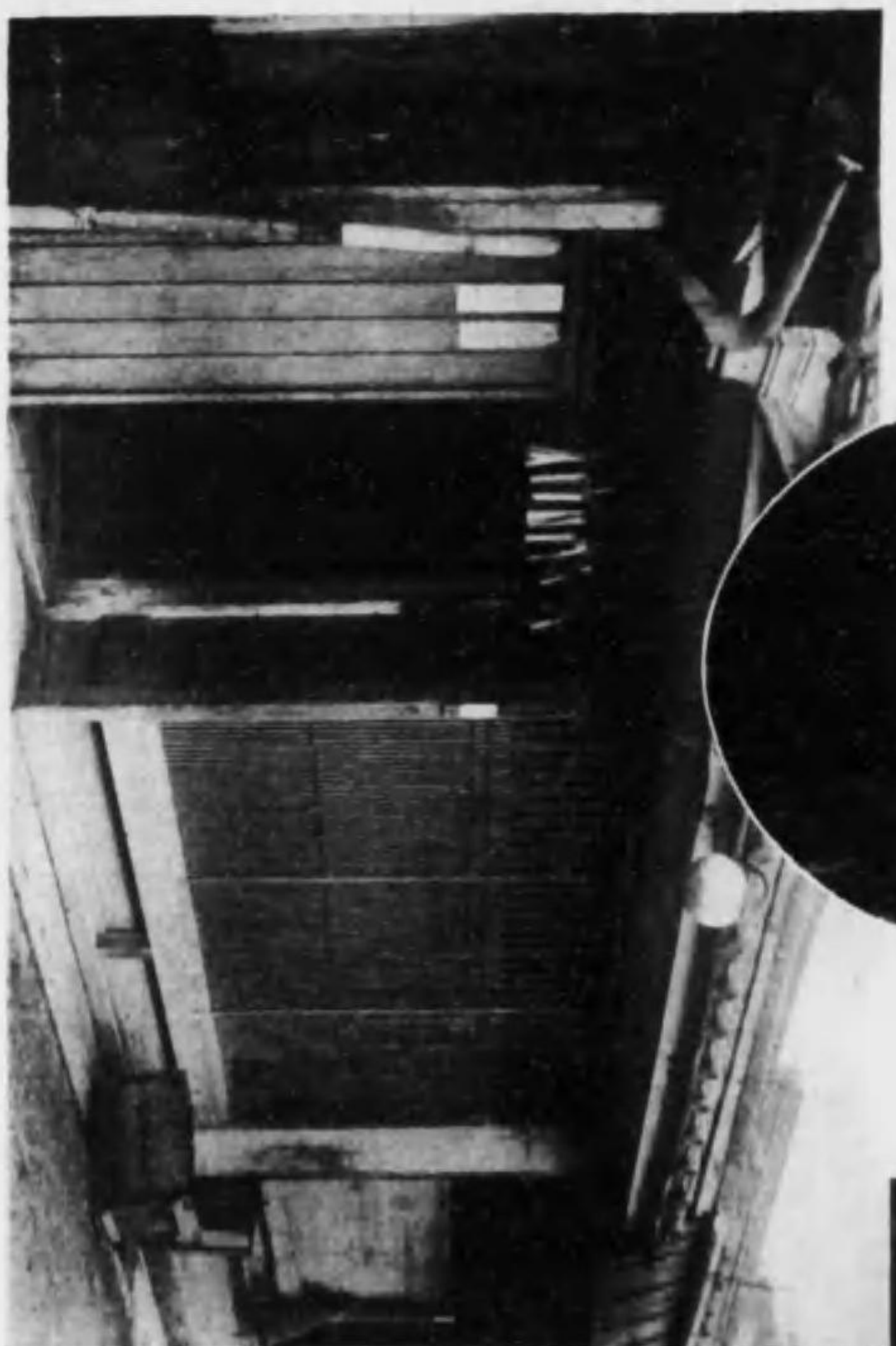


紀伊長島海岸

嚴父故濱口長松



濱口熊嶽紀伊名倉別邸



濱口熊嶽生家



母堂故濱口マツ



者 忠 敬 多 ン 待 = 所 衛 旗

心 誠 敬 業

宣

言

濱 口 熊 嶽

一字の「信」に一字の「行」を加へたるもの之を「我の力」と爲す、「我の力」は至純至真天地萬有を照破して剩す所なく、無碍大自在の王城に晏臥して能く古今を通観す、「我」は疑ひなき王城の主である、「力」は「信」であり「行」である三密顯真を我が宗の秘法といふなかれ、是れ唯だ天地の命題、精進努力の心劍を以つて、自由の體得を解剖すべきのみ、近時思想の混亂を説くもの「信」と「行」とを人間より取放し「我の力」を徒らに消耗せしむるに過ぎぬ、**來れ吾今三密の秘庫を啓く、物心の憂苦汝に於て何かあらん。**



濱口熊嶽師新大八嶽熊口濱

東京日日新聞(文化風土記)	三重縣の卷	一……………四二
東京報知新聞(産業人國記)	三重縣の卷	四……………五三
東京時事新報(人物風土記)	三重縣の卷	五……………五九
讀賣新聞(産業人國記)	三重縣の卷	六……………六二
國民新聞(國土と人物)	三重縣の卷	三……………六六
都新聞(昭和人物傳)	三重縣の卷	六……………六九
大阪毎日新聞記事		七……………七四
大阪朝日新聞記事		七……………七六

東京日日新聞 (Y T 生)
文化風土記
三重縣の卷

天下の快傑
濱口熊嶽師

三重縣長島町に
その故郷を訪ねる

三重縣が生んだ人物のなかに、天下の快傑濱口熊嶽師がある。師が試みるいはゆる「人身自由術」なるものは實に天下の不思議としての存在である、余は一日その生立ちとその平生を知らんものをと三重縣の中でも殆ど和歌山縣に近い熊嶽師の生れ故郷である北牟婁郡長島町を訪ねた。

鳥羽總相可口驛から紀勢東線の客となつて青々とした雷州線を車窓に見ながら、紀勢山系を過ぎる頃、幾度かトンネルを潜つたと思ふと、もうそこは紀州路へ入つて

ぬるのである。この北牟婁郡は、幾度か三重縣になつたり、和歌山縣になつたりしたところ、兄弟分の兩牟婁郡は現に和歌山縣だ。熊嶽師ははざんで、南に別れてゐる。

長島町は、その北牟婁郡のうちでも、一帯に位してゐて、三がは山にかこまれ東の半分は赤狩川に沿ひ、南の半分は湖の荒い熊嶽にまで直向してゐる。

人口は六千餘、住民の多くは商業と漁業に従事し、町はその漁業と附近の山林から出る木材、薪

の快傑である。余はこの町が生んだ快傑熊嶽師とその自然の關係を、驚てから知りたと思つてゐた。

熊嶽師は故郷に尋ねられずといふが、濱口熊嶽師の故郷を訪ねるに及んで、先づ第一に余が奇異を感じたのは、その濱口師が尋ねられざるところか、長島町では、熊嶽師は熊嶽の隣りであり、矢張り世主であつた。

町長、町司曹左衛門氏も口を極めて、熊嶽師をたへたし、熊嶽師も、理髪會議員の西田常吉氏もこれをたへた。

一面において、熊嶽師は町の非難でもある。それも、世に行はれるやうな、御用商人や、利權あさり、金儲けを注ぎ込んだのは大分性質が違ふ。

眞に熊嶽の豪傑から、師はその財を町政のために揮つて惜まないのである。

熊嶽師が、町のために、年々支拂つてゐる正當な町税だけでも、四千七百圓を下らない。昨年などは町全體が、世の不景氣が山縣に

襲ひ來つて、町全體の不況を訴へたので町税を一旦に下げた時にも、熊嶽師だけは、これに應じたかつた。

「皆さんの賦税は富税だ、然しこの熊嶽は賦税は受けない。私は町の厄介になつてゐる。それに酬ゆるために、私はこれといったことをしてゐない、せめて、お金でこの難分を埋め合はすことが出来れば、意外の幸ひだ。むしろ賦税による町の収入不足を、私が引受けませう。」

熊嶽師はこんな突飛な申し出をさへした位である。その他、年末が來ると、町の住民に米百俵を施米したり、町の消防、衛生設備に金があるといへば何時も率先してそれに、いの一帯に應じる。

町にある師の別荘は、平生これを町民一般に開放して、公の集會には、何時も提燈して、まるで公會堂のやうな役目を果してゐる。現在はまだ各農村にも祝賀中だがこれも町のためならいつでも開放するつもりだといふ。

最近には、先々代の熊嶽會議員で町の快傑者だつた石倉氏の銅像を建設すると聞いて、町の財政の苦境を知つてゐる師は「私が建てませうと一人で引受けました。」

如何な富豪でも、これだけ無難のために、無難作に財を懸けし惜まぬ人は少い。

この人が、一度熊嶽を出でると天下の快傑濱口熊嶽師となるのである。

自ら「人身自由術」といふ奇抜な名をつけて、一喝の機會に、萬端を治すといふ不可思議な濱口熊嶽師は、熊嶽界にあつても、醫學界にあつても、昭和時代の科學時代になほ、一個の熊嶽師である。一さじの投り薬をするでもない、手を觸れるわけでもない。たゞ破れるやうな一喝に、ちんばを治し、いざりを立たし、ホクロを除くといふのである。

彼の現はれるところ、熊嶽師來るの報が傳はると、忽ちにして天下の熊嶽師が、救世主を求めるやうにゐる。

料金を過徴する者が、これに

度か批議のほこを向け、法は度度か師を師法度度に向ふて、その師に法廷に立つた。今日までその師に四十餘回、然しその不思議の術は依然として術であつて、神聖な法廷で、師は怖るゝところなく、それを護明して、遂には、法廷が、法廷をぬいで術を受けりやうなことすらあつたといふのである。

「私が十九歳の時、和歌山から大願へ出て、大願下寺町口廻廊で、この術を使つて、天下を驚かした時には、まだ鑑識術といふ言葉も出来てゐなかつた。その時は世間一般が科學の前に口頭首してゐた時代で、ドンなことでも、その

「熊嶽師の
阿房熊が見せた
第一番の奇績は
先づ村の漁師達に

で、朝夕、漁と貧乏と闘つてゐたので、父は殆ど晝夜の別なく沖に遊び、母のヱツは、仲間の漁師のつとめて来た魚をかごに入れて、それを籠の上に掛けて、長島から二里ばかり離れた大内山へ向ひに出た。

父はそんな荒い世にたは合はず、村人からは「佛の長松」と呼ばれてゐたほどのお人好しだつたが、その代り母は口八丁手八丁の方だつた。両親がそろってゐたので子供の熊嶽師(當時は熊嶽といふた)はまるで放し飼ひだつた。

後世の奇傑熊嶽師は父長松が二十八、母アツツが二十五の時になつたが、別に母の夢に日輪かふところに乗らなでかだでも、紀州のくぢらが丸呑みにしたといふ風な、有難い奇蹟もなかつた。強ひて違つたところを求めると、少々赤ん坊にしては、泣き聲が高くて隣り近所で「長松のところの今度出来た熊嶽は、くそやましましはてる」と小言を食つた位だつた。

幼少時代は、相當のいたづら者で、手がつけられぬほどだつたらしい。鬼熊、阿房熊、熊嶽、八十熊、などと無数のあだ名がついてゐた。数へ年八つで長島尋常小學校に入つたが、物體は地味で悪いくろはのいの字を仲々覚えてなかつた。先生が特別に熊嶽を見たが、それでも駄目で、阿房熊らしく二本指を鼻からたらし、口をポカソと開いてニタ／＼笑つて居た。熊嶽はどんな進級しても、熊嶽さんはいつまでたつても六級の一等生だつた。熊嶽が變つて六級が一年生と變つても熊嶽さんは依然一年生だつた。

「おい、熊さん、お前さんは何年生だ」と人がからかつた。「うゝ六級や」と平気で答へた。熊嶽の外では、鬼熊の熊嶽さんも、妙に熊嶽のなかでは別人のやうに温順だつた。遊びの時間でもたつた一人、運動場の際にボンヤリ立つて居た。何かが熊嶽へ行くと熊嶽がボウとなつた後熊嶽さんはいつて居る。

先生はその熊嶽さんを楽しんだ。「お前は阿房熊ぢやない。熊嶽の奇蹟」

で、熊嶽しなさい」と親切に熊嶽か注意を受けたが「熊嶽は詳しい」と受けなかつた。

先生から注意を受けてからは、學校の外でも、いたづらをしな何となく愛うつな子供になつた。いよゝ、阿房熊の方にかたまつたのだつた。すると仲間の子供で、今までひと目に見つて居た連中から、白雲のふくらむを、とびやからすがつつかやうにいぢめ返された。それでもだまつて居た。しかし餘りなことをする奴は、ためて置いて、夜中や、對手が一人の時に怒鳴りつけて、現實めなどを食はせて、知らぬ顔をして居た。阿房熊がいよゝ、通り名となつて、終ひには、親切だつた先生までが、つい「おい阿房熊」と呼ぶやうになつた。先生にまで呼ばれて、阿房熊は心の中で「くそ」といふ氣になつた。

とう／＼阿房熊だから盛業の見込なしといふので退校になつた。學校を離れて見ると、小々口憎かつたと見えて、何時もはポカ

ンと口を開けて、のろ／＼と怒るところを、一目に駆け出したると途中で自分よりは少し年下の子供を連れた女房の親子がガタ／＼ふるえて、抱き合ふやうにして歩いて居るのに出逢つた。

見知らぬ女房だつた。「寒いか」と聞く。「衣物が破れて、おまけに靴から飯を食ふので此奴が泣きます」といつた。

「この着物をやらうか」女房は驚いたように、「へ……」と薄笑ひした。すると傳の子供が、「衣より、飯が喰ひたい」といつた。

「飯なら家へ来い。」矢庭に着物を脱ぎ棄て、帯だけで自分のマツシにして、見慣れた漁師らしい裸で家へ飛んで来ると母が「何じゃ、眼、着物は？」母は仲々驚しなかつたが、かういふ時には、「うゝ」としかいはなかつた。「暇まで裸で居れ」腹中にそのまゝで棄て置かれた。その時に不慮

考へた。寒い時は水を浴びるに際して、熊嶽はさか／＼暖かい、と。そこで、ジヤア／＼井戸で水を浴びると、その時の氣持の好さはなかつた。水ごうの味がこの時に偶然判つたのであつた。

學校を退かされたから、とうとう一ひき小僧にされた。いよいよ孤獨になつた。對手がないので何時も獨り言を云つてゐた。氣の浮いた時は大聲で、沈んだ時は小聲で、やつてゐるうちに妙な節が

いた。それを人々が「熊のお経」といつた。

「おゝ、今日は熊のお経が、感が好いぞ、熊がある」などと終ひには、熊さんの獨り言の響きで熊不漁を占ふようになつた。

その熊さんの熊嶽師さきごころから東京に来て、芝居船輪車町六番地に居る熊へ世の熊々の熊嶽師を救ふのだといつてゐる。

熊嶽が喜んでゐた。この日は朝から氣持がよかつた自宅で朝から、大聲を擧げて、熊のわけの判らぬ「熊のお経」が始つてゐたので、それを聞きつけた熊嶽師が、「今日は、久しぶりに熊のお経が景氣が好いぞ、熊も一緒に連れて行くかうではないか」といふことになつた。熊も素直に、熊嶽よく話へは出たのだが、さて熊へ来て見ると、急に、氣持が變つて来た。

ホカ／＼する熊嶽が、熊嶽熊嶽の氣持が重々しく、あたまがボウとなつて来た。

そろ／＼お経が、カニの泡になつて来た。

「熊、そりやお前、約束が違ふぞ。熊嶽でもない」熊嶽師がプツ／＼いひ出した。

連れて行つてくれないからといつて、お経を變へるわけに行かなかつたが、一行は、「熊、連れて行かんぞ」といつた。熊嶽ひきよしも、沖へ出たかつたが、お経で御世帯を振り撒くわけにも行かなかつた。

熊嶽は「何もないぢやないか」三人が等しく海を眺めてゐるとやつと、父が最先に叫んだ。「おゝ、ほんとうや、光つとる、光つとる」と叫んだ。

「夢枕に立つた
老僧の姿
不思議な夏の一夜

だん／＼慣れて来ると、漁師達は、いざ出漁といふ前になつて、「おい、熊さん、一つ景氣好くお経をやつてくれ」などと勝手な注文をした。熊嶽も實際に氣分の悪い時には、景氣の悪い熊嶽の悪い出ないのだから仕方がなかつた。そんな時は、プツ／＼と口のなかで、やつて口のまはりにカニの

「熊嶽、熊嶽と貧乏と闘つてゐたので、父は殆ど晝夜の別なく沖に遊び、母のヱツは、仲間の漁師のつとめて来た魚をかごに入れて、それを籠の上に掛けて、長島から二里ばかり離れた大内山へ向ひに出た。」

父はそんな荒い世にたは合はず、村人からは「佛の長松」と呼ばれてゐたほどのお人好しだつたが、その代り母は口八丁手八丁の方だつた。両親がそろってゐたので子供の熊嶽師(當時は熊嶽といふた)はまるで放し飼ひだつた。

後世の奇傑熊嶽師は父長松が二十八、母アツツが二十五の時になつたが、別に母の夢に日輪かふところに乗らなでかだでも、紀州のくぢらが丸呑みにしたといふ風な、有難い奇蹟もなかつた。強ひて違つたところを求めると、少々赤ん坊にしては、泣き聲が高くて隣り近所で「長松のところの今度出来た熊嶽は、くそやましましはてる」と小言を食つた位だつた。

幼少時代は、相當のいたづら者で、手がつけられぬほどだつたらしい。鬼熊、阿房熊、熊嶽、八十熊、などと無数のあだ名がついてゐた。数へ年八つで長島尋常小學校に入つたが、物體は地味で悪いくろはのいの字を仲々覚えてなかつた。先生が特別に熊嶽を見たが、それでも駄目で、阿房熊らしく二本指を鼻からたらし、口をポカソと開いてニタ／＼笑つて居た。熊嶽はどんな進級しても、熊嶽さんはいつまでたつても六級の一等生だつた。熊嶽が變つて六級が一年生と變つても熊嶽さんは依然一年生だつた。

「おい、熊さん、お前さんは何年生だ」と人がからかつた。「うゝ六級や」と平気で答へた。熊嶽の外では、鬼熊の熊嶽さんも、妙に熊嶽のなかでは別人のやうに温順だつた。遊びの時間でもたつた一人、運動場の際にボンヤリ立つて居た。何かが熊嶽へ行くと熊嶽がボウとなつた後熊嶽さんはいつて居る。

先生はその熊嶽さんを楽しんだ。「お前は阿房熊ぢやない。熊嶽の奇蹟」

で、熊嶽しなさい」と親切に熊嶽か注意を受けたが「熊嶽は詳しい」と受けなかつた。

先生から注意を受けてからは、學校の外でも、いたづらをしな何となく愛うつな子供になつた。いよゝ、阿房熊の方にかたまつたのだつた。すると仲間の子供で、今までひと目に見つて居た連中から、白雲のふくらむを、とびやからすがつつかやうにいぢめ返された。それでもだまつて居た。しかし餘りなことをする奴は、ためて置いて、夜中や、對手が一人の時に怒鳴りつけて、現實めなどを食はせて、知らぬ顔をして居た。阿房熊がいよゝ、通り名となつて、終ひには、親切だつた先生までが、つい「おい阿房熊」と呼ぶやうになつた。先生にまで呼ばれて、阿房熊は心の中で「くそ」といふ氣になつた。

とう／＼阿房熊だから盛業の見込なしといふので退校になつた。學校を離れて見ると、小々口憎かつたと見えて、何時もはポカ

「どれ〜」
「あ、成程、光る」
「何じやろ〜」

「大きな魚があつたんじやないか」
「熊さんは人々が光る物を知つたのでお話を初めた。」

と、ひよいと隣にうかんだ。恰度その日から二週間のこと、土地の漁師達が三十人ばかりで沖に船を出た。突然の暴風で、一行は命からくす逃げ歸つて来たが、そのうちの音次郎といふのだけが、一人歸つて来なかつた。

漁の人々は、隊を組んで、遠く伊勢浦の方までも、五日間毎日、のやりに海を捜して、音次郎の死體を求めたが遂に無駄に終つた。「可哀そうに、魚のえ食になつたかな」
人々は、死體のない事につぶやいた。

凡そ、三里もあらず沖合の光るもの、それに詣んで考へられたのは、その音次郎のことだつた。何気なく、熊さんはそう直観した。「あれは、音次郎の死體や」

人々は出たら目をいふたといつた顔で取り合はなかつたが、熊の機子が驚きでない。

「早く船を出して、音次郎や、早く帰らんとせむぞ」とつかれたもの、よりに叫ぶので、人々は半信半疑ながら、兎に角船を出すことにしたのであつた。

沖へ漕ぎ出して熊も一緒に同船させたが、仲々に音次郎の死體らしいのは見付からなかつた。

「熊、何處だ」
「あそこだ」
だまされたやうな氣で一同は船を漕いでゐた。

「無いやないか」そろ〜人々が怒り出した。もう歸る〜といひ出す者もあつた。

父がハラ〜してゐた。

「熊ほんとうに見えるのか」と念を押した。

「わしは豪いんじや見えるんや」
「然としてへさきに突つ立つた少年の態度は、素晴らしく自心に満ちて、一種の威風があつた。」

「果して音次郎の死體は、三里の沖に発見された。人々の驚

き、熊への偉大な偉業となつた「驚き味の悪い子供や」と人々がつぶやいた。

音次郎の死體を発見してからの熊さんは、一體驚き者の熊さんになつた、町を通ると「熊さんの御通りだ」と神機扱ひ、ぶつ〜と云ふ熊さんの奇抜なお顔が、大漁の占ひになつたからだ。

けれども熊に神機になつた熊さんは矢張り驚き者だつた。いくら熊の神でも、手に負へないいたづら小僧では、矢張り熊さんの眼裏には持て餘し者だつたので、とう〜町の總持の東と云ふ家の小僧にやられた。他人の飯を食はせたら、少しはおとなしくなるだらうと云ふのであつた。

總持東家の小僧となつてゐるうちに、夏の一月初めて奇妙なことが起つた。それは舊の八月だつた。三人の小僧が杖を並べて寝入つてゐると、枕頭が低いのが鋭い聲で、「小僧……」と手ぶらに熊さんの目が醒ました。

家人は誰も驚きまづつてゐる。ハツとして夢現に部屋を見廻すと、

き、熊への偉大な偉業となつた「驚き味の悪い子供や」と人々がつぶやいた。

音次郎の死體を発見してからの熊さんは、一體驚き者の熊さんになつた、町を通ると「熊さんの御通りだ」と神機扱ひ、ぶつ〜と云ふ熊さんの奇抜なお顔が、大漁の占ひになつたからだ。

けれども熊に神機になつた熊さんは矢張り驚き者だつた。いくら熊の神でも、手に負へないいたづら小僧では、矢張り熊さんの眼裏には持て餘し者だつたので、とう〜町の總持の東と云ふ家の小僧にやられた。他人の飯を食はせたら、少しはおとなしくなるだらうと云ふのであつた。

總持東家の小僧となつてゐるうちに、夏の一月初めて奇妙なことが起つた。それは舊の八月だつた。三人の小僧が杖を並べて寝入つてゐると、枕頭が低いのが鋭い聲で、「小僧……」と手ぶらに熊さんの目が醒ました。

家人は誰も驚きまづつてゐる。ハツとして夢現に部屋を見廻すと、

き、熊への偉大な偉業となつた「驚き味の悪い子供や」と人々がつぶやいた。

音次郎の死體を発見してからの熊さんは、一體驚き者の熊さんになつた、町を通ると「熊さんの御通りだ」と神機扱ひ、ぶつ〜と云ふ熊さんの奇抜なお顔が、大漁の占ひになつたからだ。

けれども熊に神機になつた熊さんは矢張り驚き者だつた。いくら熊の神でも、手に負へないいたづら小僧では、矢張り熊さんの眼裏には持て餘し者だつたので、とう〜町の總持の東と云ふ家の小僧にやられた。他人の飯を食はせたら、少しはおとなしくなるだらうと云ふのであつた。

總持東家の小僧となつてゐるうちに、夏の一月初めて奇妙なことが起つた。それは舊の八月だつた。三人の小僧が杖を並べて寝入つてゐると、枕頭が低いのが鋭い聲で、「小僧……」と手ぶらに熊さんの目が醒ました。

家人は誰も驚きまづつてゐる。ハツとして夢現に部屋を見廻すと、

き、熊への偉大な偉業となつた「驚き味の悪い子供や」と人々がつぶやいた。

音次郎の死體を発見してからの熊さんは、一體驚き者の熊さんになつた、町を通ると「熊さんの御通りだ」と神機扱ひ、ぶつ〜と云ふ熊さんの奇抜なお顔が、大漁の占ひになつたからだ。

けれども熊に神機になつた熊さんは矢張り驚き者だつた。いくら熊の神でも、手に負へないいたづら小僧では、矢張り熊さんの眼裏には持て餘し者だつたので、とう〜町の總持の東と云ふ家の小僧にやられた。他人の飯を食はせたら、少しはおとなしくなるだらうと云ふのであつた。

總持東家の小僧となつてゐるうちに、夏の一月初めて奇妙なことが起つた。それは舊の八月だつた。三人の小僧が杖を並べて寝入つてゐると、枕頭が低いのが鋭い聲で、「小僧……」と手ぶらに熊さんの目が醒ました。

家人は誰も驚きまづつてゐる。ハツとして夢現に部屋を見廻すと、

き、熊への偉大な偉業となつた「驚き味の悪い子供や」と人々がつぶやいた。

き、熊への偉大な偉業となつた「驚き味の悪い子供や」と人々がつぶやいた。

音次郎の死體を発見してからの熊さんは、一體驚き者の熊さんになつた、町を通ると「熊さんの御通りだ」と神機扱ひ、ぶつ〜と云ふ熊さんの奇抜なお顔が、大漁の占ひになつたからだ。

けれども熊に神機になつた熊さんは矢張り驚き者だつた。いくら熊の神でも、手に負へないいたづら小僧では、矢張り熊さんの眼裏には持て餘し者だつたので、とう〜町の總持の東と云ふ家の小僧にやられた。他人の飯を食はせたら、少しはおとなしくなるだらうと云ふのであつた。

總持東家の小僧となつてゐるうちに、夏の一月初めて奇妙なことが起つた。それは舊の八月だつた。三人の小僧が杖を並べて寝入つてゐると、枕頭が低いのが鋭い聲で、「小僧……」と手ぶらに熊さんの目が醒ました。

家人は誰も驚きまづつてゐる。ハツとして夢現に部屋を見廻すと、

き、熊への偉大な偉業となつた「驚き味の悪い子供や」と人々がつぶやいた。

音次郎の死體を発見してからの熊さんは、一體驚き者の熊さんになつた、町を通ると「熊さんの御通りだ」と神機扱ひ、ぶつ〜と云ふ熊さんの奇抜なお顔が、大漁の占ひになつたからだ。

けれども熊に神機になつた熊さんは矢張り驚き者だつた。いくら熊の神でも、手に負へないいたづら小僧では、矢張り熊さんの眼裏には持て餘し者だつたので、とう〜町の總持の東と云ふ家の小僧にやられた。他人の飯を食はせたら、少しはおとなしくなるだらうと云ふのであつた。

總持東家の小僧となつてゐるうちに、夏の一月初めて奇妙なことが起つた。それは舊の八月だつた。三人の小僧が杖を並べて寝入つてゐると、枕頭が低いのが鋭い聲で、「小僧……」と手ぶらに熊さんの目が醒ました。

家人は誰も驚きまづつてゐる。ハツとして夢現に部屋を見廻すと、

き、熊への偉大な偉業となつた「驚き味の悪い子供や」と人々がつぶやいた。

音次郎の死體を発見してからの熊さんは、一體驚き者の熊さんになつた、町を通ると「熊さんの御通りだ」と神機扱ひ、ぶつ〜と云ふ熊さんの奇抜なお顔が、大漁の占ひになつたからだ。

けれども熊に神機になつた熊さんは矢張り驚き者だつた。いくら熊の神でも、手に負へないいたづら小僧では、矢張り熊さんの眼裏には持て餘し者だつたので、とう〜町の總持の東と云ふ家の小僧にやられた。他人の飯を食はせたら、少しはおとなしくなるだらうと云ふのであつた。

總持東家の小僧となつてゐるうちに、夏の一月初めて奇妙なことが起つた。それは舊の八月だつた。三人の小僧が杖を並べて寝入つてゐると、枕頭が低いのが鋭い聲で、「小僧……」と手ぶらに熊さんの目が醒ました。

家人は誰も驚きまづつてゐる。ハツとして夢現に部屋を見廻すと、

き、熊への偉大な偉業となつた「驚き味の悪い子供や」と人々がつぶやいた。

音次郎の死體を発見してからの熊さんは、一體驚き者の熊さんになつた、町を通ると「熊さんの御通りだ」と神機扱ひ、ぶつ〜と云ふ熊さんの奇抜なお顔が、大漁の占ひになつたからだ。

けれども熊に神機になつた熊さんは矢張り驚き者だつた。いくら熊の神でも、手に負へないいたづら小僧では、矢張り熊さんの眼裏には持て餘し者だつたので、とう〜町の總持の東と云ふ家の小僧にやられた。他人の飯を食はせたら、少しはおとなしくなるだらうと云ふのであつた。

總持東家の小僧となつてゐるうちに、夏の一月初めて奇妙なことが起つた。それは舊の八月だつた。三人の小僧が杖を並べて寝入つてゐると、枕頭が低いのが鋭い聲で、「小僧……」と手ぶらに熊さんの目が醒ました。

家人は誰も驚きまづつてゐる。ハツとして夢現に部屋を見廻すと、

き、熊への偉大な偉業となつた「驚き味の悪い子供や」と人々がつぶやいた。

音次郎の死體を発見してからの熊さんは、一體驚き者の熊さんになつた、町を通ると「熊さんの御通りだ」と神機扱ひ、ぶつ〜と云ふ熊さんの奇抜なお顔が、大漁の占ひになつたからだ。

けれども熊に神機になつた熊さんは矢張り驚き者だつた。いくら熊の神でも、手に負へないいたづら小僧では、矢張り熊さんの眼裏には持て餘し者だつたので、とう〜町の總持の東と云ふ家の小僧にやられた。他人の飯を食はせたら、少しはおとなしくなるだらうと云ふのであつた。

總持東家の小僧となつてゐるうちに、夏の一月初めて奇妙なことが起つた。それは舊の八月だつた。三人の小僧が杖を並べて寝入つてゐると、枕頭が低いのが鋭い聲で、「小僧……」と手ぶらに熊さんの目が醒ました。

家人は誰も驚きまづつてゐる。ハツとして夢現に部屋を見廻すと、

き、熊への偉大な偉業となつた「驚き味の悪い子供や」と人々がつぶやいた。

音次郎の死體を発見してからの熊さんは、一體驚き者の熊さんになつた、町を通ると「熊さんの御通りだ」と神機扱ひ、ぶつ〜と云ふ熊さんの奇抜なお顔が、大漁の占ひになつたからだ。

けれども熊に神機になつた熊さんは矢張り驚き者だつた。いくら熊の神でも、手に負へないいたづら小僧では、矢張り熊さんの眼裏には持て餘し者だつたので、とう〜町の總持の東と云ふ家の小僧にやられた。他人の飯を食はせたら、少しはおとなしくなるだらうと云ふのであつた。

總持東家の小僧となつてゐるうちに、夏の一月初めて奇妙なことが起つた。それは舊の八月だつた。三人の小僧が杖を並べて寝入つてゐると、枕頭が低いのが鋭い聲で、「小僧……」と手ぶらに熊さんの目が醒ました。

家人は誰も驚きまづつてゐる。ハツとして夢現に部屋を見廻すと、

老師のお召し 熊さんの家出前 流石に両親の慈愛

を思ふと悲しかつた……

その手を、熊さんの顔から離すと、左手の指で何やら算へるやうな格好をしてゐたが、今度は仰向いて、考へ事をするやうだつた。熊て取を結んだ……無言、熊さんには、それが取を結んだなどと云ふことはその時は判らないが、不思議な力に魅せられて、流石の腕白小僧の熊さんも、布団の中から首を突き出して、怒る怒るその奇僧の所作を見てゐた。

熊さんは、熊の「う〜」と云ふ返事を聲に出して、靜かに眼裏にうつたのであつた。

翌朝暗いうちに眼が醒めた。醒めると云ふよりは誰かに起されたやうだつた。元來朝起きだつたがその朝は特別の早起きだつた。然し定まつた時間外に起きたためしはなかつた。若しも人が起しても金輪起きなかつた。それにその朝に限つて儼然よりも二時間早くつたのだ。

床に目醒めて先づ氣になつたのは昨夜置つた巻物一巻だつた。身體につけてはあられもない、納屋も危い、漬の味も心許ない、いろいろと思ひめぐらせた結果、板土間の床に寄り込んで、手探りで柱の根石の上を窺見した。

「これなら好からう」
素知らぬ顔で床の下から這ひ出ると、仲間の小僧達はまだよく眠つてゐた。

外へ出て、やうやく白んで来た空を眺めると、清々しい好い氣持であつた。

井戸端へ走り寄つて水ごころを

「小僧、お前の年数は幾つぢや」と押つかぶせるやうに云つた。

「十三」と僅に答へた。

白い衣の老ひた坊さんは、襟腕を近づけて、熊さんに寄り添つて手に熊さんのアゴを乗せて、首實

懐でもやるやうに、じつと顔をみつめた、柔しい顔が、何となく眼だけがキラ〜光るやうに見えた

すると、四邊も顧みず、老師は姿を改めて、大聲に、再び、
「小僧……」と叫んだ。その聲は何となく、熊さんの全身に、電氣でもかけたかのやうに、びり〜と響いた。

「小僧、能く聴けよ。俺には、先師相傳の密行がある、然るべきものにこの法を傳へんものと、那智山を出て、龍圖をへん隠し、法藏を求むること前後七年、未だにそ

とつた。その朝は特別に平常より、水をかぶる時間が少かつた。家内中が驚き起きて、朝めしになると、主人が小僧達を見廻して「昨夜は、お前達の眠てゐるところへ、誰か来なかつたか」と聞いた。

「お、ほんとはほんとに妾も、そんな氣がした。夢現ではあつたが……」

「うん、わしも聞きました、何じやら、大きな聲をしてゐた」
小僧の清蔵がハシを使ひ乍ら、飯粒をこぼし乍らいふ。

「熊と、妙な爺さんと話してゐたよ」
小僧の宗太はつけ加へて

「熊は、何か爺さんから言ひよつた」
「熊、ほんとうか」主人が訊した

「こりや大變だぞ」と熊さんは思つたが、知らぬ顔をしてゐた。

「宗太お前ほんとに見たのか」
主人が問詰める、熊さんが廻くまで白を切つてゐるので

「夢やつたかも知れまへん」と答

の器のあるものに出逢はない。この程木曾山に行き、歸路、尾張、伊勢路を経て富國に入り、空しく歸山する途次、この長島に、汝が奇僧を現はしたことを聞いたので驚らく足を停めて、お前の舉動を見て居たところ、我法を傳ふべきものは、お前を置いて外にないことが判つた。今日から師弟の縁を絶ぶから、その縁にこの一巻を興へる。身體に代へても大切にせよ又翌日からは自ら水行を持して身の汚れを清め、心の塵を拂へ。今より連れて山に行く筈だが、未だお前は、親子の因縁が濃きゆから、來年三月十日になつたら必ず那智山へ來い。道の程は海野院から古里三浦へ出て、孫藏の山を越えて、尾熊の方へ來い、俺は逆へに行つてやるから……」

と老師は嚴かに言ひ渡したのだけれど、實はその時は何を云はれたか、はつきりしない。身體中が他人のもの、ようで、ボウとして居たが、弟子にしてやるよ云ふこと、今日連れて行けぬが來年の三月十日那智山へ來い、毎日水ごころ

をとつて身體をきれいにしてと云ふことだけが聴き取れた。

そして渡されたのは一軸の巻物であつた。そして言葉のうちに、「汝」と云つたことが今日になつても忘れぬ印象として残つて居る。

巻物を授けると「これは誰にも他言はならぬ、三月十日に來る時も、親と離れ他言するでない、必ず云ふまいぞ」とキツと云つた。熊さんは寢床の上で起きて、例の「う〜」と返事をした。

「キツト言はぬな」と念を押した「云はん」と我を忘れて、釣り出されるやうに大きな聲を出して思はず返答した。

へた。
「熊、知らんのか」
「う、」熊に依つて遠のやうな返事で、平氣な顔をしてゐたので主人も
「そんなら夢かな」と一旦は納つたもの、どうも主人はふに落ちないやうだつた。
「熊、お前ところへ誰か来たんやろ」と又詰問し出した。
「知らん」と云ふことは、平常ならうその云へない熊さんには出来なかつた。そんな時は矢張り「う」と云ふ一手だつた。主人はとうとう焦れて来て「う、」では知らんどうちじや」だんだん鋭く詰問を初めたが、そうなる、熊さんの「う、」も伸々しつこいので、主人が機負けをして下つた。とうとうやむやみに納つた。
濱へ出て行つても、その日は熊さん、それで氣分が朝らかだつたらうその云へない熊さんには出来なかつた。そんな時は矢張り「う」と云ふ一手だつた。主人はとうとう焦れて来て「う、」では知らんどうちじや」だんだん鋭く詰問を初めたが、そうなる、熊さんの「う、」も伸々しつこいので、主人が機負けをして下つた。とうとうやむやみに納つた。

空腹を耐へて 那智山へ急ぐ

途中で昏倒、老師の出迎へ

熊のブツ／＼お経が初まつた。漁師達は喜んだ。
「おうい、熊のお経が好きぞ、濱は大魚だ」
果してその日は、嶺野の大魚だつた。熊人ははく／＼してゐた。家ではかくす場所に餘計に困つたが、やつと押入の隣の古葛藤のなかにそれを忍ばせた。その時古

なかつた。そんな時は矢張り「う」と云ふ一手だつた。主人はとうとう焦れて来て「う、」では知らんどうちじや」だんだん鋭く詰問を初めたが、そうなる、熊さんの「う、」も伸々しつこいので、主人が機負けをして下つた。とうとうやむやみに納つた。
濱へ出て行つても、その日は熊さん、それで氣分が朝らかだつたらうその云へない熊さんには出来なかつた。そんな時は矢張り「う」と云ふ一手だつた。主人はとうとう焦れて来て「う、」では知らんどうちじや」だんだん鋭く詰問を初めたが、そうなる、熊さんの「う、」も伸々しつこいので、主人が機負けをして下つた。とうとうやむやみに納つた。

た。すると一人の漁師が、妙なこゝろを云つた。
「そう云ふな、鳥は熊野の遺し者やぞ」と云つた。
熊野——と云ふ言葉は熊さんの一生を通じて忘れ難い印象を殘した。
「熊さんは愈々明朝早く家を出る、それも熊野には内密に、こゝろと思ふと、流石にうら悲しくもあつた。」
一人で家の隣にしよんぼりとしてゐると、父が案じて
「熊や、氣分でも悪いか」と聞いた。母も何だか様子を探して「濱から歸つて来た時から妙な顔をしたつた、風邪でも引いたのじやないかえ」とやさしく云つた。今更には熊野の心遣ひが、その夜は餘計に悲しく聞かれた。
老師のお召しの鹿島立ち、熊さんの家出の朝のいで立ちには、著なれた汚い布子二枚に、着替めたやうな三尺帯、そつと足音を忍ばせて、押入れから、古葛藤に入れた巻物一巻、何心なく腐れた短刀もつい腰中に入れた。心せくので、

古里を過ぎて、三浦を巻いて、引本へ出るともうひる過ぎだつた朝めしも食はずに飛び出したのだから堪まらない空腹を感じた。水で我腹を潤して来たが、もう堪まらない。通りすがりに、晝の食事の臭ひが往來にたゞよつて来る、いよ／＼こたへられなかつたが、腹の轟をおさへる代りに駆け足をやつた。
引本から一里餘り、それでも我腹に我腹を重ねて街道へかゝると一軒の飯屋があつたよしず張りの縁に、おいしさうなにはひがする。
飯屋があつても、持ち合せはない。そんなことは考へる餘給がなかつた。
ふらふらとよしずをくゞつて恰度飯を、皿にもつてゐるおぢさんの前にゆつと出た。
「小父さん、飯を一せん、振舞ふてくれんか」
「振舞ふどころか、こつちは飯屋ぢや、錢さへ出せば、一せんとはいはず、二せんでも三せんでも」
「その錢が無いのや」

「飯鬼のくせに何をぬかすか！」
おぢさんが恐ろしい顔で、拳固を振り上げた。こつちに運賃がないので、熊さんに逃げた。その勢ひで走つた。走つたけれど、熊さん、腹では、牛町も来ると、目がくらした。けれども飯一ぱいの無心で泥濘のやうに怒鳴られたんで強情の熊さんも反攻心が燃えた。「くそ！ はつてでも那智山へ行こぞ」
よろめくやうに西へ西へと歩いた。
「熊野の山にかゝつた。平坦な山道でもこたへた。とうとう峠へかゝると手で歩いた。二枚の足が空腹でふらふらだつたからだ。やつと總取へ来ると、夕日がじずみかけた。
那智山はまだまだ遠い。ころけるやうになつて、街道へかゝると、とうとう夢中でバツタリ倒れて了つた。
氣が遠くなつて、夢のやうな気分だ。夢をつかんだ。夢の邊だ、思はず本能的に口をそれを突ツ込んだが青くさくて流石にのどへは

那智の山中 岩窟内の難行

晝夜共に不眠の業 六日目に賞らる

「おぢめ、とつと、行け！」と怒鳴つた。
半ば失神したやうななかで、この「おぢめ！」の聲も、今に熊さんの眼裏には、それが忘れられない。「熊野」と云つた漁師の聲と共にまざまざと記憶から去らないと云つてゐる。
「小ぞう、寝つたか」
ひよいと正氣に返ると、聞き覚えのある、それは老師の聲。
「う、」とうなつたまゝ、熊さんは、思はず涙がぼろぼろと出た。熊のよになつた熊さんを、老師が肩を引つかんで、無理に立たせて、九字を切つた。すると奇妙に身體がしんとした。
「これをたべよ」
老師が一枚の葉に包んだ物を呉れた。噛みつくやうに、それをむしやむしやと食つた。
「うまいか、小ぞう、これからは毎日、この御馳走にやうまくなくても、これからの食物はこれだけじやぞ」
「うまい、うまい」
熊さんは、ろくに言葉も取に入らずにむさぼるやうに食つた。そして見るみる身體が意氣も回復した。
「こんなもの、今までに食つたことがあるか」
老師がニコ／＼笑つてゐた。
「い、や」
「何じや知つとるか」
「パンぢやらう」
「パン？」老師は、パンといふものを知らないしやつた。
「パンなぞといふものじやない、そば粉じや、修業者の常食じや、空腹には山道の珍味よりうまい、熊が大きいと一口も食へぬ。食ふものは生命をつなげばたり。今日からは單の物は一切食つてはならんぞ」

老師はおごそかにいつて、元氣になつた熊さんを連れて歩き出した。今度はねむくなつて来たので足が老師よりも後れた。

「ねむいか、小ぞう」

「よし」老師は静かに話しかけて、道ばたの四五本の薪木の根方をさして、

「そこへ来ろ」といつた。

海ならぬの隙でも隙るが、山は初めてだつた。熊さんは何となくこはかつた。

「何も来ませんか」

「現か来るかも知れんぞ」

「いよ／＼やり切れないと思つたが、

「そんなおおく様では、那智へは入れんぞ、さア寝たり」老師は

そういつて、下草の上に押へ付け

るやうに熊さんを牽らせて、三度息を吹きかけた。すると熊さんは

ついでと／＼と大木の根にグツスリ寝込んでしまつた。

未だに往還の大木の根の隙床で

が足らぬ。麓山を越さずに河通を十津川へ出て、麓山麓に目的の那智山へ向つた。

夜が明けて、はじめて老師の姿を能く見ることが出来た。

熊はちびれた白髪、肩と頬に深いしわがあつた。顔色は好い、透るやうな白肌だ。鼻筋で、肩間の隙に大きなホクロがあつた。

熊はけい／＼と光つて、眉毛が白くて長く、すこいやうで、何處かに影がある。鼻は小さく高く、眼に見えない影が白く輝つてゐた。

その時は六七八と見たが、熊さんが後になつて聞くと、すでに九十二歳だつた。

紀伊と大和の國境を通過して、その夜も山中の木の下で寝た。

熊さんが寝出をして、三日目のひる過ぎに、やうやく那智山へ着いた。

「小ぞう、とう／＼来たぞ」

いはれて四邊を見渡したが、お寺のやうなものも、家らしいもの

はおろか小ぢらしいものすらない。見渡す限りの山、空を突き抜ける巨木の森、麓の方でゴウ／＼と響か響かしてゐた。それこそ名高い那智の滝だつた。

「ゆる／＼休息をせよ、山になれたらお話を聞かせてやる。」と老師はいいつたが、どこで休息をするかとやら、まご／＼してゐると

「山中の修業に、家もしとねもないが、沙婆の師匠はこゝで波のじや」

「そういひながら、連れて行かれたのは、山のなかの岩屋だつた。

老師が先に四つばひになつて、三尺ほどの穴のなかへ這入つた。

穴のなかには何もなし、枯草が寝床だつた。そして老師は奥に座して、

「お前も、他のやうに座つて休息せよ」といつた。

その岩屋は、名だたる那智の洞の真上だつた。三月だから山中は寒に寒い、夜になると狐りが

のそ／＼来て穴をうかがつた。

十日ほどは、その怖ろしさにくに駭かれなかつた。

「お前が来るまでは来なかつたが、お前に奥の奥ひがするから来るんぢや」と老師はいいつた。熊さんは自分の奥ひで来るのだと知つて一層怖ろしくなつた。

「そんなに怖ろしいなら、この隙を叩け」

「そん／＼と夜びて叩いてゐると、成程狐は来なかつたが、熊の首が夜の深山にこたまして物凄

い老師は別に八益しなくもないと思えて、座したまゝ眠つてゐた。

毎晩隙を叩いてゐると慣れて来たが、狐やたぬきも慣れて、そろ／＼穴の口を訪問に来出した。殊に夜の寒さに穴口だつた。

文化風土記曰く、洞口熊は昭和聖代の靈障である、聖してこの靈障が何時になつたら着けるか、それは又より以上の靈障と謂はねばならぬ。或ひは現代の科學の境を以てしては永久に解けぬナゾとして隠されて行くかも知れぬ考へても見よ！思つても見よ！彼の名を慕ふて彼の前に連なる數百人の僧徒に、齋を吞まずでもなく、手を觸れるでもなくタツター一蹶の一喝か、アラ！不思議、齋を喰しホクロを取除け、ビツコを脱し、イザリを立たしめ、齋を止め、齋のゆがみを全消せしめる等全快の喜びに浸るもの全世界押し越して三十萬を下るまいといはる、ほど全消者を健全な社會に送り出してゐる。而も彼齋はそれ等を語るでもなく又全然隠知せざるでもなく、日々齋達される全快の齋に埋められながら息の彼の救世主としての立場に偉大なる自能を抱き、集まり寄る無傷人に一々面談して慈ろな齋を施してゐる。一部にはキリストの再来、一部には昭和の日蓮と見えられる彼の立場も齋師法蓮、又は其の他の聖名のもとに其の齋に齋された事七百二十齋、齋事起訴と決定して齋所の法蓮に立つ事四十齋、然し天は彼の齋なる立場を決して見逃さない、居齋法蓮の前で試みる齋な齋齋は悉く齋をして舌を巻かすめ齋に忍かに彼の齋をむふた齋

の朝まで——」

晝夜不眠の齋業だ。

境方近く老師はボカリと眼を開いた。

「いくつか」

「千二百です」

「遠いぞ、初めてだから許す、今夜間違つたら承知せぬぞ」

齋も座り詰めた、少しでも眠るとしかられる。夜が来た。齋の齋定、齋だ。

「いくつか」

「千二百」

答へる間もなく、ビシヤリ！齋面をやられた。同じやうなことが續いて、毎日取られる齋が一つづつ増して行つた。一生齋命に尊へてゐただけれども目だつた。

六日目の朝には、不思議と、「いくつ」の問ひがなくて、「来い」と老師が先に岩屋を出て齋の洞口へ連れて行かれた。

二人が夫々、自然に定まつた場所へ、水ごりをして、夫れが齋を齋と、老師は齋へ飛び立つて、「小僧、昨夜の齋はいくつか？」

「四千二百」キツパリ答へた。

人の齋徒人に、齋を吞まずでもなく、手を觸れるでもなくタツター一蹶の一喝か、アラ！不思議、齋を喰しホクロを取除け、ビツコを脱し、イザリを立たしめ、齋を止め、齋のゆがみを全消せしめる等全快の喜びに浸るもの全世界押し越して三十萬を下るまいといはる、ほど全消者を健全な社會に送り出してゐる。而も彼齋はそれ等を語るでもなく又全然隠知せざるでもなく、日々齋達される全快の齋に埋められながら息の彼の救世主としての立場に偉大なる自能を抱き、集まり寄る無傷人に一々面談して慈ろな齋を施してゐる。一部にはキリストの再来、一部には昭和の日蓮と見えられる彼の立場も齋師法蓮、又は其の他の聖名のもとに其の齋に齋された事七百二十齋、齋事起訴と決定して齋所の法蓮に立つ事四十齋、然し天は彼の齋なる立場を決して見逃さない、居齋法蓮の前で試みる齋な齋齋は悉く齋をして舌を巻かすめ齋に忍かに彼の齋をむふた齋

初めて老師は久し振りにニコリとした。恰度齋の方が白んで、脚下に立ち昇る齋の齋の水煙りが五色に輝いた。

「今夜から又別の齋じや」

「つ卒業したので、興味を持つてゐたが、夜が来ると、齋を出されて齋いた。

「今夜から、お前自身の齋を算へるのだ」

これは熊さんは齋つたが、やつて見た。

「お寝みなさい」そういつて早退齋へ出したら、老師が齋つた。

「小ぞう齋とらん」

「齋て了ふんですか」

「齋たら齋へられん」

「では齋てゐるのですか」

「齋てゐたら齋へられるのは齋り前じや」

何が何だか判らない、長島時代に、齋師齋が好く云つた——齋か齋るのか、齋木が齋るのか——ひよいと其の齋を思ひ出した。

彼は齋るのか齋らないのか——

何だか判つたやうな判らぬやうな齋で、齋へて見たが、それも齋

も一、二にして止まらなかつた。如何に彼の齋が齋にして而も齋齋齋なるかは何人も察し得られやう、齋師の齋もなく天下齋齋に齋齋人を治す齋齋齋齋は今や世界的齋人の一人として齋齋に齋く日も齋くはあるまいではないか、不治の齋に齋める人々よ、齋

那智の山奥に

難行のその日

老師の寝息を数ゆ……

狐や狸の訪問

けれどまだ／＼度齋も齋るし慣れて来た、齋をた／＼のをやめてうと／＼とすると齋がやつて来る、ごそ／＼と穴をうかがふ齋を見計らつて、カア／＼と突然た／＼いて見ると齋が齋いて齋ける。それが齋さんには面白い夜の齋ひになつた。それを齋師が知つたら早退齋られた。

「齋齋と齋も、生あるものじや、人を齋かしても好くないと同齋、

「今日から、齋齋をさせる、齋齋を入れて齋ご齋齋を取つて来い」といはれた。

「吸ふ息を齋の底へ入れて、吐く齋を齋の底から出せ、尻を地に押し付けて、齋り齋齋を齋かすな」

「これだから大事の齋業だ、彼はこれから齋る。其の齋の齋齋を問

「千二百」

「千二百」

目、驚愕を覚かすが始まつた。

おまけに狐やたぬきの跡以外に穴のなかにまでやつてくる蟻の跡。これには驚いた。蟻はとすると「他所見をするな」とビシヤリ。八日目にやつと折かんを連れて「来い」と岩屋を連れ出された。例のところで水ごりをして、何時ぞやの朝のやりに、

「いくつ」

「二千六百」

「善哉々々」と老師が云つた。

夫れが折むと、いよ／＼飛行に移た。其の頃はもう冬が深山に訪れた。

三の瀬の下に立つて、肌を撫すやうな寒氣のなかで、落ちる瀧を見守るのだ。

夫れも、口を閉ざすだけではない、正面にとりと落ちて来る瀧を、師の指す通りに眼を上下に送つて、瀧の水を見つめながら、千萬の瀧のやうな水滴を足上げ見下すのだつた。

崖み切つた山氣と共に、毛穴のなかに水がじみ入る。其のうちには蓋と自分の身體が響て解け入るやうになる。

やうになる。

◆文化風土記子から

この熊業者の熊さん、山口熊業師は往訪の余に次のやうなことを語つた。

「私が行ふところの熊業の真髓は口にいふことの出来ない、筆に記すことの出来ない至理妙奥の極所である。然しながら、言へぬ、書けぬといつてしまへば、世間との理解的交流が絶える。夫れでは私は再び那智の山奥へ歸れて世俗との折衝を避ける外はない、熊師實川上人は三密修法の成れる私を社會へ送り出すに當つて「この金ごころ成時方」を以て一切衆生の無量無邊を救へ。世間者のたゞ中に汝の身を置く時、そこにはじめて修法の善果を結び得ん」と訓へられた。師の遺訓の真意は「汝が天賦の資質と捨て身の修業によつて成就した三密の功力を以て、世間難治の病者を救ひ、併せて三密の成時方を具體的に示現して個々の成時方を具體的に示現して個々の成時方にはうこうせる聲聞(學徒)に轉悟の機會を與へよ。此成果を

苦業の果て

老師に刀を

熊さんも自殺を遂に秘儀を受く

「可し」と叫ぶと老師が、瀧の水の真下に飛び込んだ。聞いて飛込むと、激しい嵐に身體を打たれて、押し出される。熊が存く、

「秘儀」を秘儀として師にすがらうとするのを、ビシヤリ、水のなかに倒れて起き上ると又転返す、瀧の水に押されてよろめくと又折

後の五十日間、實で秘文と、文字を齧つた。瀧山が響に包まれる、嵐が山頂をほえたける日、嵐のなかに水の家のやうに冷たかつた。

ひどい手足の凍傷だつた。

「まだ、里の食物が残つてゐるからじや、來年の冬は、そんなことにならぬぞ、安心せい」

四十九日から、第二の瀧の修業、岩から岩へ、瀧の赤まつが凍つて、氷晶の岩のやう、嵐のやうな氷柱、それを打つ飛はくの下に立つのだ。

その時に秘法を授けられたがそれは熊業師は今に口外しない。決して萬物凍るなかに立つても、つまさきも凍らぬといふ秘法だ。けれどもそれは言ふでなかつた。秘へられても、氷のやうな瀧のなかで、毎日のやうに押流され折かんを受けた。三日目の熊業の難、熊さんは、そつと短刀を忍ばせた。家出の時に古葛籠から持ち出した一口だ。

した。もう瀧を見ただけで、驚かした。折角の修業が皆ケシ飛んでしまつたやうだつた。

「いつそ死んでやらう」

師の姿が感嘆のやうにも見えたと短刀を取り出して、デサと腹に突き差した。

「小僧、何をやる」

叱たされたが、夢中だつた。とられた手がしびれたやうだつたが狂氣のやうになつた熊さん、自棄くそになつて、サツとほとぼる自分の血に狂つて、老師に短刀をふりかざした。

「どうでもなれ」と思つた。

けれども短刀をかざした手は、老師に向けた刀は、たわいもなく叩き落された。そして老師は怒るかと思ひの外、どつと叩き落されて、尻餅をついた熊さんに向つて老師は合掌してゐた。

熊さんはほう然としてゐた。師は熊さんに近づいて、

「宜し／＼、それだけの根柢があれば見込がある。もう一息ぢや」老師はそう云つて、九字を切つた。

「それ、進め！」

それを聞くと熊さんは、思はず瀧の下へ突進した。瀧の巻ろしい水が目から消え失せたやうにも思へた。

「秘水」の呪を讀んだのだつたその時の呪の響は、熊業師の今日なは、成時方を授けてゐる。

その時から十八日目に「善哉々々」を受けた。それから又もや岩窟内の業、秘儀の口授を受けたある日、新しい修業が又初まつた。

いはれるまゝに十津川の山中へ連れられた。佛け袋にそば粉を詰めて、其の夜は山中に寝て、翌日の夕方十津川の奥に着いた。

大きな樹の根に大きな石だたみがある。その石上が寝床、そこでいよ／＼「飛行の術」といつて、

それは空をかけるわけでない。高飛びとびのよるやうなもので、高山をよじる時の用意だつた。これは五十日程で出陣の響れを見せた。それが折むと山を一す下りて、里

人へ送つた。

「今日は数日ですか」

何のことはない、山中に月日なしなので、里へわざ／＼出て来て月日を感めるのであつた。

三月頃だつた。その日も珍らしく、外方になると、

「今夜は寝まいぞ」と老師がいつた。

「なぜです」

「一年中の飯を糞にとりに行くのぢや」

眞夜中に佛け袋を持って、山を降りた。そして麓に近い森のなかへ入つて行つた。つぼのなかの岩かけに、自然石の手水鉢やうなものがあつて、そのなかに、そば粉が一パイあつた。

それは後になつてわかつたが、何故そこには、そんなにそば粉があつたか——それは毎年三月何日とかに、村人が、山神に供へるといふ習慣があつて、一年中の作物の保護を神から受ける報酬といふ

ことになつて里人は、そこを「そば捨の山」と呼んでゐた。

凶作で、里人が、そば粉を棄てない年は、老師はつばきと桂の實から煉つた油に木の根をつけたのを食用とした。

◆文化風土記子から

天下の救世主といはれてゐる、熊さんの瀧口熊業師を東京市芝區高輪町六番地の東京事務所を訪へば師は次のやうに語つた。

「熊業の人々、私の心身が結びつく事、それが熊業師の根本義である。故に私の熊業所に来て私の前に座する人々は、既に熊業が熟してゐるから、これ等の人々に對しては最早前説の秘法は要らない、目前の生きた事實がすべてを證明するからである。たゞ私の前に來ない人、私と熊業を結ばぬ人、それ等に對しては私と熊業も何ともいたし難いである、綠なき熊業は度し難いである。然し度し

難しで棄て、しまへば、私の志すところの善果は成就しない、けん乎たる師訓は私に向つて左様な生温いあきらめを許してゐない、私の天性もまたかくの如き不徳なる行為を是認しない、愚へる者のすべてを私に來らしめよ、これが瀧口熊業師の念願である、そのために私は常に大聲叱呼してゐる

「熊業に來れ」とかくいふのである。熊業に來れ——私においては此の一言こそ最も秘教的なものである。熊業を表現した言葉なのである。然し、物事の理由を知解しない世人(即ち三密不具足の現代人)には、この短い言葉だけでは判らない。そこで口に言ふ熊業はざる事由を述べたり書いたりしなければならぬ。この一事が私の痛苦である三世の因果よりも恐ろしいのは言語道斷の境地を舌頭に上すことである、古語はこれを以て「地獄の所業」と説いた、まことに言ひ得て眞實である」と。

瀧壺へ消えた

老師の臨終

熊嶽の名を授かり

極意を受けて山を出る

那智の奥に入山して三年の月日が流れた。そして、漸くの事に其日か来た。

「極意を傳へる、いつかの巻物をとつて来い」長島村で預かつた師匠の巻物、瀧の上の水ごり場で見つけた。

「ハッ」と答へて、狂喜して富の方へ走ると、老師が呼び止めた。振り返ると、師匠の跡を追つて行く、遠くで老師が手を擧げて揺りやうだ富へ降りて師匠の前へ飛んで行つて手をつく。

「小僧、今こそ極意じゃ」

熊さんが解し兼ねてゐると、言葉も聞かぬ、今汝を呼んだぞこそは極意だぞ、手を擧げたは、師匠を

「師匠がをられるなら何時までも山にをります、をられぬならなせん」

「そんなら、里へ行つて僧になるか」

「坊主は嫌やです」

「では、元の老師になるか」

「もう養生は出来ません」

「養生は」

「します」

「酒は」

「飲みます」

「肉食は」

「食ひます」

此られるかと思ひながら、聖悟をきかして、大膽に答へると、老師はカラ／＼と笑つた。

「どうも僧にはなれぬ、それもよし、ただ養生を忘れるな」

そいつて、元の瀧の落口の方へ歩いて行つた。

そして瀧を上から見ながら、思ひ出したやうに、又口を開いた。

「もう一つ言ひ渡す事がある。汝にやつた一巻は、お前がしや彼の縁が盡きた時、初めて開いて拜見せよ、注は口傳、衣鉢を授くる弟子に傳へ、一巻はおれがお前にした通り、決して披覽を許すな、あの一巻は佛法の証しや、ゆめ／＼忘れるな」

「承知致しました」

「夫れでよし」ニツコリ笑つて、瀧から縁文をしようとした。が、隙に立つて、神々しい姿だつた、夫が終ると、ハッと思ふ間に、枯木が倒れるやうに、たきつぼめがけて、ペタリと墜ちて了つた。

岩にかじりついて、下を見ると師の姿は、たきつぼめの下に、跡もせずに横たはつてゐる。

私は泣き聲を上げつて「お師匠さん／＼」と呼んだが、たきの音にかき消されて我耳へ届かぬほど、心は狂気のやうになつた、何時も早く師の傍へ行かうと廻り道をして苦心して、たきつぼめに降りた、葛をつかんで岩をすべつて、血みどろになつて駆け寄ると、師は無縁死んでゐた。

せめて水を手向けやうと、書架を取らうとすると、すべり落ちて熊嶽は足を折つた、身動きが出来ない、この上すべつたら千じんの

谷だこれではならぬとこん身に力を入れて折れた足を抱へて九字を切ると、不思議や氣合と共に足がケロリとなほつた。石を投げて書架を枝から落して拾はうとしたがハラ／＼と落ちる葉に手が届かぬ。また投げる、幾度かやつてゐると手を擧げただけで、葉が落ちる。面白いやうに念力が届くのだ。手向の水を忘れて、書架をにらみ落して自分作らの不思議な方に魅了してゐた。

やつと水を手向けて、老師を拜ふ姿を知らぬので、里へ出た。

里へ出て村人に其の事を傳へると、村人のなかには、熊嶽のことを知つてゐたものもあつて、

「やれ／＼、お上人様が亡くなられたかのう」といつて、駐在所の巡査までがやつて来て、熊嶽島嶽を尋ませた。

熊嶽は七日間亡き師のため元の富に籠つて、それから山を下つた山中に熊嶽の一巻、三年間の瀧たりの白衣と、家出の時の布巾一枚、たもとに師のすりのすり鉢一個を入れて、縁文はほこらのなかに

一活して強した。

「乞食坊主何をぬかす」と怒鳴つた。

けれどもお守りがほしいので、いろ／＼と熊を殺した末、そつと社務所の後ろから廻つて熊さんの裏の下に忍んで、熊さんが居眠りでもするのを待つことにしたが、熊は伸々ねむらぬ。そのうちに自分が寝込んでしまつた。

うと／＼とすると、妻あさんがお守りを買つてゐる。そしてお守り賣りと立ばなした。

始めて示した

奇蹟の初陣

腰の立たぬ娘を

一喝して歩かした

「娘がな、大の熊嶽ひ、おまけに三年足腰が立ちませぬのぢや」

不慮小取にはさんだ。待てよ、足腰なら、娘の自分の足を折つたのも一氣合でなほつた。ひよいとすると、多年の修業で、他人の足を

「どうです、お婆さん。娘さんの足腰を癒して上げるからそのお札を一枚くれんか」といふと妻あさんがうなづきました。

「怪しい者ではない、那智の熊嶽上人の弟子じゃ」と今までの修業の話を熱心に説いたが信じない。少し心が動いたらしかつたが「今までに随分、えらい坊さんに診て貰つたが駄目や」といつた「宜しい、そんならわしが、先づ何かしるしを見せやう」熊嶽は路傍の柿の木の下へ行つて、九字を切つた。するとハラ／＼と青い葉が落ちた。妻あさんはそれを見て「南無へん照金ごう」と唱へた

そこで二里ほど行つて粉川在の妻あさんの家へつた。

四年振りで人間の食ふ御馳走を食べさせられた。久し振りの火食は熊嶽には焦げくさかつた。

妻あさんは、娘の施術を受ける前に、道所に隠れて隠つた

「天狗のような小僧さんが来なすつた」

夕暮になつて廿八人の人が集ま

つて来た。熊は廿七八、哀れにやつれ果てゐた。熊嶽は、すり鉢と椀ばしを持って来させて、鉢に水をもり、ようじを井げたに組んで熊嶽を洗つた。在家で修法するにはこうするものと、師の傳授があつた。

やをら熊嶽の娘に向つた。見知らぬ人々が好奇の眼を向けてゐるはじめて他人に施す術だつた。初陣のような興奮を感じないでもなかつた。

術を切つて、「立てい」と一喝すると、不思議にも娘が、フラフラと起つた。

人々の驚き妻あさんの狂喜、一瞬間のやうにはやし立てられたが熊嶽は約束の、先刻のお札を置くと、逃げるやうに家を出た。そして、急いでお札を破ると、紙片に「アウンキヤラ」とボン字で書いてあつた。

アウンキヤラの意が判らぬ。そのまゝ山へ引返して、富へ行つて師の隠した縁文を讀べたが判らぬ判らぬまゝ、十津川まで一寸行つて富へ引返すと富にたくわへた油

が濡れ出でゐる、縁文を取りまて持ち去らうとすると、熊が一匹死んでゐた。熊は油に濡れて死んだらしい。油は熊の實と松の葉とを絞つたものだ、これになめくじを溶かし込んだもので墨汁を作り、ボン字を書くこと「アウンキヤラ」でなくとも熊よけになることが後に判つた。

再び和歌山へ出て、妻あさんの家の娘の様子を見に行くと、妻あさんに見付かつた。熊は瀧に歩けるやうになつてゐる。とう／＼近所の病人が聞き傳へて四五人がだんだんに三十五六人、毎日のやうに妻あさんの家へ押寄せ治癒を求めたそれが噂になつて、和歌山市中に熊はり寺町に入れられて毎日々々熊山のような人を癒した。

そのうちに同地の名道家、鳥籠、田村正親、太田正右衛門、山田治兵衛などといふ人々が深く信頼して

「この上、熊嶽をしたら、鬼に金持だ」といふのでとう／＼無理矢理に、京都だいたい一院の印書部林へ入帳の手續きをしてつた。そこ

一年餘を遊學して、卒業すると和歌山市小人町安養寺の住職になつた。

城主は、安養寺へ歸まつても生かされて佛具類は手當り次第に買拂つて貧民に施した。

だん家がそれを喜ばぬのは當然のことだつた。そこで熊嶽は寺を脱離に一任して、自分は新編を脱門にやつた。そして大看板を掲げてとうとうその方を脱門にはじめ、霊寶のやうに求めて来る患者を治療した。

とうとうそれが、和歌山警察署の検しむところとなつて、告發された。その後七十回と告發された事件の皮切りだつた。

それから、追々と世間の問題となつた。明治の時代では、熊嶽は一世の才であつた。今日では彼の有する不思議な術に對しては科學的にも、何かと説明はついてゐるようであるが、實際はへん明されてゐない。

患者はかれの術に驚して、いろいろと名前だけは與へた。

熊嶽大學の醫學士は「動物の電氣」といひ、東京帝大の心理學教授は「熊嶽の術」と名づけ、神學者は「熊嶽の術」と呼び、武道の達人等は「氣合の術」と夫々種々の名稱を付してゐる。

◆文化風土記子から——
昨年東京へ現はれた三重縣の生んだ奇才、本編の「熊嶽」で御馴染みの熊嶽の術の所を一日、駆け足でのぞいてみた。

第一熊嶽の所は、芝櫻川町の熊嶽の交正俱樂部、第三熊嶽の所は芝櫻の伊血子の熊嶽館の三ヶ所である。熊嶽の所は芝櫻川町の事務所の二階で、午前五時半には起る、起るとあの熊嶽でも、往年の熊嶽さん時代からの習性通り裸體のまま飛び出して冷水浴をはじめ、そして朝食を軽く済ませると先づ花村の方から熊嶽の術の所を廻るのであるが、午前七時を待ち兼ねるやうにして、第一熊嶽の所は熊嶽を受けんと押しかけた人々で玄關先きは大勢な賑ひだ。熊嶽の所を

大盛況にしてゐるわけがわかつた。熊嶽だと下足の脱ぎが出来る、これがお寺などでは下足を脱いで来なければならぬ。それはさて置き、當の熊嶽の術は、その数百の病める人に、どんな風に處置をするか、余は頗る興味を持つて眺めてゐた。

足の踏み入れる餘地もないやうに、患者と付添ひの人々で埋まつてゐる。熊の乳をつかみながら泣いてゐる裸身らしい子供、背ざめた青い婦人、頭を垂らせた病みなかに、サツサと熊嶽の術の音が響きわたる、病む人々にも何となく活気が感はるやうにも見える。

先づ患者に接する前に、熊嶽の術、水を切る。これだけの行を必すやるが、それだけでも患者はシんとする。あとは「エイ」と一喝する大きな氣合、熊嶽を携ふやうな手つき、この熊嶽一喝、それだけでそれだけで、熊も牛分の人々は喜々として膝つて行くかと思ふ。乳の出ない母、熊の術みなどは、一喝熊嶽だし、その

効果も際立つてゐるので、それ等の患者は服して暫ふとまるで狂氣のやうに喜び騒いで歸る。

受難の半生と

熊嶽師の眞價

法廷に立ち却つて

示現した妙術の奇蹟

本編の熊嶽自身は「人身自由術」と稱してゐる。本人にいはせると「世間では、この名前が妙だといふが、私はこれが正しいと信じてゐる。外國へ三度も行つて何か外に適當な名はないかと思つたが、結局何ともならなかつた。西洋の學者も、只々驚いてゐるばかりだつた。私は今では眞言の術じやない、術は眞言密教から出てゐるが、眞言の秘法をやつてゐ

あつたか、これよりさき同女は熊嶽から十五日通へば歸るといはれてその言葉に従ひ、十五日の去る廿七日不思議にも拭ふが如く目が明いたので戻さぬ患者もその熊嶽のあらたかなに愕然たるものがあつた。

間から往々誤解を受ける。自分では突飛とは思はぬが、世間から見ると、熊嶽突飛に見えるやうだ、それも、熊嶽、奇な人間と思つて看過してくれるだけなら好いが、愈々地獄の道をつけて、熊嶽は奇をてらふのだと云ふ。

熊嶽は不思議の術は使ふが、そんな世襲りの術は使はぬ。實際、世襲りや交際にかけては阿呆時代と對らぬ、世間の子供ほどの手もない。

熊嶽定や、あたり前の言葉も、近頃になつて解く難い位だ。文學と熊嶽と習字は、山の中で熊嶽へられたが、新聞とか手紙とかは、これも數年前にやつと裏めるやうになつたので、日は浅い。

熊嶽や科學等の術語も、必要上近頃になつて少々難いだが、熊嶽からいつたら、まだ「熊嶽」の語ではまるで馬鹿だ。交際や熊嶽を知らぬ熊嶽では、まるで野郎だ。これは奇をてらふのでなく、其缺點を除くために、日日、人間學や熊嶽式を習つてゐるのだ。苦しい思ひをして、涙を流して書き留めて

熊嶽大學の醫學士は「動物の電氣」といひ、東京帝大の心理學教授は「熊嶽の術」と名づけ、神學者は「熊嶽の術」と呼び、武道の達人等は「氣合の術」と夫々種々の名稱を付してゐる。

る。かつて私を愛してくる大熊嶽が、

「お前は人間の眞似などせんでも好い、人間の眞似が餘り上手になつては、世間並になつて、術が利かなくなるだらう」と云つたことがある。

別に人間並になつたといつて、今熊嶽が利かなくなるとは思はない。私は三密の秘法を知つてゐる。その秘法はそんなに熊嶽に失ふものじやない。

三密とはどんなものか、それは如何なる場合でも金ごう不慮だ。一つは秘の天性にあるのだ。熊嶽の小僧が、師匠から見込まれて熊嶽をして贈得したもので、容易に説明しても判らない。

熊嶽は飯を食ふ時は酒、酒を飲む時は酒、女に對する時は女、術を使ふ時は術と、時と場所に応じて相手の物に全精神を注ぎ込む。或時、東京の某伯爵邸へ招かれた。その家の夫人がヒステリーなつたが、術を施してから熊嶽へ

通された。

自分のある人が他にも判然居たが、私を研究するつもりで遊んでゐた。いろいろ「質問」などが出て、熊嶽が洋食の饗應となつた。その洋食が非常に甘かつたので、私は熊嶽と熊嶽（フオーク）の術をほらり出して手づかみで食つた。すると末席の人が「奇をてらふ」とさやいた。そして「故爲とだ」「イヤ、自然だ」と熊嶽を眺めた。私は熊嶽臭くやつたから挨拶もせずサツサと歸つて了つた。「青びよたん」の華族なんか、三密の術が判るか……」

熊嶽は、其の名が盛ると同時に、熊嶽から告發された裁判沙汰にもなつたことは先に述べたが、そのうちでも興味ある話を二三熊嶽しよう。

それは明治三十六年のことだつた。神戸地方裁判所で、太田判事が個人の資材で、熊嶽の術を見ることがある。

裁判所前の河野代書所の二階でそれは行はれた。熊嶽のこの日のいでたちは、熊嶽の納衣に、

熊嶽の術を施した動物。年はまだ二十六歳だつた。

熊嶽が「九字」を切るとはとうするの時の回答が面白い。

熊嶽「それは、かうするのです」
二本の指を一方の掌に當て、硃をして目をつむらし、恐ろしい威容を見せた。

熊嶽「その九字とは何か」
熊嶽「それは判りません、行の威容を、經文と三つ揃つてしや要のこを忘れて、新な心になつて初めて行はれるのです」

熊嶽「九字公文とは何か」
熊嶽「眞言密教の法です」
熊嶽「それはお前の説明か」
熊嶽「大目録にありますが」
熊嶽「その秘法を説明せよ」
熊嶽「それはいふには出来ぬ、法の説明は一日や二日では出来ませぬ、大目録は一卷から十巻まであつて、中々出来るものでない、自得するのです」

熊嶽「それは、かうするのです」
二本の指を一方の掌に當て、硃をして目をつむらし、恐ろしい威容を見せた。

秘蔵の主人公濱口熊嶽師は相變らず、對馬郡の鹿嶋「花柳」下谷橋入谷町の「交正俱樂部」伊血子の「瀧澤館」の三ヶ所を施療所にして、連日探訪する五百名以上かと思はれる患者を前に、傑の不思議な術を行つて「エイ、エー、ヤッ！」などと元氣の好い聲を響かせてゐるが、その聲は妙薬の邊りでも響いて来るので「あ、先生やつて居るな」と外からでも知れる位だ。

師のこの気合は、謂はゞこの治療の重大な役割で、あの聲だけでほんとうに病人はなほつた氣になるとよく人が云ふのだが、それに就てはこんな説もある——
かつて三重縣警察部長をしてゐた瀧澤氏が、在任中その母室が病氣になつたことがある。三重縣は濱口師の郷里であり、瀧澤部長は自分の勤める郷の生んだ奇才として濱口師をかねて知つてゐたので、濱口師の氣を、それでも當時は半信半疑で治療を申し込んだものだ、すると師は其の母室を電話口に呼び出して、電話器を通じて

師の氣合をかけて、其事に治してしまつたといふのである。それから瀧澤氏の師に對する敬慕は、別となつた。

二密を語る

熊嶽師の哲學

口や筆で説明出来ぬ境地
それを語るは苦しい

大隈で現在熊嶽師は、大日本天龍學院と云ふのを設置してゐる。各地を時々へん廻して施療する外に熊嶽の講習をも初めたのである。リョウマチやいざりの立つ法などに熊嶽の巻を開放してゐるのだ。彼の秘法に就いての語は、時々識る其の能念のなかにも漏らされることがある。

嘗て彼は水ごりについても、こんなことを語つたことがある。「瀧澤、學者達が、大變態をしたやうに冷水浴の妙能を吹聴してゐるが、我が法にあつては、何千年

の昔から一切理屈なしに、眞面目に實行してゐる。私の術でも其通りで、こゝに廿年以前までは、山師坊主だの、香具師だのと、まるで熊もゆかりも無い人までが、私を眞の仇か何かの様に攻撃したが、瀧澤は、最も進歩した醫術に依つて、藥劑を用ひないで、心理的療法を施すなどと金看板を掲げた大醫院が、密部の眞中に出来たりしてゐる。心理的療法などと云ふものが果して最近の發明か疑ひは大昔からチャンと手をつけた奥の院へ理屈

と云ふ道から滑り込んで来たものか、私はそんなことは知らぬが、兎に俾、世間は氣の短い間に學術と云ふ名のつくものに引かゝると馬鹿に道義を喰つて、ノロノロとしてゐる。併し有難い事には、一歩々々提灯で足元を照して来るから道の順序が能く判るやうになつて、おかげで私も眞の仇を免れた。此の後から来る提灯持ちがなかつたら、私は疾ふの昔に彌次馬の手でひどい目に遭はされてゐた。私は科學は眞人だ。だから私の射體や術が、科學研究の材料にもなるのであつたら喜んで提供する考へだ。

さて水ごりだが、つまり瀧澤の冷水浴（即水ごとりと冷水浴とは其の觀念の上で、甚だしい相違があるのだが）の價値を世人は、大分認めては来たが、惜しい哉それは、既に身體を壯健にすると云ふ意外にも、もつと大きな功徳のあることを考へない。可哀相に千金の値のある冷水浴を半分にも賣へない所以だ。

「汝の生れつきの素質と、捨て身の修業で成就した三密の功力で世間統治の術者を救ひ、併せて三密の感動力を具體的に示現して、偏習のちまたにはうごう、聖職（學徒）に轉悟の機會を與へよ。この成果を見るのが出来なければ、汝の那智山中、瀧三年の斷食修行は何もならないぞ」と云はれたのである。

だから余は、山を出て三十餘年、日本内地は云ふに及ばず三密の術を遊遊して一心不亂の施療を續けて来たのである。瀧澤流の言葉で云へば、大衆の眞つ只中に突入し、大衆の病患の痛みのために、その身代りとなつて病氣、痛電とた、かひ叱た突撃に無形の氣を揮ひつけてゐるのである。

余の所謂「施療」の根本義とも云ふべきものは、病患の人々と余の心身とが結びつくことである。だから余の施療所に来て余の前に座する人々は既に病氣が熱してゐるから、之等の人々は決して最早何も醫藥を用ふる必要はない。

目前の生きた事實が、すべてを説明するからである。たゞ余の前に來ない人、余と體氣を結ばぬ人、それらに對しては、余と雖も如何とも致し難い、佛家の所謂、「縁なき衆生は度し難し」である。然し「度し難し」として棄て、了へば余の志すところの結果は成就しない。斷つた余の師の訓へは余に向つて、左様な生温いあきらめを許さない。

余の天性も亦、そうした不徹底な「眼」の昔から氣性として許されぬ。「思へるものは皆來れ」これは余の畢生の念願である。だから余は常に大衆疾呼する「眼に來れ」と——。この構構、率直な言葉は、如何に人に響くかは知らぬが、余としては、この一語こそ余の全體を表現したものとしてゐる。然し、物事の理由を理解しなければ承知しない世人、余をして云はしむれば、三密不足の現代人には、これだけの短い言葉ではほんとうに余の叫ぶ意味が判らない

そこで、止むを得ず口でもいへず書いても書けぬ理由を矢張り、なんとか書いたり、いつたりして出来る限り説明しなければならぬ。この一事は余にとつては誠に痛苦だ。この上もない苦痛だが、どうも致し方がない。これは三世の因果よりも恐ろしいことだ。言語同體の境地を、舌の上に上すといふことは古語にはいせると、これを聖地獄の所業といふ位だ。まことにそうだ。

そこで地獄の上を一足飛びにする心持で、熊嶽師の極所を述べて見やう、但し述べたと云つても、畢竟は以心傳心である。水面に映る飛鳥の影のやうなものである。人は考へる。考へることによつて人は進歩する——といふが、余はこの進歩といふものは、赤化の一部分だと思つてゐる。變化は大體で進歩は大體の一部分に過ぎない。變化といふ場所から見れば進歩も進歩も同じものだ。皆これ本然の移動であり、生死の流轉だ。言葉を替へて云へば、考へることによつて進歩はするが、考へな

故郷にも容れらるる豫言者

郷黨に千金を惜しまぬ
濱口熊嶽師の義俠

豫言者は國に容れられないといふのが世間通有のことだが、わが三重縣の生んだ奇才、濱口熊嶽師の場合だけは全く例外である。

夢通自在、摩訶不思議の術で、全職はもとより、遠くアメリカ邊りまで、その名を知られ、厭者

には誠の如く迎へられる濱口師も最初の間は、容れられないといふわけではなかつたが、「何だ阿房師が大きくなつて歸つて来たよ」——位にしか見られてゐなかつたが、それから後に、彼が歸郷する度に、一年毎に阿房師が行者にな

つたさうな——といふ風な評判が何時の間にか濱口の旦那、先生といふようになった。

何といつても、一寒村だつた長島の町である。

その家を見て驚いた。門のとびらが、先づ濱州の諏訪から平んだ戸節に入念に作られたといふすばらしい一棟戸、屋根瓦は三河産の一々定紋入り、窓は桐紙で、他の用材は名古屋の材木商から吟味させたものづくめ、二階の十畳が四室天井は木目の菊、襦袢代杉、廻りふちのガラス戸は、装飾入りの美品づくめ、洋館には能の皮を敷き、客殿の奥の場は大理石と云ふ豪華振りである。

するといふのである。往年の米騒動の時には熊嶽師は恰度、その郷里長島に歸つてゐたが、各所の噂が傳はつて、町の紳民達も驚きそのな無能を見せると熊嶽師は、スター／＼と町役場へ駆け込んだ。

その時には町役場の方で困つたといふことであつた。未だ救助金のことを考へてゐない矢先へ熊嶽師が率先してやつて来たのでいろ／＼町の分限者に夫々郵當てやうと考へてゐる最中に、やつて来られたので、

で、間に汽車のない間は、自動車自分で購入し来たたり、柳會の文化をどし／＼自力で取り入れて、故郷の開發に資したなど、彼の故郷への貢献は實に数へ切れないほどである。

文化風土記子から

目下東京に滞在、本紙に連載中の記事の主人公濱口師は、三ヶ所で施術を行ひ、連日病者に癒癒されてゐることはかつて報じたが、最近風土記子は、その施術所を訪れたところ、

聖代の疑問兒 昭和の日蓮 熊嶽の施術を見る

キリストの再來か

三重縣が生んだ天下の奇才濱口熊嶽は實に昭和聖代の疑問兒である。聖としてこの疑問が何時になつたら解けるか、それは又より以上の疑問といはねばならぬ。或ひは現代の科學の力を以てしては永久に解けぬナゾとして疑されて行くかも知れぬ。

口を取除き、ピッコを脱ぎ、いざりを立てしめ、曲縮を止め、腕のゆがみを全治せしめる等、全快の喜びにひたるもの全世界押越べて三十萬を下るまいといはれてゐる。

熊嶽は彼熊嶽はそれを語るでもなく、又全然隠し惜むるでもなく日々配達される全快の報告に埋められながら、愈い彼の救世主としての立場に偉大なる自信を抱き、集まり寄る病者に一面施して慈なる聖術を施してゐる、一部にはキリストの再來、一部には昭和

無言のアドヴァイサーである。青年會、婦女會、何でも、町の公共事業であると云へば、最先に金を出す、其の金額を測べたら、今日までに既に二十萬圓には達するだらうとは町の人々の計算である。

熊嶽の施術は極めて簡單で一二分を要せぬ集合の一喝で救はれてゆく。殊に不思議は本人は申すに及ばず真鍮や掌形の持病者にも病名を一瞬の間に透視し百發百中に居處ぶ患者は良きもを抜かれてゐる。

熊嶽の婦人は熊嶽を的中せられて赤面する。一人の紳士は掌形を示して熊嶽の妹の胃がんを的中せられて驚く、何處かの婦人は熊嶽の娘の真鍮術に驚かされたといふ話をして喜んでゐる。

熊嶽の施術は極めて簡單で一二分を要せぬ集合の一喝で救はれてゆく。殊に不思議は本人は申すに及ばず真鍮や掌形の持病者にも病名を一瞬の間に透視し百發百中に居處ぶ患者は良きもを抜かれてゐる。

熊嶽の施術は極めて簡單で一二分を要せぬ集合の一喝で救はれてゆく。殊に不思議は本人は申すに及ばず真鍮や掌形の持病者にも病名を一瞬の間に透視し百發百中に居處ぶ患者は良きもを抜かれてゐる。

熊嶽の施術は極めて簡單で一二分を要せぬ集合の一喝で救はれてゆく。殊に不思議は本人は申すに及ばず真鍮や掌形の持病者にも病名を一瞬の間に透視し百發百中に居處ぶ患者は良きもを抜かれてゐる。

熊嶽の施術は極めて簡單で一二分を要せぬ集合の一喝で救はれてゆく。殊に不思議は本人は申すに及ばず真鍮や掌形の持病者にも病名を一瞬の間に透視し百發百中に居處ぶ患者は良きもを抜かれてゐる。

京市品川區大井町三三四四阿部善氏は、最近不明のつんぼがタツタ七日間の施術で不思議にも全快したのやうな二通の感状を熊嶽師に對して手の舞ひ足の踏むところを知らずといつて狂喜してゐる。熊嶽小生は三日前、二月十二日より芝伊豆子萬應館に於て衆と共に先生の施術を受けつゝある一人に熊嶽小生は九州熊本出身かつて梓かん長として有名なりし故代藩士林田龜太郎と同郷にて同人と共に一會社創立現に社長として主宰在り候師の御高名は往年より雷の如く承知されし居り候もの、今同郷相懇し施術を受くべくけいがいにて候し候は願ひ且つきん快とする處に熊嶽小生昨年十二月三日突然腹痛下痢の耳疾に罹り殆どつんぼとなり博士熊嶽等の妙術なく多小悲願まかり在り候處、先生より受術館かに三日にして腹痛治癒と半分回復し家族等と共に數天喜地の思ひ致し居候ものに候全快後は引續き血脈區下敷張磯化症の御施術仰ぎ願ひ要す

二月十四日 阿部 善
瀧口熊嶽先生侍曹

熊嶽二ヶ月有餘に耳りしつんぼは、七日間にして全快眞に觀天喜地手の舞ひ足の踏む處を知らざる有様候。熊嶽及ばぬ師の靈感只々驚くの外無之此上は不及廣々天下に先生の靈感に實社會國家の爲め民衆の體より病を驅除し彼等をして自分同業の精進に浴せしめ度感佩まかり在り候昨日は海草に熊嶽世世はじめ不動藥師虚空藏文殊地藏等の菩薩如來に瀧口熊嶽師の御かけを以て平癒の旨願御禮候明廿一日は熊嶽大師六郷古川藥師に掛けい同様の奉養候儀に候

瀧口宗が、或るや過からず且體化現在のかさま宗效以上信仰のまとなり非常なる熱力の下に、熊嶽世界に莫大なる信者出來今

救世主に 町長の相談

愛郷心に燃ゆる熊嶽師

向も東京して、毎日押し寄せるあらゆる種類の患者に、相變らず神不可思議の術を施してゐる、瀧口熊嶽師は、三ヶ所の施術所を順に駆けめぐつて殆ど休息をとるひまもないほどの有様だが、そうした多忙のなかにも、自分をうんだ、故郷、三重縣下長島村のこととなると、何かと打ち棄てられな

まい。よしそんな感傷な言書があるなら、俺は一つお老會を起して町の長樂寺に、城主の法要を辦む日に長島區の七十五歳以上の人々を集めて記念品でも贈つたらどうだらう」
「エイ！」「ヤッ！」朝から暖ま

「熊嶽師は、そんな言書が、だん／＼に、
「そうだね、一つ瀧口熊嶽先生にお願ひしたら、あの人なら誰もお願ひしない、殊に町のためには、何でもかんでも、一番先に財布を投げ出すんだし……」
と云ふやうな事になつて了つた。
「名譽町長と云ふことにして、助役に新進の人物を抜擢して、充分實務は補佐させますから……」
と云ふやうな相談が、故郷から東京の旅會へ頻々と来るやうになつた。
「熊嶽師は、非常時突破には、矢張り強力な町長が必要だ、それには熊嶽師の如きは好箇の人だと云ふのである。
一日余が、その眞香を臨めに出かけると、全く熊嶽の者でなくとも、熊嶽らしく感じないでは居られない、しつかりした風ほうの地主である師は、熊嶽の無難作の調子で

「僕に町長になれと云ふ話か、それや手紙が来てゐるやうだ、この前にもそんなことを云つて来たことがある。けれどもなア、この忙しい僕に、國の町長をやれ——は少し可哀相だらう、僕は自分の生れ故郷のことなら、どんなことでも、出来るだけのことには盡す氣だそりや、誰も町長がなくて、町政が進まぬと云ふなら、ならぬ事もないが、それほどでもあるまい」
さう言つて、患者達の力へ去つた熊嶽師の後姿を見て、余も感に打たれた。
熊嶽さん時代からの故郷長島町のために——全く熊嶽師の愛郷心は人並以上だ。普通の成功者なら、そんな片田舎の町長などは、聞いただけでも、眞ッ平だと云ふところだが、熊嶽師だつて、迷惑千萬だが、ほんとうに町政が進まぬなら……と云ふその語氣には、純な眞に故郷を思ふ熱が現はれてゐる。「この熱、この愛だ」數多くの患者に氣合一つでケロリと癒して見

「大丈夫だ、二週間、二週間かつたら、俺は、一生術使ひを止めるよ——キツパリと仰言つたのです。それがどうせう、ほんとに、二週間目が来ると、ケロリと治つたのです、この通り、動か

一風變つた

濱口家の家憲

無軌道なやうでも

自分をも拘束する諸條

「我輩には相當に涙があるんだ、どうも人間は涙がないと駄目だの」

「涙は思慮の本質、濱口熊嶽師は昨日突然、目下滞在してゐる東京芝罘輪車町の事務所、余にそう語つた。

熊嶽の涙とはどんな涙か。

「ほんとうに貴方は、泣くんですか」と聞いた、彼はから／＼と笑つたのみで答へなかつた。

事務所で熊嶽の人に聞いた、

「先生の涙といふのは要するに同情の涙ですよ」朝から夕方まで立て込んだあの多量の患者、病者、それに注ぐ同情の涙のことです。

「先生は患者に接する時、施設する時には、何時も、あの通り、

破れるやうな聲を出して、大聲叱たしてゐますが、心は同情で泣いてゐるのです。弱い者にそゝ涙です、私にそゝる涙なんか、あの意志そのもの、やうな人にはないでせう、それこそ、あのガツツとした體格、強い意志の熊、長島の漁村に「阿房熊」で通つた寒から、自分のために泣いたことは恐らくありません。

先生は國家のために泣き、電費の帳簿をしました。赤十字社の寄付、熊の道徳費、町の教育費、孤兒院への寄付、それには常に千金を投げ出して惜まないのもそれです。斯う同情の涙です」

その人はから／＼と涙してくれました。

「そんな涙もろひ質だつたら、随分と、随つた人や、いろいろな無心などが押寄せることせうね」と記者は重ねてたづねた。

「ところがです。先生にはどの位も涙があるかは知りませんが、他人に金を貸したりすることは絶対にしないから面白いです」

「そんなに涙もろくて……」

「そうです、個人的には、どんな友達でも先賢でも、眼下にでも、困つてゐるから一寸貸して下さい。一度もこんなことがありません。或人が金を借に来た、お定りのわけをくどくどと話して……ね、ところが先生は、座をグイと立つと財布から五百圓を出して、貸すことにはせん、そんなに要するのなら分相應の金を進上する。持つて行きなさい」と投げ出したが、その人は、いや／＼と泣きかたくな。物言ひのやうでいやだ。貸して下さい——と云ふ、いや／＼と云ふ。進上することではせん、先生はさかかない、そんなことで押寄せが續いて、とうとう五百圓を持たずに歸つた人がありました。

「随つてゐますよ、よくある、人のために金を押す」と云ふことは絶対にやらない人です。それは自分のためにもやらない。このことでは一度、次ぎのやうな聲明書を出したことがありますよ」

その奇妙な聲明書といふのは、

次ぎのやうなものであつた。

濱口熊嶽家憲を町民熊君に告ぐ

明治廿八年手帳内附の元は濱口熊嶽家憲を創設して廿五年今日に至るまで内附の條項に則り萬般を盡し来る

内附第百八條に曰く「熊君には絶対何人に不潔不潔する事を嚴禁し當主濱口熊嶽自身に於いても熊君の行為を禁ぜり事情の已む無きに依り印の使用せんばあらざる時は親族會議の協議を得たる後印章の臨に自らを以て熊君の認定なれば印章の押捺あるとも、熊君なきものは應て無効なる事を天下に表明す

この理由を、又、再公告したる理由は、事務所が過ぎつた、主人濱口熊嶽師の承諾を得ずして、印章を人の勤めに用ひたし、故、その遺文は無効となり、その上、事務員

「このうちにある家憲といふのは一體どんなのです」

「それは百十三條からなつてゐますよ。これがそうです、我々事務員一同、濱口家に使はれるものはみな恰度熊嶽師のやうにして持つてゐるのです」

彼氏はそ／＼と云ひ乍ら、余に熊嶽のクロース製の小型の軍用手帳に類似した一冊を示した。

先づ第一條と云ふのを開いて見ると、

師ノ命令ハ、其事ノ如何ヲ問ハズ直ニ之ニ服シテ決シテ抵抗干渉ノ所爲ヲ許サズ

但シ命令ニシテ不當ト思惟スルトキハ、爾後後檢々ニ之ヲラズネルカハ、評議會議の決議ニ付シ是非ヲ決スベシ

熊嶽たる遺文のやうでもあり、大にいつた但書を見ると、命令が不當だつたら宿へ歸つてからにせ

は前記により、處分せらるゝことに相成り、依つて、必ず、取引は、濱口熊嶽の承諾の上、直轄にて署名し、且つ印章を押したるものにて、なされたし、さなくば無効とす、右通告す

「このうちにある家憲といふのは一體どんなのです」

「それは百十三條からなつてゐますよ。これがそうです、我々事務員一同、濱口家に使はれるものはみな恰度熊嶽師のやうにして持つてゐるのです」

彼氏はそ／＼と云ひ乍ら、余に熊嶽のクロース製の小型の軍用手帳に類似した一冊を示した。

先づ第一條と云ふのを開いて見ると、

師ノ命令ハ、其事ノ如何ヲ問ハズ直ニ之ニ服シテ決シテ抵抗干渉ノ所爲ヲ許サズ

但シ命令ニシテ不當ト思惟スルトキハ、爾後後檢々ニ之ヲラズネルカハ、評議會議の決議ニ付シ是非ヲ決スベシ

熊嶽たる遺文のやうでもあり、大にいつた但書を見ると、命令が不當だつたら宿へ歸つてからにせ

い——と餘地を遺したところに熊嶽の遺文を見せ、法文としては頗る愛さやうのあるものである

第六條、歐米各國旅行、遊學、熊嶽ノ際ハ、妻及子事務員共五名トシテ、渡、歸、送、機、本、ハ、學生共十人トス

ちやんと外國行の時のお供の人数まで、そして女房も連れて行くぞと、一々家憲のなかで随つてあるところが愉快だ。

第十條、熊嶽ノ父母ニ毎月百圓宛事務員所會計部執事ヨリ送金スルコトヲ忘ルベカラズ

といふのもある。

熊嶽に對する規定もこま／＼とそのなかにあるが、

第二十三條、ゴマ木ハ患者ノ寄付タルベク、ソノ數百八本ニシテ、檢ヲ以テ之ヲ製シ、其長サ六寸トス、幣ハハ紙四枚ヲハツ切トシテ之ヲ九説ニ切リ下グ紙へ患者ノ寄附トス

などと云ふ條もある。

その他熊嶽の規定、旅費、執事事務員等に對する賞罰、弟子、病人の規定、熊嶽時間、熊嶽は自轉

車規定と云ふものがあつて、それは九十三、四の二條が熊嶽とある。

第九十四條に依ると

師ト熊モ、事務所ノ自轉車ヲ使用スベカラズ且師ニハ自轉車一輛並ニ各事務所ノ自轉車並ニ自轉車ヲ備ヘ置クベシ

とあつて、熊嶽の場合の熊嶽費の積立金の規定まであるから、随れり盡せりだ。

妻に對する規定といふのがあ

第六條、妻ト熊モ師ニ向ヒ事務員ニ對シテカスルコトヲ得ズ

第七條、師ノ妻ハ事務所ニ於テ事務ヲ取ルコトヲ得ズ

即ちでも公私を明かにすることろなど、こうした人にはめづらしい規定だ。無軌道なやうな濱口師にして、これ等の細かな家憲の一々の條文百十三條を讀んで行くくと、それは驚きしい法文になつてはあつた、一語々々に妙に情味があふれてゐる。

好奇心と探偵的興味から、一つ一歩ひんはいでやう／＼と〇〇の事務所へやつて来たことがある。

若い記者だつたので、大分元氣で鼻息も荒かつた。

まだ熊嶽師の時間だつたので、背廣袋で宿舎を出て来たばかりだつたので若い記者には、その姿が如何にも村夫子然としてゐて、どうも感心でも、せい／＼と村役場の書記といふところだつた。

「わしが濱口ぢやが」

「へん、貴方が……」

その記者は先づへうし抜きの體だつた。けれども、鬼にかくそれが當の濱口熊嶽師とある以上は、何處までも突つ込めといふのだ、仲々無遠慮に辛辣にやつてのけたこれに對して、濱口師は、もうこらしたことはない、熊嶽のことなれ切つてゐるので、驚きもいさどほりもない。

熊嶽の熊嶽笑ひを續けて、先づハツ／＼と天狗のやうに熊嶽笑ひを入れて

「若い、お前さん、仲々しつかり聞くのう」

若いの——はその位では随分なかつた。

「先生、とにかく、この私に、この眼に、その熊嶽とやらを見せて置はらぢやありませんか」

ビシヤリ一本といつた熊嶽で聞き直つた。

「おう、安いことだ。いつでも見せてやらう」

そいつて、熊嶽へ若い記者を連れて入つたが、先づその熊嶽の前にはり出したのが、「熊嶽不思議」といふ熊嶽の今日の事務員を認べて書いた實録である。

「まあ、先にこれを一覽讀んで置けよ」

それには、熊嶽の生立から、今日まで熊嶽が法廷に立つたその時の有様など、詳細に、師に熊嶽した人が熊嶽の熊嶽一冊に載めたいきなり熊嶽があつた。

その熊嶽、それを受取る熊嶽記者らしい早さでペラ／＼と讀んだ。

「ふうだ、熊嶽所で熊嶽の前で行つたことまで大分讀つてゐるな、熊嶽な法廷でやつたことを、まさ

政界の名士に

名書を贈られて

高價と知つて當惑した

濱口熊嶽師の面目

濱口熊嶽師の熊嶽に對しては、最近では最早、これを何等の不思議とも世間で思はなくなつてゐるが、それでも都會地へ出て来て、今頃のやうに、熊嶽のまん中で、

おめすおせす、熊嶽の熊嶽をかいて、熊嶽をたき、一喝のもとに熊嶽をなはすと云ふことは、矢張り熊嶽には奇蹟とされると思へて最近にも熊嶽の記者が、好

「若いの、お前さん、仲々しつかり聞くのう」

「若いの、お前さん、仲々しつかり聞くのう」

かてらちん記事でうそは書けまい
まアこれはほんとうとしても、と
にかく紙の上に書いたものだけで
は、僕は承知が出来んぞね」
どこかで語つてゐる様子。
「相當に深い男じやのう、宜し
ビケ／＼したところを見せてやら
う、ついて来いそして施し場へ入
るまでの着がへをする間、その記
者を持たせて、黙って、悠々と出
来るのを見せると、村役場の書記
としたのが、怒りに面目を一變し
た。
「誰の如く白い、道衣を着て、一
段と威容は四邊を拂つた。
もうその時は多量に、百人近い
患者が詰めかけてゐた。
「隅の方で見とれ、いや、隠し隠
い奴じや、けがれにならぬ程度に
近寄つて、見とれ！」
師はこういひ棄て、師の席に座
つて、患者を待つて、まかり出る
患者を擁いた。
揺かれたのは、熊嶽の婦人だつた
左手がリウマチで動かないのだと
述べてゐた。
一通り、大きく

「うん、うん、そうか」とうなづ
きながら、前に座らせて、熊の氣
合「おうッ！」
まるでいき人形のようにその婦
人は、聲が終ると、ぼろりとして
ゐたが、師が
「手を出して御覽」
といふので、妙な顔をしなから、
右手を出した。
「悪い方じや、左手じやよ」
婦人が自分を騙ふように、動か
ぬ左を、差しのべる何の苦もな
く、クレインのように動いた。
「アツ、先生」
婦人は思はず喜びの聲を挙げた
のであつた。この光景を見て、そ
の記者も、もう二の句がつけな
かつた。それでも、まだ新聞記者は
熊嶽の隠ひを絶えうに持つてゐ
た。
涙を流しながら喜んで歸つて行
く婦人の後に走り寄つて
「貴女失禮ながらお名前は、お年
は」と戸籍簿をやつた上
「貴女の手ほんとうに悪かつたの
でせうね」とたみかけた。
今度はくだんの婦人が怒り出し

た。
「誰が遺棄やたのまれて、二年も
三年も泣いて暮らしますか」
と金切聲で叫んだので、流石の
肥者も驚つたらしかつた。
上座中婦人も六年病んだのが
師に依つてなほつたことは有名な
話だ。
その記者は、その實際を見てす
ら驚かされたが、その患者のす性
が世間的に知られた人、身分のあ
る人だと、そうした場合には、疑
ふ者には理解が早い。
けれども熊嶽師はそうした名士
は運分と治療もし、今に感徳も受
けてゐるが、それを宣傳に利用す
ることを好まない。
前幕熊嶽師現在民政黨の長老と
して知られてゐる伊藤多喜前氏の
如きは、数ある名士のうちで、熊
嶽師を感とする一人であるが、そ
れも、感さう話からそのことが人
に知られるようになった。
それはかうだ……
伊藤氏の愛めひに、本郷區駒込
神明町の熊嶽師事務所を聞いてゐ

る人の夫人となつてゐる婦人が、
ある。かつてその婦人が、矢張り
リウマチで手足が硬直して二年
間動かなかつた。
それを立派になしたのが熊嶽
師であつた。今日ではその夫人に
は三人の子供まである。
その時、これを聞いた叔父の伊
藤氏の喜びは一きはであつた。そ
こで一先、熊嶽師は、京都の伊藤
家に控待を受けて客となり、感徳
のうるはしい會が催されたが、そ
の時。
「ホンのお蔭のしるしです」と贈
られた一軸があつた。
無風流な熊嶽師は、定めぬ規定
の案定に定めた料外には、一
切謝をむさばらぬ主義だが、あひ
手が名士であり、何だか、熊嶽師の
軸物だから、恰度新築の別荘の床
の間によからうと思つたので、だ
まつて置つて歸つた。
それが未だ長島の別荘にかけ
てあつた。すると或時、某地

大田が、氏の別邸にとまつた。
そして何気なく床の間を見ると
その熊嶽師が感嘆した。
「熊嶽師、君はえらいものを掛け
てゐるね、こんな方の趣味も相當
じやな」といつた。
「へえん、それが、えらいもんで
すかね」と済ましてゐた。
「君、これは、富貴感だ。時價
にすりや大變なものだ。買つたの
かね」
いはれし師はビツクリした。
客が歸ると門前を歩んだ。
「おい、こんな高きうのは置つて
困る、京都の伊藤さんへ返して来
い」
門前が早速返却に行つたが、伊
藤家ではいつか受取らない、そ
れどころか、遺棄夫人は改めて、
刺しゆるの額を置つて歸つた。
とう／＼これでは、泣き聲入で
受取られてしまつた——といふ
のである。熊嶽さん」の昔の野人ら
しきがある話だ。

法曹界の名士にも

深く信じられた

濱口熊嶽師の一面目

濱口熊嶽師が行ふところの施
は、昔から評判になると、一方で
は必ず、山師だとか、何だとか文
句をつけたがる者が絶度現はれて
来る。かうした一部の、濱口熊嶽
を解せぬもの、評が、つい熊嶽官
を動かす場合がある。そのため
に、熊嶽は今日までに幾度か、裁
判所や警察の取調べを受けたこと
は先に書いたが、これについては
いろんな挿話がある。そして大抵
の場合熊嶽の側面が無罪となつ
て公明さを却て天下に知られた。
仲には取調べた法曹界の人々が後
になつては、施し場を進んで受けた
やうな場合もあつた。
その挿話の一つとして、近頃面
白一文が、昨年九月廿五日發行
の「法律新聞」に掲載された三浦

彼男といふ九十歳を過ぎた人の興
味ある隨筆に解説された。
筆者の三浦翁は、如何なる人か
は知らぬが、餘程法曹界にたくわ
く法曹界の名士を知り、交友も多
かつたやうだから或は自身法曹出
身の人も知れない。
今茲にその「法律新聞」の一節
を引用する。
加太邦憲は四年前に死んだが、
電話帳ではまだ生きてゐる。牛込
四三三〇番で、その住所は牛込北
町六番地。
加太は曾祖父を以てゐた。
同じく司法省法律學校出の傍輩、
富谷生太郎や、水上長太郎等と席
を運んでゐたが、富谷や水上の如
くに口を出さない、故に世人はま
だ加太はこの世に居る者と思つて

あるが、實は四年前に死んでゐる
のだ。生前には時々曾祖父に出席
して年に三千万の歳費を受取るこ
とを忘れたかつたのは感心だ。
(中略)加太邦憲は死んだのは八
十位だつたから生きて居れば本年
(昭和七年の事)八十四歳だ。
加太邦憲は官職僅に大阪控訴院
長たるに止まつて、司法大臣は勿
論、大審院長にもならなかつた
が、大阪にゐる間に甘い長命の術
を習へたから、それで以つて出世
の停止したこと、差別規定がつく
譯だ。それは外でもない、加太は
大阪在職中に、萬歳を治す濱口熊
嶽なる行者に遭遇したことが、同
じ濱口でも、總理大臣の濱口は刺
客の厄に遭つたが、その瞬間まで
その不幸を察知しなかつた。この
濱口とは大いに親しくした和志の
今以つて残念と思ふところだが、
神ならぬ濱口の鬱斯くの如きこと
を察知するを得んやである。これ
に反し濱口熊嶽は「ゴッド」の如
き行者であつて、自分の運命をよ
く知つてゐる。

餘日を過ぎて、その間斷食して、
紀州は牟婁郡、熊野郡のお山に
籠居して、日夜直下七十丈の大瀧
に打たれて修道士、そのコロロ天
に通じて、神不可思議の通力を
得、既に自己の運命を知るのみな
らず、天下萬人の萬歳を癒すこと
が出来た。出来た。
盲者の目を開いたり、ちんばを
立たせたりすることは朝飯前のこ
とであつて、その早きことは、西
洋の「ゴッド」にも、又その子の
エス・キリストにも優るのである
又腰痛や下痢を即座に治すこ
とは、我國の弘法大師よりも、一
層難作なくやるのだ。而して彼熊
嶽は、所々に之れを實行して大い
に貧民を救済してゐる。
熊嶽は、これらの事を醫すが、
餘り金錢をむさばらない。その點
に於て、大分世間の人間より偉い
一寸した周旋をしても大金を作り
何でもない争ひを仲介して直に利
權を言ひ出す者共とは大いに違ふ
不問濱口熊嶽は、貧民には往々
自腹を切つて藥を給與して居るの
だ。その點に於て、口に貧民を囁

へてゴツソリ寄附金の上前をはね
る連中は違ふ、夫で和志は感心
して、時々無頼漢で、彼の提灯を
持つてやるのである。
斯く濱口熊嶽は面白く奴だ。時
々訪ねて来て駄ボラを吹くが、ホ
ラではとても和志にはかなはんか
ら、遂に白狀し、ホラにかけては
老人にはかなひませんから、寧ろ
眞面目な事で競争させて置ます
れど殊勝な事を云ひ、此の頃で
は大分眞面目になつた。
そこで、和志は、
「おい、熊嶽、熊嶽山三年の禁業
はどうだ」と云ふと、何等の答へ
もせずして、唯モウ
「ウエツハッ」と笑ふだけに進歩
した。
然し、加太邦憲が信仰したわけ
あつて、熊嶽の術は眞にうまい。
和志は今より三十年前、神田錦町
の錦町で、彼が或女の乳をちち
吹き出させたり、或はビツコの男
を立ち立たせたりした事を實地に
目撃した。
よつて試みに和志の九歳になる
孫の熊嶽を抜かせて見たが、甘い

ものだった。驚くめい目して呪文を唱へ、後大喝一聲「ヤツ」と云つた。すると藍がボロリと取れた。子供にどらだと聞くと、何にも知らないうちに藍がとれたと云つて笑つた。和志は目の邊り見て

控訴院長が

證りを立てた

濱口熊獄師の施術

濱口熊獄は加太刑罰の窮地ではない、又和志の窮地でもない。和志は熊獄の事を神戸の熊獄士會長をしてたゆま草席甲子太郎といつて、横田秀雄、木下友三郎等と同窓の者から聞いたのだ。又明治法律學校の熊本熊獄もし切り濱口熊獄を推奨した。そこで和志は、ナニ馬鹿なことと思ひながら、試みに一度試してみようつもりで行くと一ペンに突つて了つた。熊獄はまた日本では東京へ来て東京人を感心させた。地元の大獄

では勿論大獄人を大いに感心させてゐる。かれは大獄天王寺の山通り二丁目といふ、豊かな場末にゐるが、熊獄は大阪中央の船場や中之島や堂島に遊歩をり、大げさにいへばかれの熊獄は大阪一面、否關西中に廣がつてゐる。そこで濱口熊獄の評判が餘りに高いので、官達でも不審を起し、もしや詐欺師ではないかと思つて熊獄で押へて見た、ところが別に悪いところがない。熊獄所で審査して見た、これまた悪いことを發見しない、學者、記者、記者など幾度も幾度も熊獄を試験したが、彼は少しも落氣しない。よつて時々裁判所へ呼出し、何とか罰せんとしても、岸本熊獄や草席甲子太郎やその他の熊獄士等は、自己の熊獄を説明して、熊獄の詐欺師に非ざることを證明するから、裁判所も比方がない。且又熊獄は即座に、熊獄事や學者、記者等の面前で、その術を見せ、多くの場合に、第三者たる熊獄者の熊獄をなはして見せるから裁判所

はシヤナリと出て来て、左のようになんかの熊獄をその熊獄上で眺めたものだ。熊獄熊獄氏をくつかれよ、狐々熊獄熊獄なる者は、決して悪人でない、或代熊獄士の如く人を偽つて大金を只取する者ではない。却て人を助けて、僅少の熊獄を受取るに過ぎない。然もその額たるや、實に熊獄少にして、仲々以て其勢に頼るに足らざる程なり、然り而して誠に熊獄の云ふ所は、悉く事實に合し、又其爲す所亦、悉く其果を來せり彼は口に此人の術をなはさんと云へば眞に之をなはすのである。其最も真い熊獄はこの院長が加太熊獄自身にある。余は不幸にして長らく熊獄熊獄はリヨウマナを煩ひ、如何にするも治せず、東京に於て、又大阪に於て、其中には町熊もあれども大抵は熊獄熊獄士なり、其熊獄士に見せ又熊獄士を替ふること熊獄なるを知らず、其上高價なる熊獄を飲むこと熊獄なるを知らず、世間云ふ浴びるほど飲みたり、既に余の存

給に不足を感じたる程なり、もつとも熊獄の月俸は一般に少ないのだが、而も寧ろ効果なく、最早あきらむるより外なしと観念した。然るに天未だ熊獄を捨てさせ給はず、其熊獄ト友人より濱口熊獄先生のことを聞き、牛熊獄半作ら瀧る者はわらをもつかむの道理にて一心以つて身を熊獄師に託せしに柳怒ら驚え、其健康なること今熊獄が目前に置えらるゝ通りである。熊獄かざるを得んや。控訴院長加太刑罰のこの熊獄を拜観して、熊獄事は皆ホト／＼感に入り、一言の訛もなくして直に濱口先生を無罪放免にしたといふことである。この熊獄は加太刑罰から直接に聞いた話ではなく、又誰からも噂と聞いた話でもなく唯ボシヤリと聞いて語つた人の名を忘れたから眞偽のほどは保せずだ。殊に加太刑罰が、濱口熊獄に懸して、わしが法に書いたほど立派に且つ熊獄に懸演したが否かを知らぬが大體はこんなものだったらうと思ふ。熊獄

しその熊獄は別のこととして、加太刑罰のやり相なことだ。わしは熊獄熊獄中に對し、熊獄は宜しく加太刑罰のやりさうなことを熊獄として熊獄せんことを望む。彼らに西洋の熊獄をなまじりした丈で熊獄をして置つては困る。そんなことで真い熊獄が出来る筈はない、自己の熊獄熊獄の淺さを顧みずして、自分の知らぬことをからぬことは何でも迷信だとしてしりぞけては熊獄にはならない。加太には、濱口熊獄の如き熊獄がついて居るから、加太は井上熊獄よりも長生して、遂に日本最初の法律熊獄唯一の生存者となるかも知れぬと思つたのだ。その熊獄は或はわしに追付いて來るかも知れない。それがどうしたのか、加太は八十歳でほつくりとゆつて仕舞ひ、井上正一は今尚八十歳で龜町區上二番町三十一番地の熊獄に住んでピン／＼してゐる。以上は昭和七年九月二十日發行の「法律熊獄」に三熊獄熊獄が寄稿した興味ある法熊獄熊獄である。

外國新聞の 濱口熊獄觀

世界に呼びかけた彼

一字の「熊」に、一字の「行」を加へたるもの、之を「熊の力」となす。「熊の力」は、至極、至天、天地萬物を照破してあますところなく無かい大自在の王城に、安臥して能く古今を通觀す。「熊」は熊ひなき王城のまである。「力」は「熊」であり、「行」である。三熊獄熊獄を我が宗の新法と

つて來る人があるから熊だ。熊獄熊獄でも何かインチキはないかと時々さぐるように目を光らせてゐるさうだが、とにかく熊を買つつけるでもなく、規定外の熊物を買ひさるるわけではなく、(それも熊人からはとらぬ)熊者には手も離れぬ、そして熊人かなほつて行くのもあるのだから、昔の熊獄のように無理に罪に落さうとはしないから、それだけ熊者は得をしさを包み切れないう、お熊にや

「一枚になつて、その上から、ほんの形ばかりの白衣を引つけて、ゴマをたいた。」

「メエツ！メエツ！」と妙な擗聲を出して、施衛に取寄りかゝるのだと思つて表の方へ出かける。その日はまたどうしたことが、高座の上によつて、そこは平生奮闘だから、後ろに引張がひら／＼してゐる。

「諸君は、このわしを大先生と思つてゐるが、實は和州の遊師の息子で、子供の頃は「阿房隈」と云はれたのぢや。」

先生何を思ひ出したか知らぬが、その朝はとう／＼こんな様子で、一席とう／＼と自分の生立から、歐米漫遊記にまで及んで締り立てたのである。

余も一寺喧嘩つて、立腹りかけたまゝ、足をとめて聞いてゐると、座談は單片に語る彼氏が、意外に機知なだけに驚いて、とうとう終りまで十数名、黙じ終るまで延びて了つた。

まで治療したことを思ひ出した。右の乳房より湧出せり、バラマの田中行遊の左足を患し一々枚葉にいとまならず、只致不慮なり尙近々日を期し有志に集會を實現せしむる由。

日布時事——
今朝ベルシヤ條にて、不思議なる人物が當地に來り、同人は瀋口熊師と稱し日本にて曾て、奇代の怪僧なり、妖僧なりとの評判高く、一時は法廷の大問題となりしこともあり、然し其實、同師は決して山師でもベテシ師でもなく

「セカンド・シヤカ」と

外人に謳はれた 世界漫遊當時の熊嶽師

瀋口熊師はダウンダウンで施衛をする事になつたので、患者は頗る多く、施衛所の二階の床はミリ／＼と鳴り出す。

熊嶽をして衛生局員や探偵も多くなり込んで實現したので、市中では熊嶽が逮捕されるだらうといふ評判が立つた。

然し之は取説苦勞であつた。探

一種の精神感傷を自得し、自ら之を公身自由術と稱し、獨特の氣合を創設せしものにて、種々の疾病は一喝に依り平癒せし實列少からず、現に今日も日本出發前夜に大成功を博し、元當地ブラツビフォルド氏及び向野正一氏等の紹介を持せり。

以上のやうに、當時はまだ師のことを新聞などでは、「怪僧」と稱へてゐたところに興味を感じせられる。

然としてゐたのである。ペコロラド新聞所載記事——
明日のコレア號は土地熊嶽の一行の列に珍客、瀋口熊師を乗せてゐる。外に一般同胞が會くなつたり赤くなつたりしてゐる時「人身自由術」でもあるまいが、然し世界漫遊者々、教育基金一億圓を儲け出さうといふ意見は如何にも壯快至極であり且、その人身自由術が如何にも不思議に思はれる。電可不思議瀋口師は、今朝六時から小堀ホテル大禮堂で第一回實地熊嶽の發定で、明後日からは更に、ナショナルホールで公開術を行ふ事となるべく、ハワイでも大盛況で演習四十人がかりで、聴ききれない始末だからね——とは師自身の談話なり、人身自由術とは何ぞ。

學問的にいふと意志の集注力は人の身體を自由自在にするといふのだ。なるほど心理學的に研究しても或點以上は、學可不思議と云ふ外はない、是れが熊嶽師が世界的に有名な所以である。

明日來るべき瀋口熊師は、

本日日本人教育會に二百ドル中央醫院及びハワイ中學校に五十ドル、伏見醫院總醫院會へ百ドル、合計四百ドルを寄付したり。

熊嶽中の瀋口師は、昨日ナショナルホールで三日目の施衛に入場者五百人、ジャーマン總院長その他多くの白人參觀したるが、施衛中十八年目に初めて歩行せしもの、リユウマチスで六年目に、足の自由を得たるもの、片耳の聾したる歐米熊師に感賞になりたると、乳なき婦人の乳汁、ほとばしらしめたる等奇々怪々の効驗ある爲、場内何れも奇異の感に感服せし由。

(新世界新聞所載記事)

同地の學校になぞ、ドン／＼寄付金を出してゐるところも、熊嶽式だ。これは實名でない、實名なら新聞などに金をうんとふり撒く筈だが、何よりも先に學校へ、四百ドルを投げ出してゐるんだかららしい。

この記事を讀んでも一つ興味を感じられるのは、矢張熊嶽が、何か、怪しいことをするものではないかと、その術を疑つて、多數に入込んでゐるといふことである。

そして一々施衛を受けた人を、その歸途に擁して、一々説教したなどは、如何にもあり相なことだ。これは海外でなくとも、後に熊嶽師が今日まで幾度か経験したことであるが、場所が場所だけに餘計蠻ひの眼を持つて見られたことだらうと思ふ。

然し西洋人は、文化を誇る國人だが、同時に、今にキリストの奇蹟を信じて疑はない國民である。だから瀋口師の學可不思議を眼の裏に見ては、これ亦わけもなくコロリと笑つてゐる。

キツト探偵なぞも、

「ユウ、ワンダフル」位なことをいつて、明らかに熊嶽師に對してを求めてサツサと引掛けたこと、察せられる。疑ふ事が深ければ、信じる事も亦深い。殊に西洋人はこんな場合にそらだ。

かういふ様子だつたから、熊嶽師の世界漫遊は、殊るところに、大きなセンセーションをまき起したのであつた。

實の出すと實際のない西洋人の新聞などは、とう／＼セカンド・シヤカ(第二の遍遊)とまで瀋口師をほめたゝえて流石の熊嶽師をして賛賞させたといふことになつた。

近代文化の母の土である歐米諸國でも、矢張科學以外にたよる心持は持つてゐるのである。

「神妙主義」は、一方に於て科學の領域が廣がり、世界の秘密、矛盾が明かにされ、ばされる程、却て、疑された？に對して、神妙主義が起るのである。

瀋口熊嶽師の持つてゐるものは、即ちこの神妙の方の一つである。「神妙の方」と云ふと頗る不思議

のやうではあるが、決してそれはど誇らしいものではない。我々普通の人間と雖も、多少の神妙の力は持ち合はせてゐるのである。

熊嶽師が持つところの、神妙の力は、我々常人が所有するものよりも、少々ばかり、感度が大きく影響力も多いのである。

それは少年時代に、那智の山中にかくれて、修業したあの不思議な熊嶽を持つてゐるからである。

歐米でも、瀋口熊嶽師のような一種の靈術を試みる者も、可なりある。けれどもそれ等は大概、宗教的な色彩を多分に持つてゐた、所謂日本の行者のやうなのが多いのである。

後に熊嶽師のは、歸りに宗教的色彩が濃厚でない點に於ても、西洋人の興味を喚起させるに充分であつたと見えて、いよ／＼名を擧げた。

次に白人の興味を惹いたのは、從來の行者や靈術師の如きは、大抵、その患者、或は患者に效す手をふれるのが常法だが、彼れ瀋口熊嶽師の場合は、一向に手も觸れず、ゴマを焚くと云つても、その精神だけを汲んだので、瀋口師の人は、人に感からしく見せるためのものでなく、自分のほんとうの術法だから、至極人から見ると隨であつて、無難作である、だから西洋人などから見ると、誠に、氣絶なその動作が、勿體振らぬところが一層、興味を惹いたものであらうと思はれる。

この瀋口師の實際、萬事に無難作なことは、他の行を行ふ人々と比べると感が違ふ。

熊嶽師は、饑らない自然のまま、自分をさらけ出して、平然としてゐる。

それは那智の瀋の上で、師から「お前は、これから僧になるか」と聞かれて、

「坊主は嫌やです」と素直に答へた、その時以來の本心である。

何故その時坊主はいやだと答へたかといふと、胸も噴きたい女もはしいと思つたからだ……と後に瀋口師は語つてゐる。

多年の修行者行を罷ね、師からはじめて、眞言の秘法、三密の秘

を奪得させて置つて、
「誰にならぬか」と云はれて、師
「いやだ」と答へる邊りに、濱口
師の面目が存する。
彼は人間濱口で生きて行くのだ
に反映したらしい。

人間らしい

濱口熊嶽師の 一面目と人格の面白さ

「俺は世界の濱口じや、何と云い
もんじやのう」
濱口熊嶽師は、御禮の好い日
には、自分でそんなことを敢て家
語して、眉邊に一す得意の笑みを
浮かべる。
それが、意外に聞きづらくない
何所か無邪氣な、饒らない、稚氣
瀟々たるところ——師を知るもの
は、その豪語を却て、濱口らしい
と微笑むのである。
それほど、彼に快い道徳を興へ
るものは、嘗つての世界へん歴の
思ひ出である。
先にも引用した通り、その世界

然として、兎にかく眼前に、不思
議な靈的現象を具現するところに
師の面目がある、自身で豪語する
ものも、師自身の強い自信が然ら
しめるのである。
熊嶽師はある、那智山の奥深
く、彼の半生の靈的修行は今日の
實といふべきだけれど、これを精
かに観察して見ると、今日では、
彼が、患者の顔を一目見て、直に
其の胸で手を觸れるでもなく、患
者の病歴を聞くでもなく、しかも
一言のものと、その病名を喝破し
「よし、癒る」とか、或は又「こ
れは駄目だ」といひ切るところは
彼自身に強い自信があるからで、
その自信の裏には、今日まで殆ど
無量に苦しむ患者に堪えて、知らず
知らずの間に感得的な意味の経験を
積み重ねたことも争へない彼の強
味であらうと思はれる。然し師が
「俺は天下の濱口じや」と豪語す
る半面には、誠で誠そんな人の好
いところもある。

「俺は天下の濱口じや」と豪語す
る半面には、誠で誠そんな人の好
いところもある。
那智山から降りて来て、大阪邊
り、市井の間に病者を一喝して
驅み去る。
「俺の半生はなつてないよ、普通
の人間としては無茶だの、何し
ろ、その點では流石の小だ」
かう云つて苦笑する時もある。
然し、一旦彼が病者に對した時
は、依然として那智山から降りた
ばかりの時の濱口熊嶽と變らない

然もその上に、多年病者のうごめ
くその痛苦の隅を無数に見てゐる
ので、病者に對しては、心からの
慍怒さえ感じてゐる。
師の病者に對して施すあうんの
一喝は、とりも直さず、病者を一
喝する聲である。師の施術を見て
ゐるとそんな気がする。
然しそれも、永年その様子を見
てゐると、そこにも面白いことを
発見する。それは何かと云ふと、
昔前までの師は、その氣合病師
のやうに、矢張り、自分が、汗を顔
に溜めて、凄く形相をして、全く
見てゐても病者が退散しやうな様
子で、一驚大喝をしたものだった
が、近來の濱口熊嶽師は、多年多
数の病者に堪えて、一種の佛相と
云ふものでも具はつて来たといふ
のか、その結ぶ印、濁ふ水、それ
等の行や儀法の様式までが、萬事
物やはらかに、その大喝も、近來
では、
「メエツ〜〜」とまるでお
ぼろでも曇むやうな調子に響つてゐ
る。これは故爲にさう變へたので

ない、多年の施術の間にこんな調
子に自然に響つて来たので、これと
同時に、濱口熊嶽師の人の人格も
同時に、那智の荒行者から、漸々
神佛濱口熊嶽に變つて、圓滑、活
潑の人格を玉成したのである。
彼が獲得した、その不思議の靈
術は、那智山からくだつたばかり
の時も人格圓滑となつた今日と雖
も何等變りがある筈はない。
けれども、これを客觀的に見る
と、人間濱口熊嶽として見る時に
は今日、出来上つた師に、一層の
光輝の加はるのを見出すのである
「わしはえらいもんじや」と自分
で自分をほめても、チツともおか
しくないと云ふに、彼の人格の面
白さが出て来たといふべきだ。
彼をいくら、西洋の神職などが
キリストの再来だとほめた、へて
も、だん／＼人間濱口らしくなつ
て来るところは面白い。
決して彼自身でも外人に神格化
されたことを得意としない。只昔
の野人濱口熊嶽が、近來では立派
に市井の俗人としても通用するよ

らになつた。大抵の人間は、聖ろ
玉成されるより、野人である方に
その人の眞實があるものだが、彼
は俗世間に任するに及んで、いよ
いよ、その眞實が出て来た。
巨萬の富をたくわへて、社會的
な事業には金を散じて惜まない。
それは實名のためではない。然も
自身は年中席があた、まらない。
「わしだつて、芝居も見たい、花
も見たい、それが出来んのじや、
この通り忙しい、朝から一日中、
怒々やつて、病人を一つ一つ暮
らしてゐて、どうにも怒々にもな
らんものじや、
自分で自分を苦笑してゐる。こ
れは内心のいつはらざる思情を正
直に云つてゐるのだが、師はそれ
を、どうすることも出来ない。と
云つて、そうした俗世間の人間と
同じけりや進んで行くことを、
堪えまらなく欲するわけでもない。
けれども只、さうは思ふのである
。そこに人間らしい面白さがあ
る。とにかく不思議な賢つた人間
濱口熊嶽であるといふべきであ
る。
者ぞ、天下の病者何者ぞと云ふ熱
意であつた。事實あらゆる病者か
らノックアウトされた患者達が、
忽ちに熊嶽師のもとへ集つたの
であつた。
けれども、今日の濱口熊嶽師は
必ずしも醫家の範ではない、追々
と人生の修業も経て、又或程度に
までは科學的な醫術も、自然に知
るに及んで、濱口師は、必ずしも
科學を識しなれば、また科學
の範でもない。だから近來は熊嶽
師のもとに集まる、あらゆる醫
術の手にから身離された患者のむれ
に對しても、醫藥を離れよなぞと
は云はない。
「うん、薬は、そりや飲んだ方
が好い、患者の手當も受けられ
るだけ受けなさい。わしもなほ
しては上げる」
こう云つて、自分では自分自身の
立場から患者に對するのである。
これは熊嶽師が世の醫家に屈した
わけでもないが、普通の場合に屈した
患者のやうに、一がいにお藥を棄
てよなぞとはすゝめない。
けれども、今日、熊嶽師の許へ
日象する、病者のむれは醫家は足
踏さないまでも、患者自身は、永
年醫家の手にかゝつて患者も醫家
も、實は、そろ／＼うんざりして
ゐるやうな病者が、遂に越とこ
ろを求め得ずして、最後に熊嶽師
の許に走り寄るのである。
現在、東京中の熊嶽師の市内三
ヶ所の施術所を實際に見れば、そ
の有様が判る。一日に五百人を下
らない。その人の殆どは、もう科
學も何もない、たゞ暗い總意から
救はれたい——そらいつた氣持を
抱いて、全く、あとは神やほとけ
にすがると外はないといつたよう
な患者が多い。
腫瘍、胃病、心臓、腎臓、肺病、
痛、リウマチス、中風、あらゆる
慢性的な病氣にとりつかれた人
々がたゞ最後の望みを、若しかし
たらといふ一點にかけて通つて來
るのである。
それ等の人に對して、熊嶽師は
實に無さうさにも自信に満ち満
ちた態度を失はず

眼前の事實が 熊嶽師の一切を 明らかに物語つてゐる

科學が發達した今日の時代には
熊嶽師の存在を唯に奇異な存
在と見る事も出来る。然し乍ら今
日の科學と雖も必ずしも萬能とは
云へない。そこに濱口熊嶽師の存

「お、心算が悪いな、どうね
は、何十だ」

患者の腹を、牛乳を聞いたよう
にして、然も、その牛乳は白く
—手では紙を結び、口をキツと
しめて、無言で、一つの打診もす
るのでなく、然も、一言のもとに
醫者が見立てたのと、少しも變らぬ
診察を行ふのである。

患者は先づこれに一驚し、その
診察は明快で、正確なのに感に堪
へ、もう既に、第一日その対面
面、何となくその不思議な容
に打たれて熊嶽師が

「宜し、なほして上げる、大丈
夫だ、一週間」

大體の回数までも大體に初めか
ら追かぶせるように宣言するので
ある。

これを世の科學者なども、一時
は、心理學から、或は神學に
研究資料として、その不思議の奥
をつかんとしたり、いろんな方面
から一時は熱狂の調子が注がれて
濱口熊嶽師そのもの持つ、所謂
不可思議の正體は極められんと

したが遂に今日に及んでも、これ
を徹底的に説明する人はない。

それは何も濱口師自身の認んだと
ころではない、世間が勝手にそれ
をやらうとしたのであつたが、依
然として不可思議は、遂に不思
議で覆された。

けれども、それに一のからくり
があるわけでもなく、何のインチキ
も見出せない、熊嶽師がはらひに
用ふる水も、それは別に那智の山
奥からくんで来た、靈水だ……な
ぞといふわけではない、行く先々
の施所所宛てたところの水道の
水であり井戸の水である。

別にいふ所か、熊嶽師を飾るわけ
でない、尤もらしくせうとした道具
を置へて、如何にも物々しくし
て施所を行ふ世の行者や、加持祈
禱の類とはそつとした感ではつきり
と區別がつくのである。

然もその施所する當の熊嶽師の
いでたちを見ると一層意外だと思
はれて来ると、もうそこには何時
も、數百人の病者が一パイに詰め

心算をしてゐる。

一切の人数の一概が、僅にのぞか
れるのである。

跣足のまゝ、 火の上を渡るは

奇蹟ではないと笑ふ 濱口熊嶽師の自負

濱口熊嶽師の施所の所傳不可
思議は、たゞに師の前に雲集する
不治のやまひに悩む人々に對して
行はれるのみではない。

師が獲得した不思議な力は、異
狀な一種の精神的な奇蹟を演じて
それは、近代科學で云へば、赤外
線のやうな不思議な透視力、透
透性をも持つてゐるものと見えて
到底吾人常人の常識では理解出来
ないやうな不思議の現はれを示現
することがある。

それは熊嶽師の前に座らずして
遠く離れた土地の病床にあつて、
立つことも座ることも出来ないや

かけてゐる。ろく／＼人々に挨拶
もしない。然も無覺悟に

「サア、来い／＼」

そうつぶやき乍ら着物の上から
白い施術者といふよりは、罰ボウ
店の着が着るやうな上つ鬚りを着
て、たいたゴマの火で、手をきよ
め、はらひの水をパツ／＼とまく
のであるが、それには、一向有難
さも尤もらしさもない。全く事務
的なやり方だから、熊嶽師を神か
ほとのけの再来と思ふ人には、寧ろ
意外で物足りなさを感じるのであ
る。

そぼくで、野暮で、一種のがう
馴んな態度さへあつて、その姿は
全くの野人である。

それが一瞬、病者に對して、熊
嶽師な、一かつの施術を行ふ……
然も、それが、或時はなみ居る人
の前でつんぼの耳が聞いたり、足
が立つたりする現實を見せつけら
れるのである。

事實はどおそろしいものはない
何よりも、誠より謙だ、百の効
用を置くよりも如實に、眼前に、

その實際を見せるのだから、人々
は、現實の前に頭を下げるのであ
る。

熊嶽師は、或は醫藥で
何か奥にインチキは無いかと、引
出されてはためされたが、その時
々でも、そうした事實が、これを
充分に見せるのだから如何とも仕
態がない。遂には前編にも引用し
たやうに法曹界の權威ある法官自
身が遂に、熊嶽師の前に来て、不
治のやまひをなほして置ひ、一生
その師の感と不思議の術をさん美
しなればならないと云ふやうな
妙な結果をさへらむに到つたので
あつた。

熊嶽師自身は、眞宗の秘法を知
り、所謂三密の法を説くが決して
好んでこれを患者に求めやうとは
しないところも、世の行者達と異
るところである。自分自身は天賦
の金ごう不慮の三密を具足してゐ
る……とは深い自信を持つてゐる
が決してそれを人に及ぼさうとは
しない。誠なき養生で好いのであ
る、只熊嶽師の前にやまひを訴へ

寫眞が、誰々と日本中の人々から
送られて来るのを見ても、その評
判のうそでない事が感じられる。

然しこれは普通に考へると、どう
しても不思議である。あくまでも
奇妙である。けれども熊嶽師が紀
州の一漁村で、興たれ小僧の「阿
呆眼」であつた時代に、濠洲合二
里の、眼路も届かぬところに漂ふ
居村の遺棄者、音次郎の死骸を、
靈感に依つて發見したといふ奇蹟
が、後來の何者かを暗示してゐな
いとはいへない。

その昔、日蓮上人も亦、漁夫の
家に孤々の聲を擧げた、船唄を聞
き乍ら、いぶせき家に夢を結んで
成人したのであつたが、或時熊嶽
と何事かを覺つて、身延山にかけ
登つたのである。そこに熊嶽師の
業を行つて、山を降つた時には
兩無妙法蓮華經の新題目と、新ら
しい一宗の祖となつて、もまたに
出ては、熊嶽師の奇蹟を現はして世
人を驚かせ、遂には共に死を辭し
ない弟子を経て、熊嶽師の法統
にも打ち勝つて、七百年の後の今

日蓮が熊嶽師の法統に、乞食坊
主と間違はれながらも、熊嶽とし
て自信のある法の功徳を見せた。
その意氣、その標路に、今日の濱
口熊嶽師の靈感、何となく似通
ふとを發見する、けれども、現
在の濱口熊嶽師自身は、決して、
熊嶽師それ自身と、大聖日蓮とを
比較しようなどとは決して言はな
い。彼自身にすれば、そうした過
去の偉人の名を利用しようなどと
は考へても見ないだらう。けれど
も吾人が、これを客觀的に、その
生立ち、ちまたに出て身成な、熊
嶽師をも恐れない、深い自身に湧ち
／＼た熊嶽師の姿を見る時、何と
なくそつとした大體のやうな面影を
感じるのである。

粗衣粗食に甘んじて、只終日を
世の備める患者たちのために、置
座の間もおしんで働いてゐるので
ある。

「わしはあり金なんぞいらんぞ」

それは本當の叫びだ。だから各
地に出張して、弟子や事務員の実
費、施所の場所に必要な實費以外
に食らうとしない。

日蓮上人などの偉いところと、
區別される點は、濱口は驚いて神
變化されない點と、日蓮の如く、
衆生のために斬らないことである
その代り熊嶽師は、天に祈る代り
に禱言を一喝するやうに見える。
その一喝も、泣きでは、しつた
から、論しの氣合のやうに響つて
来た。

「メエツ／＼」

白紙を牛乳にして、紙を結んで
空に九字を切る擲言は、まるで邪
神を驅逐するかのやうな氣がする
非常に力のある人が、決して聲
とは争ひをしないやうに、熊嶽師
の氣合は、熊嶽を一喝するやうな
態度から、熊嶽を柔らかに擲言
すやうな風情に、一つの進境を坊せ
てゐることを、古くから師を知る
もの、感じるところである。

泣きでは、別に好んではやらな
いが、まだ世間が、師の實力に感

ひをもつて見てみた時代には、異様な神通力に似たものを人に見せたことが度々あつた。

昨年四月だつた。それが、不思議なことから、その不思議の加を、偶然の機縁から一観の人々に見せて、今更の如く驚かせたことがあつた。

それは名古屋や岐阜で施術を行ふために出張する前のことであつた。

長海道に、熊嶽師の名を慕つて建立された、熊嶽寺に、住職となる者に乞はれて、瀧口師の術の秘傳を授けることになつた時であつた。

師は、その住職となるべきものを、郷里の長島町の新濱町にある瀧口家所有の空地へ呼んで、先づ水とんの術とも云ふべき行を見せた。

空地には、松の御水が長さ四間ばかりずらり組まれて並べられた。瀧口師は、そこに石油を注いで火を點じると、忽ちに炎々たるほどの音が空を焦がしたが、煙け落ちて、ま

だその数尺の上を包む空気でさへ熱を持つてゐる時に、真赤に燃える火のやうなオキの上に、水ごりをして裸體を清めると、はだしのまゝサツサと不動明王のやうに火の海を渡つてのけたのである。これを見て人々は、今更のやうに、恐ろしい悪行を初めて見て、

神通力など

持つてはゐるない 偽らぬ熊嶽師の心境

文化風土記子は福を重ぬる度に瀧口熊嶽師の不思議の術によつて命を取止められたり、不治の病が、その一喝によつて完全治癒した。その昔から述べた人々の例を記したが、最近に至つて瀧口師が必ずしも全能の神の如きものではないといふことも聞いた。

熊嶽師の昔から、その異常な力を知つてゐる古老達までが、驚きを晴らしたのであつた。然し、當の熊嶽師は、そんなことには少しも誇りの色を見せないで、寧ろさん嘆する人々に笑つて云つた。

「熊さんの昔から、その異常な力を知つてゐる古老達までが、驚きを晴らしたのであつた。然し、當の熊嶽師は、そんなことには少しも誇りの色を見せないで、寧ろさん嘆する人々に笑つて云つた。」

「熊嶽師は、時によつては、彼術者に対して、施術を断る場合がある。それは自分でも、全くどうもならんと感じた場合である。然し自分がその人を断つたからといって、決してその人が、アイ氏の術のやうな運命を持つとは思はないから、其の事は誤解しないやうにして置きたい。又どんな契機があつて、其の人の氣力が衰へないとも限らないからである。自分の持つてゐる、一種の感應は弱體の頃から自分でも断るに思ふ位鋭敏なものであつたことは深く自ら信じて置けない。けれども、その感應に近いものが不慮に働いてゐるとはいはない、自分の感應に對して、今日では唯に自己意識を持つてゐるが、それは、其の時によつて明瞭な場合ともしろうとしてゐる場合とがある。自分は熊嶽師でないから、人の死相などはあるとか、そんなことも知ら

ぬ。けれども、其人に死期の持つてゐることは感得することはある。けれども、それは軽々に口にすることはない。

自分自身、生死といふことを断り考へたことのない人間であつて従つて、人の命についても同様である。

自分自身、生死といふことを断り考へたことのない人間であつて従つて、人の命についても同様である。

自分自身、生死といふことを断り考へたことのない人間であつて従つて、人の命についても同様である。

自分自身、生死といふことを断り考へたことのない人間であつて従つて、人の命についても同様である。

紀州の郷土に 自慢の熊嶽師

當時の警察署長が 今日では熱心なファン

瀧口熊嶽の少年時代を知つてゐると云ふ人に、熊嶽の郷里、紀州長島町の警察署長をしてゐる竹下氏が居る。

竹下氏は、「熊さん」であつた熊嶽が、熊の音次郎と云ふ村の漁師の漂流した死體を、三里もある沖合にあるのを感得で知つて人々を驚かせた……その時に熊嶽の役人として立會つた人であつた。その頃、熊嶽が通つてゐた町の

竹下氏は、熊嶽の郷里、紀州長島町の警察署長をしてゐる竹下氏が居る。竹下氏は、「熊さん」であつた熊嶽が、熊の音次郎と云ふ村の漁師の漂流した死體を、三里もある沖合にあるのを感得で知つて人々を驚かせた……その時に熊嶽の役人として立會つた人であつた。その頃、熊嶽が通つてゐた町の

ひをもつて見てみた時代には、異常な神通力に似たものを人に見せたことが度々あつた。

昨年の四月だつた。それが、不思議なことから、その不思議の力を、偶然の機會から一般の人々に見せて、今更の如く驚かせたことがあつた。

それは名古屋や岐阜で施術を行ふために出張する前のことであつた。

北濃道に、熊嶽師の名を慕つて建立された、熊嶽寺に、住職となる者に乞はれて、瀧口師の術の秘訣を授けることになつた時であつた。

師は、その住職となるべきものを、熊嶽の長島町の新瀧町にある瀧口家所有の空地へ呼んで、先づ水とんの術とも云ふべき行を見せた。

空地には、松の幹木が長さ四間ばかりずらり組まれて遊べられた。懸てそれに石油を注いで火を點じると、忽ちに炎々たるほどの空を焦がしたが、焼け落ちて、ま

だその数尺の上を包む煙でさへ熱を持つてゐる時に、眞赤に燃える炎のやうなオキの上に、水をして裸體を濡めると、はだしのまゝサツサと不眠明王のやうに火の海を渡つてのけたのである。これを見て人々は、今更のやうに、恐ろしい行を初めて見て、

神通力など

持つてはゐない

偽らぬ熊嶽師の心境

文化風土記子は種を重なる度に瀧口熊嶽師の不思議の術によつて、命を取止められたり、不吉の術が、その一喝によつて完全治癒した、その苦難から逃れた人々の例を記したが、最近に至つて瀧口師が必ずしも全熊嶽の如きものではないといふことも聞いた。

それは名古屋のことであつた。東洋電気の若い社員で、アイ氏といふ人があつた。若いに拘らず、永年ブラ／＼してゐたが、會社の方は缺員もせずに勤め通してゐる。

熊嶽師の言から、その異常な力を、知つてゐる古老達までが、驚きを知つたのであつた。熊嶽師は、そんなことには少しも誇りの色を見せないで、寧ろさん囃する人々に笑つて云つた。

熊嶽師の言から、その異常な力を、知つてゐる古老達までが、驚きを知つたのであつた。熊嶽師は、そんなことには少しも誇りの色を見せないで、寧ろさん囃する人々に笑つて云つた。

ぬ。けれども、其人に死闘の近づいてゐることは感得することはある。けれども、それは暫々に口にしたことはない。

自分自身、生死といふことを語り考へたことのない人間であつて従つて、人の命についても同様である。

自分には、過去も未来もない、三世は現在の刹那であると観じてゐる。これは何もむづかしい哲理を引張り出していふわけではない。

生死を知らず、問題としない自分は、従つて運命といふものを知らない。もし運命がありとすれば自分はそれを運命はただである他人の場合、その運命を運命として上げるだけである。運命に降伏してゐる人には、運命す力を與へるのである。

自分は、「この人はわしで治らぬ」と断言する人は餘り多くない。自分の前に來つて、自分の前に居る人は、既に自分と熊嶽が結びれてゐると信じる。

自分は、宗教家のように必ずしも、自分を信ぜよ、術を信ぜよと求めない。自分の前に來つた人には既に熊嶽が結ばれたのである。あとは、今日までの眼前の事實が、熊嶽を熊嶽に結果を示してゐるかを知る。

けれども、自分の前に來ない人熊嶽を結ばぬ人、それ等を所謂「縁なき來生」として棄てざることは師の誠へが許さない。だから自分は、昂然と、

「自分に來れ、やめる者は來れ」と大聲するのである。それでも來なければ、ほんとうに縁なき來生である。けれども、たゞそいつたゞけでは世間にはその眞意をくまぬ人がある。

紀州の郷土に 自慢の熊嶽師

當時の警察署長が 今日では熱心なファン

今日まで、文化風土記子が、三重縣の郷土の一人間として、熊嶽の術を執られるに當つて、自分の術に對し、種々と研究し、熊嶽師の熱心に對しては、その意味で一人でも驚める人々を救ひたいと思ふと、黙してゐるわけには行かない。

今日まで、文化風土記子が、三重縣の郷土の一人間として、熊嶽の術を執られるに當つて、自分の術に對し、種々と研究し、熊嶽師の熱心に對しては、その意味で一人でも驚める人々を救ひたいと思ふと、黙してゐるわけには行かない。

今日まで、文化風土記子が、三重縣の郷土の一人間として、熊嶽の術を執られるに當つて、自分の術に對し、種々と研究し、熊嶽師の熱心に對しては、その意味で一人でも驚める人々を救ひたいと思ふと、黙してゐるわけには行かない。

「いや、あれは山師だよ」
醫師仲間などから監視もされて
いろんな噂が、その名案と共にや
かましかした。

その頃が熊鷹の隆盛、愛蔵の最
も盛しかった時代であった。法廷
の前に立つて堂々とその術術をし
て見せた當の對手の裁判官が、と
う／＼熊鷹の術術を受けて、熱心
な濱口の支那者となると云ふやう
なこともあつたのであつた。

それでも、當時濱口の唱へた、
所謂「眞言秘密の法」と云ふのが
問題となつて、本家本元の高野山
から、大僧正が下山して来て、誰
人に立つたなどと云ふ大げさな
事件になつたのもその頃のことであ
つた。

妙な因縁で、その時に誰人にな
つた大僧正は、氣に置つたので
その人を當の熊鷹が治癒したなど
と云ふ話もあつた。

當時熊鷹の校長は、古賀
憲氏で、熊鷹は後に北海道長官
になつた瀧田牛三、大阪府知事
になつた若林ら、大阪市長に
なつた林市蔵、瀧田太蔵博士な

どの熊鷹であつた。ところが大阪
の熊鷹の噂が盛んに盛く、大阪で
は邸宅事件を起して遂には、法曹
界の問題をも惹起するので、熊鷹
の校長であつた古賀憲氏は
熊鷹校長の研究して置くべき好
意目だと云ふので、一件書類を取
寄せて、全校の生徒に研究題目と
してそれを興へたのであつた。

當時は、各方面にも「熊鷹術」
と云ふのが流行して、濱口熊鷹の
術術も、矢張り熊鷹術の一種とし
て見られてゐたのであつた。

熊鷹術でも、その熊鷹術は、
術術をわざ／＼學校へ呼んで研究
したりしたが、「濱口某の法」とい
ふので、熊鷹術とは違ふといふので、
別に研究をはじめた程であつた。

ところが明治三十六年になると
竹下氏は熊鷹術も無事に卒業し
て、三重縣に歸り、熊鷹術の校長
となつた。そこで、同縣で有名な
濱口熊鷹の名を再び盛んに耳にし
るやうになつたが、それが、昔し
竹下氏が校長から噂を聞いた、手
に負へない少年熊鷹さんの後身であ
つた事が判つたので、意外に思つ

た。
するうちに竹下氏は、熊鷹術
の本部長として濱口熊鷹の館里
へ赴任した。

一日、突然、本部長となつた
竹下氏を訪れたのが濱口熊鷹であ
つた。
見ると、熊鷹は小ぢりな熊鷹さん
が、感嘆な容ぼうの持主となつて
堂々たる姿で現はれたので、竹下
氏も今更のやうに驚いた。

その前に、熊鷹は、三重縣で
は、時の知事をはじめ、熊鷹の
役員達とは既に親交があつて、
熊鷹の多くの役人達のうちでも、
病者があつて、それ等の人々はい
づれも、熊鷹の術術を受けて、奇
せき的に癒癒が治つた事を、竹下
氏は驚々耳にしてゐたのであつた

その當人が、昔長時代に知つた
「熊鷹さん」であつたことは、何と
なく竹下氏の喜びであつた。

その後熊鷹が名古屋へ出かけ、
そこで術術を施していよく中京
にも名を知られた。その時にも同
地の熊鷹術の一人である患者を治
癒したことがある。それが亦熊鷹

の事には竹下氏の親せきに當る人
であつた。そんなことがあつたの
で竹下氏の「熊鷹さん」から熊鷹と
なつた人に對する親しみは、遂に
一個の熊鷹ファンとなつて、今日
に及んでゐると云ふのである。長

三重縣の人物誌に、海外にまで
その名をはせた人を求める時には
何よりも先にかぞへられる人物に
二人ある。

匡く匡く玉御木本松吉氏、次
に濱口熊鷹である。
御木本の匡く匡くも濱口熊鷹の人
心自由術と共に、時代の化學など
はどうでも好い、持つてゐるもの
にかじやきを出して、その眞價を
世界をあまねくしたと云ふ點で、
相似てゐる。そして一人は匡く匡く
熊鷹は元、熊鷹のむす子から、熊
鷹の術術を授けられた。

育英事業にも

心を注ぐ濱口師

自らは天命學院を經營

どちらにも財はつ、門はつ、背
影もなく、全くの徒手空拳、自分
自身の内からわき上る力を利用し
て、今日を築いた、獨立發行の人
として、共に熊鷹の自慢であり、
熊鷹の模範である。

濱口熊鷹は、最近でこそ、悠々
と、東都の眞中に出て来て、數
ヶ所の術術所を開いて、天下の病
人を集めて、その不可思議の術術を
施し、瀧都の人々からは
「あ、濱口熊鷹か」と何の不思議
も、せりりもなく、眞の救世主と
して迎へられてゐるが、これがま
だ十年一昔前には、全くの山師か

詐欺師のやうに一部からはのし
られ、新報は八方から罵詈雑言として
攻撃する。醫者は患者をとられる
からと云ふので、醫師會起つてこ
れに對抗する、熊鷹もだまつて居
れないので、いろ／＼と手を替へ
品を替へて神事を導入させる。遂
には機事局が動く……などと、世
間の師に對する迫害は誠に、今日
では想像外であつた。

けれども、そうした苦難に立つ
て、濱口熊鷹は、その昔那智の山
奥に修業した熊鷹の心を心として
そうした迫害に面しても動じなかつ
た。

「世の中の苦難位、何だ、俺は、
あの身體をぶちめすほど、上から
落ちてくる難の下に立つて、平
氣で居られる修業を積んだ。あの
修業こそは、人生のどんな苦難に
も打ち勝つ、不屈の精神を植付け
肉體には、水にも火にも、恐れ
ぬだけの體のような身體を作つて
くれた。人間、その位の自信を持
つと、妙なもので、自分の妙を
意識する。すると、少々の事は
人が手品と思ふやうなことは、ほ

んとするに、種も、仕掛けもなしに
出来るのだ。たとへば、俺の術術
所にある、ゴマを焚く時に、上か
らつるしてある御幣のやうな、白
紙を焚つたものだな、あれを、ゴ
マを焚く火が焚々と燃え上つてゐ
る、そのほのほのなかに落ちて來
ても、それは焚いて燃えたことがな
い、火の燃えさかる、そのホノホ
の上で、紙が燃えないなどは、誠
に不思議といへば不思議だ。よく
初めて來た患者などは、それを見
てビックリしてゐる。

又少し小賢しい患者になると、
何だ手品を使つて先づ奇かすんだ
な、などと、かげ口を言つたりし
たものだ。けれども自分自身では
何でもない。奇くも人の術術を、
一喝で燃えただけの御幣を會得した
のだから、その位の、人が思つて
不思議とする位の眞當は出来る。
出来ると思つて、何もわざ／＼や
るのじやない。あの御幣が火に燃
えないといふやうな事は、自然に
なるのだ。それはその昔自身の身
心、まるで燃えきたるやうに
修行できたから、少しは普通

の人とは違つた事が出来るのも當
然であらう。人は不思議といふが
まだ余を知るために、自ら、那智
の邊に籠つて、同様の修行を積ん
で見て、ほんとうか、うそかを自
ら實驗して見たほどの學者もない
た、それを口先の理くつて、四
の五のいつたつて、ほんとうのこ
とは知るものではない。

濱口熊鷹はこういつて、彼の心
境を語つたことがあつた。
彼自身は自分でも語るやうに、
殆どその平生の修業は、こうした
異常な精神教育と、人間の自然に
近い教育に委ねたのであるが、
後には、有志のすゝめによつて
眞實の正統の學校の教育を受け
てゐる。

だから、彼は、その後進に對し
ては必ずしも、自分同様の原始的
な修行を強ひるやうなことはしな
い、又たとへそれを望んだところ
で、それほどの修業に堪へ得るも
のが望出するか否かも疑問である
そこで彼は、後進の修業のために
は、最近に「大日本天命學院」と
いふものを創設した。

それについて彼は曰ふ。
「余は、感ずるところあつて、大
日本天命學院といふ一つの學園を
起した。これは余が修業し、感得
し、大成した「及無邊際」の眞力
と「學加不思議の妙」とを廣
く瀧都の求道者に傳へんことを企
てた爲めである。

「那智の「眞力」「妙術」とい
ふ、これこそは、余が平生の至寶
であつて、容易に之を譲つべきも
のではないのだけれども、つらつ
ら時勢の混とんたる有様を見ると
自分だけが、それを深く願つてゐ
ると云ふことは許さない。
無明より出でて、眞實の眞を握
らせたい、こう云ふ衝動にジツと
してゐられなかつた。
自分の得た術術を、何時までも
秘して居れない氣がする。一日も
及んでゐる。

早く、その一端だけでも、これを
天下求道の土に傾つて、熊鷹術
無任大自在の術術を披露したい。
この意味で大日本天命學院は、自
分の王城である。余はこの王城に
於て、多くの至眞なる求道の弟子
達と共に天下に大獅子くしたい」と
いふのである。

彼はこうして一方に、學園を創
設して、自分の得た妙法の一端を
世に傳へんとするが、又一方
では、天下に多くの學生を養つて
夫々別々、時勢に應じた人物の養
成にも努めてゐる。各學校の在學
生で、學費に關する秀才を選ん
で、その費を返つて、今日までに
その補助を受けたものは、三十五
人に登つてゐる。そのうち大學を
出たもの六名、高等學校十七名に
及んでゐる。

それについて彼は曰ふ。
「余は、感ずるところあつて、大
日本天命學院といふ一つの學園を
起した。これは余が修業し、感得
し、大成した「及無邊際」の眞力
と「學加不思議の妙」とを廣
く瀧都の求道者に傳へんことを企
てた爲めである。

「那智の「眞力」「妙術」とい
ふ、これこそは、余が平生の至寶
であつて、容易に之を譲つべきも
のではないのだけれども、つらつ
ら時勢の混とんたる有様を見ると
自分だけが、それを深く願つてゐ
ると云ふことは許さない。
無明より出でて、眞實の眞を握
らせたい、こう云ふ衝動にジツと
してゐられなかつた。
自分の得た術術を、何時までも
秘して居れない氣がする。一日も
及んでゐる。

それについて彼は曰ふ。
「余は、感ずるところあつて、大
日本天命學院といふ一つの學園を
起した。これは余が修業し、感得
し、大成した「及無邊際」の眞力
と「學加不思議の妙」とを廣
く瀧都の求道者に傳へんことを企
てた爲めである。

不思議は

不思議でない

濱口熊鷹師の奇蹟

紀州の生んだ奇才濱口熊鷹の行一ふ不可思議の術は、自らこれを呼

んで「人身自由術」と呼んでゐる。その術者はその故郷に入れられな
いといふのが定石のようになって
ゐる。

天理教の、おきまさんでも、
誰でもそうだった。殊に紀州の一
漁村の、然も「阿呆師」のあだ名
のあつた、貧乏な漁師の伴であつ
た濱口龍蔵——修行者といはれ、
山師といはれ、あらゆる悪罵をも
一時は受けた彼は、遂に、他人の
身體の縛を治し「人身自由術」の
通力を持つと同時に、「人身自由
術」も會得したものといつて好い
郷里の長島町では、今日では、唯
一の郷士の誇りとしてゐるのみで
なく、最近にはその龍蔵を町長に
推さんと、しきりにたのみ込むも
のもあるような有様である。

「人身自由術」あの奇妙な一場
で龍蔵を遊ばす濱口龍蔵の存在
は確に奇怪な存在である。
けれども、これを常人にいはせ
ると不思議でも何でもなくなるの
である。
「龍蔵の力」はどんな人間でも持
つてゐる——ではないかといふの

である。いはゆる悪感といふもの
——それは人間の神秘の力の一つの
現はれである。
龍蔵は、その人間にひそんでゐ
る龍蔵の力を充分に發揮すること
が出来ない。否發揮することを知
らないのである。

これを發揮することは、即ち術
である。その術とは、どんなもの
か、これを傍らで見ると、唯
わけもなく
「メエツ〜」と龍蔵を奇妙
な眼でにらんで不思議な操縦を
やるに過ぎない。けれども、それ
が龍蔵「術」である。
龍蔵は、小男でも、大の男を手
玉にとつて、自由自在に投げつけ
ることが出来る。

ハーゲンベックのサーカスでは
龍蔵を指のやうに慣らしてゐる。
龍蔵の名人は、どんな龍蔵でもこ
れを自由に乗りこなす。
「俺のやることも、この理とまア
同じやうなものだと心得て置へば
好いんだな」と濱口龍蔵は自ら
を語るのである。
「龍蔵に金ごう不慮の三密で、毎日

千人に近い観衆に對して、術を行
ふ龍蔵も、飯を食つてゐる時も、
わしの常任座、すべてがわしの
三密三昧の生活だ、わしはこれで
一生懸命だよ、世間の人々は、飯
を食ふ時に龍蔵のことを思つたり
龍蔵の時に、床のなかで、金儲け
の算段をしたり、酒を飲んでゐな
がら、龍蔵は女の方を向いてゐた
り、口先では
「貴方は好い方ですね」
などと空世辭を言つてゐるが、
龍蔵の中では、反對の事を考へてゐ
たり——これでは三密でないの
である。だから龍蔵の眼から見ると
先づ世の中の人々は、こゝろした監
らでも、不具者か観衆である——
と龍蔵が出来る。

毎日千人近い観衆を、一喝し乍
ら治してゐる龍蔵は、今日では、
別に自身が行ふ術の効能を誇らな
い、自分から誇らないでも、世間
の方がもう飲み込んで了つてゐる
けれども、中には、龍蔵の不思
議の術とはどんなものか、焼け火
ばしを搦つたり、火の中を渡つた
り、そゝした眼で見た不思議を求

めるものもある。
「先生は、一體あんなことも出来
るんですか」とそれを訊いたもの
がある。
「出来る出来んもない、そんなこ
とは行のうちの小さな部分ぢや」
と答へたと云ふ。
龍蔵の時、龍蔵の乗つてゐた自動車
が、往來でパンクした。靴の野道
であつた。タイヤと響へるのはな
か〜ひまどつた。
退屈して同行者達が、龍蔵にい
ろんな質問を發してゐた。その時
龍蔵の上を低く、赤トンボがスイ
イと飛んでゐた。
「先生、あの赤トンボ、術で落せ
ますか」
こんな場合には、龍蔵は術
機嫌が良くない、つまらぬ手品師
じみたことをして、人を感心させ
ると云ふやうな手は好まないのだ
が、又
「龍蔵」とは決して言はない。
黙つて赤トンボに人差し指一本を
向けて、何やら呪文らしいことを
口のなかで云つてゐるが、見る見
るとトンボは、龍蔵の指頭に舞ふが

如くに降りて来て、獅子舞の舞を
舞ふもの、やうに、それこそ龍
蔵は、龍蔵の自在となつた。
「人間には、これよりも容易に術
が利くぞ」
龍蔵はその時にカラ〜と笑つ
た。

龍蔵の術の外に、手塚だけを
送らせて治すのと、別に龍蔵と云
ふのを彼は行つてゐる。赤トンボ
の奇蹟よりも、龍蔵に此の方が不思
議だ。不思議だが、これで治して
置つた人が幾分ある。
男なら左手、女なら右手を、一身
の龍蔵を、その手の先に集中した
つもりで、グッと腕の上に龍蔵を
つたのを押へて、手塚をとつて、
住所姓名年齢職名を書き添へて送
れば、その手塚に向つて龍蔵する
のである。

龍蔵と云ふのは、テンカン。胃
ケイレン、子宮ケイレン、龍蔵、
助産費、ぜんそく、龍蔵、そ
うした病氣に伴ふ龍蔵を、封じ込
んで了ふのである。
この封筒では、こんな龍蔵もある
大阪富田屋の龍蔵で、月経痛に

悩んでゐるのが居た。
注射を廻々試みて、發作的に
痛みは去らない。とうとう龍蔵の
事務所へ来て、この封筒をやつて
置つたら、ケロリとなつて了つ
てまるで病氣を忘れてゐた。
四年間、それから全く何のこ
となくなつてゐた。
或時、その龍蔵の屋敷が引越を
やつた、その屋敷に、四年振りに

發作的な痛みが出た。
七転八倒の苦しみである。家人
が何もなく、龍蔵を見ると、病氣
を封じて置つた封筒を、龍蔵夫人
が「何か知ら」と開けて見たので
封が解けたのであつた。
女は龍蔵のところへ、病むまゝ
に駆けつけてあらためて封じて置
ふと、又ケロリとした。

梅ヶ谷の足を 封じて見せた熊嶽

今では昔ほど奇蹟を誇らぬ

古い新説を調べて居たら、濱口
龍蔵に關して、左のやうな記事が
明治四十四年十二月廿二日付の
載つてゐた。
梅ヶ谷は、玉椿と二人にて、龍
蔵の不思議を語り、龍蔵一職して
濱口龍蔵となる。梅曰く「龍蔵
といふ城主は、變な城主で、不思
議なことをする。金太郎が生れた
時、女房の乳汁が出ない。龍蔵に
見せると、何でもない、パツ〜

とやつつた。
乳房を押すと乳汁がポンパから
木の出るやうに飛ぶ、夫れで長男
金太郎は育つた。
だから龍蔵は、龍蔵術者になつて
了つた。今度も龍蔵で置つたが相
違はず不作法な真似をして誤り置
つた。
パツ〜に効果があるなしは別
の語としても、二人でも三千人
でも、朝から、暇までパツ〜と

龍蔵の片足を封じて角力するのだ
つた。片足封じれば、大龍蔵で
れば、私に青龍に引返して、手と
足を封じて術を、場所中だけ分
けて置ふに——」
と落し物でもせし如き龍蔵すれば
一同龍蔵をかへて笑ふ——」
當時の濱口龍蔵は、まだ眞言宗
の僧りよかの如く見られてゐた
ところに興味がある。
この足を封じて置ふことではその他
にも面白い話が残つてゐる。
龍蔵とは同龍蔵の、鳥羽に、名物
男と云はれる龍蔵があつた。濱
末といふ通稱で通つてゐた。土地
では仲々の人氣者だつた。
その男が、濱口龍蔵がしきりに
妖術を賣りものにして、鳥羽の大
龍蔵館に來て滞在して、龍蔵を
やつてゐると聞いて
「よし、俺が化の皮をひんむいて
やる」
と云ふので、何気ない龍蔵を返つ
て、普通の龍蔵を求めやうな龍
蔵で龍蔵のものを訪れたのであつ
た。

龍蔵は、すぐにそれを悟つ
たがこれも何気ない龍蔵をしてゐた
「おい〜お前さん一寸」
龍蔵は濱末を人の居ないところ
へ呼んだ。濱末はニヤリとした。
「お前さんは、俺の術を知りたい
のだから、さア、別においしいも
じやない、一つだけ龍蔵を上げる
ソラ、かうするのだ」
何事かを龍蔵した。濱末は龍蔵
で、來合せた人々に、それを龍
用して見ると、思つた通りになる
「や、これは不思議だ、面白い」
しきりに龍蔵がつてゐたが、龍蔵が
その濱末の術を解いてしまふと、
濱末の龍蔵は全然きなくなつて
了つた。
「龍蔵先生、どうかもう一べんで
い、今の奴をやつておくんさ
い」
濱末は意氣地なく龍蔵に及んだ
「宜しい」と云ふので龍蔵が又何
事かを龍蔵すると、濱末は又龍蔵を
得た。
濱末は、その龍蔵を得たので、
再びこれを除き放されては大變だ
と云ふので、濱末、卑怯にも、こ

龍蔵の片足を封じて角力するのだ
つた。片足封じれば、大龍蔵で
れば、私に青龍に引返して、手と
足を封じて術を、場所中だけ分
けて置ふに——」
と落し物でもせし如き龍蔵すれば
一同龍蔵をかへて笑ふ——」
當時の濱口龍蔵は、まだ眞言宗
の僧りよかの如く見られてゐた
ところに興味がある。
この足を封じて置ふことではその他
にも面白い話が残つてゐる。
龍蔵とは同龍蔵の、鳥羽に、名物
男と云はれる龍蔵があつた。濱
末といふ通稱で通つてゐた。土地
では仲々の人氣者だつた。
その男が、濱口龍蔵がしきりに
妖術を賣りものにして、鳥羽の大
龍蔵館に來て滞在して、龍蔵を
やつてゐると聞いて
「よし、俺が化の皮をひんむいて
やる」
と云ふので、何気ない龍蔵を返つ
て、普通の龍蔵を求めやうな龍
蔵で龍蔵のものを訪れたのであつ
た。

そ〜と逃げた行かうとしたのであつた。それを熊蔵は早くも見てとつたので

「おい、瀧末君、そりや駄目だ。熊蔵は、他の術を盗んで、逃げやうと云ふのは、心掛けが、他も、こりやつてゐるもの、後継者が無い。誰か熱心な弟子をと思つて居るのだから、本氣なら、もつと奥の方の術も就へて上げるよ」

これには瀧末も、ホロリとなつて、一たまりもなく黙つて了つて「先生、それじゃ、ほんとうに弟子にしてくれますか」

とう／＼と瀧末は泣き出した。そして化の皮をひむくつもりが、とう／＼と弟子入りと云ふことになつたと云ふのである。

白い衣をまとい、大げさなゴマをたいて、如何にも、その行を莊嚴に見せると云ふことは、若き熊蔵が好んでやつたことで、又必要な事であつたが、最近の熊蔵を見てみると、熊蔵で、患者達が、むしろ、その辭りに飽氣ないのに、失望しはしないかと思はれるほどである。

白い衣も着てゐるが、それはほんの申分け、ゴマもたいて居るがそれは瀧末の密着の職土間の一隅はらひの水を切るのも、瀧末の洗面記、と云ふ道具だてであつて切ると云ふ九字も、結ぶ印も殆ど熊蔵を罵つて、其の一喝も、昔は、勢ひ込んで「ヤッ！」などと怒鳴つたのが、近頃では「メエ〜メエ」とまるでオットセイが泣いてゐるやうな聲だ。

それでも、病者は却て、昔よりも百倍して、その術を求めて、毎日殺傷する有様。

今回の東京滞りも、それがために延びに延びて、四月頃引あける予定が、とう／＼九月まで延ばされたのも、東京の患者達の申入

のためである。

「かつぽれ」と共に 宴席でも奇蹟を 血氣時代の瀧口熊蔵

最近の瀧口熊蔵は奇蹟的なことを試みて人を驚かせるやうなことは少なくなつたが、それでも時々茶目半分にやつて見せることもある。

その一瞥、彼がまだ那智の瀧から降りて間もない頃は、盛んに奇蹟らしいことも見せた。それは先づ人々を驚かせて見ると云ふことも、彼自身が世間の驚愕者を救ふ道、熊蔵へ来れ！の縁をつくる業因ともなるからであつた。

當時は、熊蔵自身もいさゝかその奇蹟的な法力を俗に見せて得意でもあつたと見え、或時は襦袢などでもいろんなことをして見せて驚がつてゐた。

熊蔵は一向に激じなかつた。熊蔵は、無智な女達ではあるが、彼女達の寛徳方の、意外に恐ろしいことを知つて居た。そこで、ひそかに期するところがあつた。

「ようし、それでは、みんな立つて俺と踊つて見よ、手が動いたら百圓の贈賞だ」

面白がつて、女達は、ガヤ／＼と立ち上つて来た。

「サア、踊りませ」

女達は一向に激じなかつた。熊蔵は、無智な女達ではあるが、彼女達の寛徳方の、意外に恐ろしいことを知つて居た。そこで、ひそかに期するところがあつた。

「ようし、それでは、みんな立つて俺と踊つて見よ、手が動いたら百圓の贈賞だ」

面白がつて、女達は、ガヤ／＼と立ち上つて来た。

「サア、踊りませ」

九字を切ると、女達の手は元の通りになつた。

「どんなもんだ」

熊蔵は、靜かに座つて、さかづきを焼けた。

「偉いもんや、ほんまに、手が動かんやうになつたえ」

瀧見山は、其の語を、太刀山や足立山に聞かせた。それは驚て、角力界でも評判になつた。名古屋へ初めて出て行つた頃には大げさな行をやつて見せて人の目をそば立たせたこともあつた。

熊蔵は、其の語を、太刀山や足立山に聞かせた。それは驚て、角力界でも評判になつた。名古屋へ初めて出て行つた頃には大げさな行をやつて見せて人の目をそば立たせたこともあつた。

今日でこそ、熊蔵が、一べんの氣合で病氣を治すと云つて、誰も不思議としないが、その昔で、こ

「おの、女共、踊らんか〜」

「ホンマヤわ、どないしまほ」

「かなわん〜」

血氣の熊蔵も又それが得意であつた。

「世間が山師だと云ふから、熊蔵に意地になつて、不思議を見せてやつたのだ」と最近の熊蔵は、往時を回想して苦笑するのである。

「お前さん、足が感じか、立てぬか、よし〜、バア〜、それ

「お前さん、足が感じか、立てぬか、よし〜、バア〜、それ

飾らぬ性格 瀧口師の失敗談 血氣に逸つて此の逸話

本堂に上るがらんは、名の如くガランとして、榮えざる寺也。さんと、術が入らんぞ、バツ！バツ！」とやる。

「お前さん、足が感じか、立てぬか、よし〜、バア〜、それ

「お前さん、足が感じか、立てぬか、よし〜、バア〜、それ

「お前さん、足が感じか、立てぬか、よし〜、バア〜、それ

「お前さん、足が感じか、立てぬか、よし〜、バア〜、それ

ワ〜ホウラ立たねバアツ〜
歩いて見なさい。それ歩けるね、
「一週間来なさい」
足の立つた男は二三人の付添ひ
と共に船に立って歸つて行つ
た。
其の中に熊嶽が、目にかど立て
、怒鳴り出した。
「受け付けて金を取つたのは不當
である、依つて金を返還す」と
紫の印をペタ〜と二つ三つ紙へ
押し、返した。
返された男は、はんでんを着た
男だ、人足の様なその日暮らしの
者からは金を取らないのが濱口
熊嶽にあるのださうだ。
歸る時に、振り返つて見ると、
熊嶽は、行衣をのし目の紋服と着
換えてゐた、背中のホクロが見え
る、自分はホクロが抜けないので
さうな〜。
以上は、明治四十三年一月廿四
日の『東京新聞』の記事である。
二昔前のことだが、其の熊嶽に於
ける熊嶽の有様を描写した點では
現在、東京市内三ヶ所で、連日や
つてゐる熊嶽の標子も實にこの通

りである、只歸つてゐるのは、そ
の當時
「バアツ〜」とやつてゐたのが
「メエ〜」と聞えるだけで
ある。
患者に對して醫者無名な點も同
じだし、困つてゐる人には一切料
金を取らない點も同じだ。
急がしいからでもあらうが性急
な點は、近頃の方が餘程ひどい。
熊嶽所へ着くが早い「サア、來
た〜」と云つた調子で、平服の
上へ白衣を着ながら、もう熊嶽に
かゝると云ふ有様である。
其の當時は「俺は、三十八で死
ぬ〜」と自分の命數を算出してゐた
が、そんならうに死んでゐる筈
だけれど、當時の新聞記事を読む
と、ちやんと、その後で
「洋行をすれば、八十八まで俺は
生き延びる」と變なことを付け加
へてゐる。
この點が味なことを云つてゐ
るが、若い時の彼らしい面目が躍
動してゐる。
當時には、身分と失敗感もある
熊嶽で斗酒を酌せず、酔へば「か
つぱれ」をおどり、女にも飲れた
が、深く彼を愛した、當時の京都
府知事深野一三氏から熊嶽をすゝ
められてからは、サイダーで我愛
するようになった。
それでも熊嶽では仲々賑やかだ
つたらしい、サイダーで氣えんを
上げて
「私は松尾當天一と兄弟だ、」
などと、席上手品をやると、電燈
を吹き消して見せたり、さうし木
綿をつないで、徳利のきせるおど
りを見せたりして興じた。
或時は熊嶽のなかに現はれた熊
嶽の三味に合せて「紀伊の熊嶽」
をおどつたり、仲々賑に響けな
こともやつた。
又或時は、憲兵官の前で、一囀
でトンボを落して見せて得意にな
り、今度は一囀で雀の群を落して
見せると力んで見たが、それには
まんまと失敗して醜をかけたこと
もある。
「あれは、三代將軍、家光の御前
で御寶井一心翁がやつた、氣合の
術だが、どうも、あれだけは、や
り損なつた」と今でも彼はその當

時の機ひ出話としてゐる。
旅行の途中、その説教官に汽車
の中でめぐり合ひ
「濱口君、雀の一件はどうじゃ〜」
と云はれて、一等車から、三等車
へ逃げ込んだなど、多岐もない姿
を見せたこともある。
其の當時のことだ、彼へ乗込
むと、土地の熊嶽では、熊嶽をや
つてはならぬと騒しい達しがあつ
た。
そこで、熊嶽は熊嶽へ乗込
んで行つた。その云ひ草が面白い
「私は、年に七千六百五十圓、所
得税を納めてゐるぞ、これは大威
張りで御存知の筈だ。
即ち多岐熊嶽者の一人だ。政府
が、この熊嶽から所得税を徴収す
るのは、熊嶽の年收、七萬圓以上
と認めるからであつて、その收は
一體何處から来るか、その生れて
來るところはとも直さず我熊嶽の
熊嶽からではないか、その熊嶽を
停めては、年七千六百五十圓の所
得税は、政府へ差上げることが出
來ない、どうです」
窓々云つておどろかしたので、熊
嶽でも、これには一掃つて、許
したなどと云ふ機ひもある。
熊嶽へ渡つた時だつた、船中で
一等船客を食堂に集めて、一囀の
熊嶽をやつて、例の調子で一同を
煽にまいた。このなかには有名な
學者や官吏なども居た。彼は得意
になつて、興が乗ると
「一つ、この室内の電燈を一時に
消して御覽に入れませう」と得意
になり出した
「つまらんことをする奴だ」
かんで吐き出すやうにつぶやい
た老博士があつた。これを傍で聞
いてゐたのが要君の富士子だつた
「貴方、こんな偉い方々の前で、
何も、そんな、つまらん熊嶽を、
手品師みたいにしてみせる必要は
ありませんよ」
と袖を引かれて、彼も裏面に、
電燈消しをやめた。
若い頃の彼にはこんな笑話は眼
りなく響つてゐる。

東京報知新聞 (花王生) 産業人國記 三重縣の巻

人身自由術と 靈の人濱口熊嶽 明るく朗らかに

三重縣社會部ではその熊嶽の一
囀として昨年から日赤山田病院に
衣囀して盲人開眼を試み眼科部長
中野博士は昨今大忙を極め、幾
多の明かな開眼話を傳へてゐる
が、左記は去る四月十六日大阪朝
日紙上に掲載された開眼記事の一
節である
松坂の五十男は附近の大師へ九
十日のお参りをしたが、熊嶽とい
て日赤山田病院に來たが中野博士
の一囀で見事に開眼した
といふのはその男の眼は僅だけ

で開けると驚いから開けなかつ
たのです、一囀で開くなど私も
初開眼です、それにしても初め
て驚を信じ、女いで醫者を信じ
て驚るものだが、更に自然治療
力のあることも分りました
とは同博士のほなし(昭和八、四
一六六三期三重版)
濱口熊嶽師は三重縣のうめめる不
思議なる存在である、金ごう不慮
なる三三三三を以て不可思議な
る人身自由術を唱道し、眞實秘密
の靈光を掲げて三千世界の迷途を
照破し、病者を救ひ、憂苦を治し

志は社會奉仕の一念に存し其の靈
術、年と共にますます、熊嶽の境に
入ると共に、現代の世相に鑑み、
漸く正しく明るい新時代の建設に
盡すべく、一生を斯道に捧げて世
のため人のために盡す熱誠に燃え
てゐる
然らば濱口熊嶽とはどんな人物
であるか、その一囀一観によりて
人の病を治し人の憂患を拂ふこの
熊嶽の人といふも、決して神の子で
もない、また名醫熊嶽の系流でも
なく、實に紀州北牟婁郡の漁村長
島の一漁家に孤々の聲をあげたの
であつた、このべうたる一漁村の
漁家の子が今や天下の濱口熊嶽と
して盛名を博するに至つた牛面に
はその玄妙なる靈術と共に其間實
に多大の神祕を感ずるものがある
私は一種の熊嶽神を踏破するやう
な興味と期待を抱いて先づ師が誕
生の地たる長島町に出發した
紀伊長島は島勢崎相可口驛から
分岐する紀伊東線に乗換へて約二
時間で行く、波荒き熊嶽海に面
してはるが、南に長島岬山と大
洋に突出し、東方大名倉の山脈と

人の際るのを待つて居るかといふに、決してさうではない、熊嶽師は此の別荘を築くに長島町のためにたま／＼來長する名士名流に心から喜んで此れを開放し、振舞し接待して居る、此は師の知己であるといふにあらざるに、關係なく、業より政黨政派の別なく一律平等で、すべてが明らかで明るい、かくしてこの別荘は長島町の大きな誇りになつてゐると共に、また長島町の一大公會堂とも、また一大俱樂部ともなつてゐる。

この別荘の長島に建設されたのは今から二十年前であるといふ、そして建設當時から二十年一日の如く開放されてゐるのである、されば長島に來往する名士名流はこの別荘に足を止めぬものはない、大段もある、政黨の連盟もある、好事もある、財界の名流もある、その他偉人の發洩して居る事は枚挙にいとまの無い程である、別荘には別荘者が居る、料理師が居る、多数の使用人が居る、いざといふ時にはどんな大勢の客でも少しもまごつく事はない。

魚はいま海からとれたところの、前るばかりの鱈魚である、料理師が鱈に力をつけての料理、鱈のやうな長島の前にしては雄大な鱈な別荘の夜は、いかに快よくその鱈を清めて和やかな気分についで行く事であらう、しかもかかる都合における接待の費用の如き、いくら町役場からこれを出さうとしても、熊嶽師は一切これを受付けない、せめては實費の償還

だけども……と驚嘆してもこれまた驚いて受け付けない、これには熊嶽師の町役場も、筆々恐縮してはいるが、しかしその町のためにする熊嶽師のあた／＼かい温情に感服されて、恐縮しながらも衣然として來長する名流の接待に、その別荘を開放して置く、今では長島に來往する名士名流の宿所は熊嶽師の別荘ときまつた形になつて居る。

「愛國婦人會」其の他の公共團體に相當の寄附をなし、現に其の感懐は大きな束になつて居る、かういふ公共事業に對する寄附は横り横つて實におびたしい程に過してゐるのである、そこで、ある人が「まさにこれは藍じゆ裏章ものだ」と賞さんすると師は「馬鹿ナ」と一喝して「ワシヤそんな横りで寄附しろんぢやない」と容を正したといふ逸話がある。

「故郷を離れし」といふが、熊嶽師の郷里に對する愛郷の念は死に格別である、「人間はどんなにえらくなつても墳墓の地を忘れてはいかん、ほんとうに郷里を愛するものこそ、ほんとうの愛國者である」といふのが師の信念である、かうして師はその生活の根據を郷里に置き、「郷里にあると税金が安いから」といつて郷里を逃げ出す富豪の多い世の中に「税金なんかはどんなに高くともよい、それがみんな郷里のためになるのだから」といつて、郷里の田地を買ひ山林を求め、これが年々増加する

郷土愛の深さ 輝やく銅像美談 濱口熊嶽師の人間味

濱口熊嶽師誕生の地たる紀伊長島は戸數約三千、人口約六千、漁村であるだけに漁業者が全戸の三分の一強を占めて居る、水産業者の多いのは取りも直さず、漁業の盛んなことを物語するものであるが、水産業者といふも漁師が一つに多い、師は漁師の子にうまれて、漁師生活の實情をよく知つてゐるので、郷土の漁師に對する師

情は特に深いものがある。「愛國者は郷里に容れられない」といふが、熊嶽師の場合には全く此れと正反對である、郷里における師は「長島の恩人」として郷土より推戴され、偉業を擧げてゐる、師は「愛國者の郷里に容れられない」のは、その愛國者の多くが郷里と没交渉となるためであるが、師はその支那なる藝術を天下に發

揚すると共に、まず／＼郷里を思ひ、郷土に盡し、ドツシリと堅い根據を郷里に築いて居るのである、世に「不在地主」といふものがある、これは地主が其郷里において「どうも村の税金が過ぎる」といふので、この税金のがれのため、永住の土地を離れて他に籍を移してしまふのである、而もかういふ不心得の富豪が年々多くなるので、町村は爲に恒久的の財源を失ひ、その結果ますます復讐して行く状態に陥り、全国的に之が各町村の大きな悩みになつて居る。

熊嶽師はまたその藝術を施すべく、各町村に出張するや、どこでも「濱口熊嶽師來る！」と世世主の如くに迎へられ、患者を癒すの感懐を呈して居るが、師はいつも其

一方で、すべてが自分のうまれた郷里本位である。されば熊嶽師は今や郷里長島町で一番多額の税金を収めて居る、そして前年の米騒動の時にも、朝饔の賑場から米を取寄せて寄附しまた敬老會を催し、青年團を賑はし、この町一帯の多額の税金の外、毎年各方面の公共事業に對して多額の寄附をなし、地方の發展に貢献して居る、その實業も數十軒あるが、殊んど無家賃同様に、借家人の喜ぶのを自分の喜びとして一向無頓着である。

ある年、町當局では「毎年濱口さんに送金願つてゐるから」といふ理由から、前年よりもその税額の査定を低下したことがあつた、すると熊嶽師はや／＼色をなして役場に乗り込み「なぜ今年は税金を安くしたか、自分はいさ／＼か郷土の爲に盡したい心からいつも進んで税金なり、その他の寄附金を負擔してゐるのである、ワシの眞意を誤解されては心外だ」と突込まれたので、町當局はその熱誠に感し涙をこぼしながらあやまつたといふ珍談がある。

熊嶽師はまた熊嶽の念が極めてあつた、郷里の氏神長島神社にしばしば奉奠の誠意を捧げ、昨年も師でつくつた等身大の神馬を奉奠した、こゝに一つのエピソードがある、長島神社の大祭には、昔から大屋敷を出し、町の少年が馬に乗り、大馬にえられた子供は必ず出世すると傳へられてゐる、ところが去る明治二十四年、町師が少年の頃であつた、師もまたえられて「大馬車」となり、この大屋敷で乗越したのだつた、その時の大屋敷はいかにも賑々しく、眞に福徳圓満の相があつたが、翌して今日のやうに大出世をした、と長島の古者は語つてゐた。

この鎮守の宮の裏庭なる境内に立派な銅像が建設されてゐる、それは地方功勞者故石倉龜三郎氏の銅像である、しかしこの銅像をめぐりて熊嶽師の美談がある。長島の海は波荒き熊嶽海岸に面してゐるので、一朝海が荒れると、狂風怒涛すさまじく、其都度海岸一帶の被害甚大なるものがあつた

そこで町一致して大堤防建設の實現を期すべく、多年の懸案であつたが、時の町會議員石倉龜三郎氏専ら運籌の筆に當り、その大堤防建設は遂に町會を通じて工事完成し、爾來長島町は海の被害より全く更生することが出来たのであつた、また石倉氏は紀州道路の開鑿の功勞甚大なるものがある。そこで前年石倉氏の逝去するや町有力者間において、これが功績を記念するため銅像建設の議が持ち上つたのであるが、何分相當の經費を要する問題であり、また一部に反對の議論なども持ち上つて容易に議まらなかつた、その時、熊嶽師はたま／＼郷里に歸省してゐたが、この状態を眼にし平にするも黙々として動かなかつた、しかるにそれより半年の後、突如として石倉氏の銅像が在京の師から送り届けられたのであつた、町師は長島町多年の懸案を解決した石倉氏の功績は天晴れ功績として永久に輝ぶべきものである、其間生前の些々たる行動や感情を交へてこの功績を記すべきものでない、と

不幸の人よ來れ! 摩可不思議の靈術 少年時代の濱口熊嶽師

濱口熊嶽師の郷里は今や國內の津々浦々はいふまでもなく、遠く外國にまで奇蹟的名譽を博し、前後三回の世界遊藝中に驚愕をなし

いふ一大財地からこの銅像を全部自分の手で購置して町へ寄贈したのであつた、之に對照された町有志は直に結束して礎石その他の建設に着手し、こゝに盛大なる銅像建設式が舉行されたのであつた。聞くところによれば、熊嶽師は故石倉氏の生前、個人的に別段と親交のあつた跡ではなかつた、そして大堤防の實現についても、師は裏面に在つて多大の後援を續けたのであつたが、さやうなことは一向に顧みなく、只郷里に石倉氏の功績そのものに凝ここの敬意を表し、銅像をつくりて心からこれを表彰するの途に出たのである、熊嶽師はこれを近來稀なる美談として

て、まず「不可思議の魔術を
發揮して居るのである
不可思議はどこまでも不可不
思議である、熊嶽師の一場で魔術
が退散する、愛蔵が治癒する、か
うした生きた實例が深山あるとこ
ろから、多年の重運に備えられて
明るい心地のない観者、又ありと
あらゆる魔術をつくしてもその効
験のないに苦しむ観者が、一日
も早くその魔術を忘れて早く明
るくいきるために、目下東京中の
熊嶽師の市内三ヶ所の施術所に
賑と押かけて行く

すると熊嶽師は黙つて居つても
その病氣を説き、その経過を判
断する、そして百發百中極めて明
確である、されば病者は先づ初め
から絶大の信任を拂つてその魔術
を受けるのである、師は
我れ天の命を受け世に現しく不
幸の人を訪はんと欲す、我術の
靈と不靈とはまさに觀者の精神
にあるべし
と高唱してゐるが、患者の信頼を
集中して、その九字を切る一羽那
師の魔術は眞に不可思議の魔術

を發揮するのである
高僧、哲人の一生は昔から所謂
御夢式の文字で彩られてゐるが
熊嶽師に至つては實に研かれたる
玉であつた、又そこに師の眞實な
努力があり、生命線がある、もし
てその血の出るやうな魔術を行つ
たとは、まず「今日の師の名譽
を恐むるものである、私はいま、
師の魔術を行つて居る前に、先づそ
の子供の時に早くも觀の人とし
て立つべき一大奇蹟を現はしたこ
とを傳へねばならぬ
西郷南洲は「始末に終へぬ人間
でなければ天下の大事を成せぬ」
といつてゐる、熊嶽師の少年時代
はまさに此始末に終へぬ子供であ
つた、だから師の魔術は「あの始
末に終へぬ子供だつたからこそあ
れだけの立派な男になつたのだ」
と師を賞めてゐる程だ、師は入道
の時にその熊嶽の紀伊長島郡小
學校に入學したが、少しも勉強し
やうとせぬ、全く利口か馬鹿た
か判らぬ子供であつた、先生が親
切に教へても一向上の空である、
先生が「學問をせねば偉い人にな

れぬぞ」といふと「學問せんでも
偉い人になれる」といふ譯子であ
る。
熊嶽はしないが學校では暴れ放
題に暴れる、始末に終へないとい
ふの。とうとう十一歳の時學校を
驅られてしまつた、それから細ひ
き小僧となつて濱に出る事になつ
たが、その頃から濱へ出て沖を向
いて絶えず廻り書をいふやうにな
つた、元より何をいつてゐるのか
當人にも判らぬのだが、それに
師があつて、丁度お經を讀むやう
に聞き取られた、果は明けても暮
てもこれをやつてゐるので、口の悪
い熊嶽師は最初の内は「またお
經を初めやがつた」と氣にも留ま
なかつたが、いつしか誰いふとなく
「お經の威勢のよいときは熊があ
る」とか「アッ、いつてゐる時は
不漁だ」とかいふやうになり、こ
れが不思議によく當るのであつた
が、十三歳の時、こゝに續くも
一つの不思議を現はした
時は三月である、長島の濱は
長閑であつた、師はこの日亡父長
松さんと仲間の熊嶽二人に連れら

れて漁に出た、熊のお經を一杯
に張上げたので、熊嶽は「お經が
よい」と大喜びである、すると不
思議や雲の霧一つ見えぬ長閑な海
の上、しかも白雲に師は三里はか
り向ふの沖合に、何んとも知れぬ
「光りもの」を現見したのである
「光つてらあ、びか、光つてら
あ」
「光る？、何が光つてゐるのだ」と
お父さんと二人の熊嶽は仰び上
り、沖合を覗してゐるが、熊嶽はこ
れを發見して、うん光る、光る」
と不思議がつてゐる
この時、不圖師の胸に存んだの
は、この日より約二週前、同じ
長島の漁師で音次郎といふ者が土
地の熊嶽師と沖合に出る暴風に
遭ひ、音次郎は遂に行方不明とな
つたことであつた、そしてその光
りものが音次郎の死體であるとい
ふことが、ハッキリ透視されたの
は暗示か、幻覺か、感應か、イヤ
そんな名稱を付けるのは誤りであ
る、「あれは音次郎の死體だ」と
いふ感じがひらめくと共に、その
感しが師の心に根を占めて動かぬ

思ふ
今から考へれば利口か馬鹿た
か判らないといはれたこの男の天
分が初めてその刹那に發揮された
ものであつたらうと思はれます、
それから暫らくして彼は他に轉居
しましたが、間もなく熊嶽師――
其の時はまた熊嶽といつて居りま
せん、幼名は熊嶽といつてました
――は熊嶽を出で、那智山に籠つ
たといふ話を聞きましたが、私は
その後東京に出て熊嶽學校に入學
したので、久しく熊嶽師の話を耳
にしませんでした
然るに明治三十二年でした「濱
口熊嶽」といふ男が和歌山から大
阪に現はれ眞言秘密の法を唱へ、
日々來集する數百人の疾病患者に
對し、その魔術を施して、いざり
が立つたり、醫師に見離された病
病が治つたり、その他の病病がド
シ／＼治癒するので、一方から妖
僧だとか、賣僧だとか、大山師だ
とか攻撃され、遂に熊嶽から醫師
法違反で告訴され大問題となつた
のであつた、尤も熊嶽師はこの時
ばかりでなく明治廿七年熊嶽の初

めから三十六年まで各地の熊嶽
で七百何十回、熊嶽師の法廷へ四
十七回引出されて取調を受けたが
その都度公明正大の態度、或時は
裁判官の前でその實地試験をやつ
て判事の病氣を治癒した事もあり
何れも無罪の判決を受け、天下御
免の熊嶽師行者として今日に至つ
たのです
この大阪の裁判では眞言秘密の
法といふのが八釜しい問題となり
トウ／＼高野山の熊嶽師が證人と
して法廷に立つたといつてゐる、
そして後年、この大僧正が病氣に
罹り、熊嶽師の魔術で全快したと
いふことであります
當年私の入學してゐた熊嶽學校
の校長は故古實庵遺氏で、熊嶽師
の北海通長官海田牛麿、大阪府
知事になつた若林ら、大阪府
長林市、岡田源太郎博士その他
の歴々名士名士名士でありました
が、たま／＼大阪に起つた熊嶽師
の事件に多大の興味を感じ、古實
校長は將來のため熊嶽師として大
いに研究して置く必要があるとい
ふので、一件書類を取寄せて全校

熊嶽となつた、不誠心となつた
「ありや音次郎の死體だ、早く船
を出して引揚げてやれ」師の一言
にお父さんも二人の熊嶽も眼を丸
くして驚いたが、熊嶽に師の熱心
な顔色に動かされて船を滑り出す
と、それが果して音次郎の死體で
あつた、「どうして三里先きの死
體を透視したのか？」お父さんも
二人の熊嶽も呆然に取られてゐる
そして死體を船に乗せて濱へ歸る
と、この事が早くも傳はつて音次
郎の宅は人が馬山のやうになつた
「妙だナ、何て不思議な事だら
う」「彼奴には海の主が乗移つた
のだらう」と、噂とりん、
そこへ熊嶽に來たのは時の長島
熊嶽師長竹下えつ次郎さんであつ
たとして「よくした」とニコ
ニコして師の眼を撫でつ、お父さ
んの方に向つて「長松！この子は
學校へも餘り行かんだらうだが
實に不思議な子供だ、大切に養育
せよ、長島の熊嶽師」とはめち
ぎつた、この一大奇蹟は熊嶽師的
に、自ら師の天分を發揮したもの
でなかつたらうか、かくして始末

に終へない子供が一躍して神童に
なつた、熊嶽が再興して天下の濱
口熊嶽となつたのも何等の不思議
はないわけだ
長島では沖合で死體を發見する
と、昔から大漁の兆であるといつ
て、その死體を丁寧に葬ると同時
に、必ず大漁があるといつて悲し
みの中にも大喜びの期待を持つて

みるのだつた、されば師が沖合で
死體を透視したのは、その熊嶽の
遺族に死體を掘り出して喜ばせ、一
方熊嶽には大漁の神籤扱ひをされ
て大喜びをさせた、果して間もな
く大漁があつたので、濱は湧き返
るやうな賑ぎ、それから、どこ
へ行つても大持である

これは不思議と 名士の「熊嶽研究」 施術を受けた大僧正

「濱口熊嶽は實に不思議な人物で
す」と熊嶽師の幼年時代その熊
嶽の地たる紀伊長島の熊嶽師長で
師が初めてその魔術を現はして三
里先きの沖合にある漁師の死體を
透視した時に立會つた竹下さんは
靜かに語り出した
其の時の熊嶽師長は故人になつ
た北村富士太郎といつて熱心な熊
嶽師で、よく熊嶽をやつたもので
すから私も熊嶽になりいろ／＼と
話をする内「學校に濱口といふ生

徒があるが、熊嶽で勉強はせず、
おだて、も利かず、叱つても駄目
利口か馬鹿か判らぬ始末にを
へない子供である」といつてゐた
それで私も「イヤさういふ人間は
偉くなれば或はウソと偉くなるか
も知れない」など、しばしば話
に上つてゐたが、とうとう彼は學
校を退められ、熊嶽小僧になつて
る内、海上三里先きに漁師の死體
を透視したのでした、これはどう
考へても決して只事でないやうに

思ふ
今から考へれば利口か馬鹿た
か判らないといはれたこの男の天
分が初めてその刹那に發揮された
ものであつたらうと思はれます、
それから暫らくして彼は他に轉居
しましたが、間もなく熊嶽師――
其の時はまた熊嶽といつて居りま
せん、幼名は熊嶽といつてました
――は熊嶽を出で、那智山に籠つ
たといふ話を聞きましたが、私は
その後東京に出て熊嶽學校に入學
したので、久しく熊嶽師の話を耳
にしませんでした
然るに明治三十二年でした「濱
口熊嶽」といふ男が和歌山から大
阪に現はれ眞言秘密の法を唱へ、
日々來集する數百人の疾病患者に
對し、その魔術を施して、いざり
が立つたり、醫師に見離された病
病が治つたり、その他の病病がド
シ／＼治癒するので、一方から妖
僧だとか、賣僧だとか、大山師だ
とか攻撃され、遂に熊嶽から醫師
法違反で告訴され大問題となつた
のであつた、尤も熊嶽師はこの時
ばかりでなく明治廿七年熊嶽の初

めから三十六年まで各地の熊嶽
で七百何十回、熊嶽師の法廷へ四
十七回引出されて取調を受けたが
その都度公明正大の態度、或時は
裁判官の前でその實地試験をやつ
て判事の病氣を治癒した事もあり
何れも無罪の判決を受け、天下御
免の熊嶽師行者として今日に至つ
たのです
この大阪の裁判では眞言秘密の
法といふのが八釜しい問題となり
トウ／＼高野山の熊嶽師が證人と
して法廷に立つたといつてゐる、
そして後年、この大僧正が病氣に
罹り、熊嶽師の魔術で全快したと
いふことであります
當年私の入學してゐた熊嶽學校
の校長は故古實庵遺氏で、熊嶽師
の北海通長官海田牛麿、大阪府
知事になつた若林ら、大阪府
長林市、岡田源太郎博士その他
の歴々名士名士名士でありました
が、たま／＼大阪に起つた熊嶽師
の事件に多大の興味を感じ、古實
校長は將來のため熊嶽師として大
いに研究して置く必要があるとい
ふので、一件書類を取寄せて全校

の問題として研究し、當時やつと
熊嶽しかけた熊嶽師を學校に擡
ぎ、生徒に熊嶽師をかけて見たこ
ともありました、ところがこの熊
嶽師にはかゝつたものもあり、ま
たか、らぬものもあつたので「熊
嶽は仲々この熊嶽師のやうなもの
ではあるまい、モツとモツと熊嶽
いものであらう」と一時「熊嶽研
究」に没頭したのでした、それで
も私はあの時の熊嶽少年が、この
問題の熊嶽師であらうとは夢にも
知らなかつた
それから私は廿六年に學校を出
て三重縣に歸り、熊嶽師の熊嶽に
なつたが、此時には「濱口熊嶽」
の名は天下に轟く、そして私は初
めてこの天下の濱口熊嶽がさきの
熊嶽少年であることを知り、實に
愕然として「ハハアトウ／＼やつ
たナ」と、その昔「さういふ人間
は偉くなればウソと偉くなるかも
知れない」と長島の北村校長と語
り合つたことを思ひ起して快心の
情に堪へませんでした、次いで秘
が熊嶽師の本木署長に轉任した
時、或日熊嶽師が突如として私を

既にして参りました、昔の異華小
僧の面影は今いづこ、見るから
に感傷な行程、天を衝く意氣、そ
の明らかな態度はどんなに私を感
しがらしめたことでしたらう

熊嶽師は三軍總帥で時の知事を
認め親の高官と親交を重ねてみた
構態でしたが、いつか私が親戚に
行つた時、ある技師が多年胃腸病
で苦しんでゐたのが、三回の施術
でけろりと全治したとか、或る長
が小用が近いクセがあつて困つて
ゐたのが、一回の施術で適度に調
節されたとか、或人の紙社のヒス
テリーがよくなつたとか、持病の
腰痛が治つたとか、長年の肩の
コリがとれたとか、熊嶽師を取り
まく奇蹟的ないろいろの事實物語りに
感はつてゐました

その後熊嶽師が名古屋で施術を
したのであつたがこの時も、親戚
方面や総帥官まで師の療術に關
する向多かつたやうです、折角各
古屋の地方裁判所に私の親戚に當
る判事が在任して居たが、師の靈
術を研究して「よしこれが現代の
科學で説明が出来やうが、できま

どんなことがあつても驚いて動か
ない、されば師を利用して一儲け
しようなどと考へて「一つ濱口か
ら金を引き出してやれ」などとい
ふ謀叛心を起し、朝ボタ式の話を
持込んだところで決して受けつけ
ない耳にも入れない、その代り自
己の儲けるところには惜げもなく
千両金を投じてビクともせぬ

い、何しろ現實に感氣が衝くな
るのだから不思議である」といつ
てゐました

この時の出来事である、或日熊
嶽師は大概押かけて来た旅術者に
向つて「私はいま姿を隠すからよ
く見てなさい」といふうちに、見
る／＼師の姿は、見えなくなつた
「どうだ見えないうちやう」と聲
はすれども全く姿が見えぬ、そし
て今度は「い、か、姿を出さぞ」と
いふ聲がすると、忽ちあり／＼と
元の姿が現はれた、これには驚

愛國の赤誠は 先づ郷土愛から

濱口熊嶽師の大信念

濱口熊嶽師が郷土の人として世
のため人のために盡して居ること
は、あらゆる事實の示すところ
であるが、特に感すべきことは師が
忠君愛國の至誠に充たされてゐる
ことである

熊嶽師がその誕生の地たる三重
縣長島町のため、我れから進んで

日集まつた數百の患者は「あッ」
といつてたまげでしまひました
これを科學的にいへば神祕の
靈術とも申さうか、何はしか
れ、これを實地にやるから寧ろ不
思議であると大評判になりました

また師は「人の心に思つてゐる事」
をよく當てる、殆ど百發百中であ
る、そして師が、患者を一目見て
「この病氣はなほる」といへば必
ず全快するから妙である……
竹下さんの話は續々として續く

町で第一番の納税を負擔し、その
廣壯なる別荘を町のために開放し
て、多くの公共事業に盡くして居る
師は既に數回にわたつて報道した
この外また「特筆大書すべき事
業」は濱山にある、しかもこれ
については熊嶽師はつとに一家の
別業を具へてゐる、曰く

その郷土を愛するものでなければ
ば親に克く孝を盡すことが出来
ぬ、親に克く孝を盡すものでな
ければ眞にその國を愛すること
が出来ぬ、その國を愛して親
に克く孝に、眞に國を愛するも
のにはじめて、天皇陛下に
忠君愛國の至誠を捧ぐるものが
出来るのである

これは誠一代の金言で熊嶽師
は斯うこの大信念に依りて先づ心
からその國を愛し、その國親に
對しては、あらゆる孝を盡して
最も幸福なる晩年を送らしめ、か
くして忠君愛國の至誠を一日とし
て忘るゝことがない

實せん美談は明かに一般の感
應を投ずるものであらねばならぬ
熊嶽師の行動はみなこの一大信
念から生れて來てゐる、斯うその
誠意に盡し世の公共事業に盡すの
は靈魂の赤誠から生れ、その
靈術を施して病むもの苦しむもの
を治癒し、新に活潑の新生活を見
出してやる事は、世を明るく朗ら
かならしめやうとする不誠心から
出發してゐるのである、師は今や
家に巨萬の富を蓄ねた天下の濱
口熊嶽として名を高めてゐる、さ
ればたゞに金儲けとか、名譽のた
めにその靈術をやつてゐるのではな
い、眞に病めるものを救ひ、憂患
に苦しむものを治し、病癒のため
に苦しいものになつてゐる／＼な感
に方面に奔つたり、また職行的行動
に出るものゝないやうにしたいと
いふ大本願から、全く社會奉仕の
一念に發起してゐるのである

する事を成就し、當主濱口熊嶽
自身に於ても數自の行爲を脱せ
り、事情の己むなきに依り、印
の使用せざればあらざる時は、
親族會議の協賛を得、然る後印
の臨に自筆を以て記名の鑑定
なれば印の押捺あるとも記名
なきものは感て無効なる事を天
下に表明す

この家憲は明治三十八年に創設
したので二十五年來、これに依り
て萬機を處理してゐる

そして事情の己むなきものに至
ると、師はそれだけの金額を與へ
て慰撫することがあつても、同じ
て人の保護に立たぬ、熊嶽師程
の財力があり、名望高くなり社會
的地位が出来てくると、あらゆる
方面から保護を蒙られ、これを
斷るのに随分辛い場合があるが、
師はあらゆる事情を察して「人の
保護にも立たねば金も儲さぬ」主
義を押し通してゐる、保護に立つ程
ならばまたその金をやる、かうい
ふ堅い決心を斷行してゐる

しかも熊嶽師が「人の保護に立
たぬ」といふ大なる信念の前には

そこ第一大信念がある、それは熊
嶽師の郷里長島町の状態を知るに
おいて、特に一段の驚愕を得るこ
とが出来るのである

熊嶽師の郷里長島は海を前
にし山ふところに抱かれてゐる地
勢上、昔から一村始と親族つき合
で、從つて金銀の貯蓄も「オレが
金を借りるからお前のハンコを買
せ」「ヨシ来た」といふ風に人の
保護に立つことなどは何んとも思
はぬ風があり、首つり種といは
れる印を投げ出して平氣であ
るので、これが民々といふ／＼の
弊害を生じ、誰人になつたばかり
であつた身代を渡したのもある
また自分が保護人となつた積りで
ゐたのが、いつか借主となつて居
つたりしてさまざまの悲劇が演ぜ
られるやうになつた、そして町は
民々と親族して行くのである

この状態を目にし耳にしてゐた
熊嶽師は長島のためその郷土のた
め、その弊害を根本から改めなけ
ればならぬ、そして自立自衛の觀
念を根柢と樹つて先づ郷土の繁
榮をはからねばならぬといふ一大

信念から、誠として身を以てこ
れが故郷に當るべく、キツパリと
人の保護に立つことを拒絶し、家
憲を制定してその意を示したので
あつた

天真爛漫で 明るく朗らかに 熊嶽師の天分と靈感

た「門前市をなす」全くこの文字
通りの感觸を呈したのである、そ
して師の靈術はこの洋行——前後
三回の洋行の試練を経て、今日で
はまた一段と靈敏を極め、一度試
験のとびらを聞けば、寧ろ不思議
にも病氣は夢の如く平癒して行く
その施術所で、病人を一目見る
と、熊嶽師は「オ、お前は何々の
病氣だナ、ヨシ／＼治して上げ
る」と言葉は無造作であるが、醫
療をたき、恥を語り、喝きの療法
を行ひ、一喝する時の師の眼はい
かに靈感に輝やいて、奇蹟のやう

な功を現はすのであらうか、怒り
を馳せ、世に強い力を興へ、
人助け世直しのためです。その
術を發揮してゐるのである
それから一般に「手」
「脚」と「指」の方法がある。「手
指」といふのは、眞の人の氣を
一心に手先に集め、しかして「男
ならば左手」「女ならば右手」に
氣を盛り、先鋒若くはカンレーン
ヤに押し所姓名、年齢、姓名を記
入したものをいふのである、また
「封鎖」といふのは、その患者の
けいれん筋を封鎖するのである
氣はテンカン、胃けいれん、子
宮けいれん、脚麻痺、脚麻痺、
ぜん息、脚麻痺、その他は師の見
込みで氣を封鎖する事になつてゐる
この封鎖について活きた實例が
ある、大阪富田屋の患者が月經
痛に悩まされて非常に痛み、注射
をしなければならぬといふのを
大阪天王寺山通りにある師の大
阪事務所で、この氣を封鎖して貰ひ
それから四年間に一度も痛まな
かつた、然るにある時、脚宅をする

ので、引越入夫がやつて来て、神
棚に上げてあつたその封鎖を見て
何か面白いものでもあるかと開け
て見たところ、その患者は怒り
を起し、四年振りでその痛みが
起つたので驚いてかけ付け、師の
氣を封鎖して以来、今日まで再発
しないといふのである
師の天分に如何に優れた方
があるかといふことを物語るに面
白い話がある、ある年師が長州の
萩に行つた時である、とある
山道で自動車が出でパンクした
ので、暫らく山中に休憩した事か
ある、時恰も秋の初めであつた、
金風さわやかに人のたもとを吹
いて、暮れ易き日は早くも西に
傾きかける、師の先陣にたと
へられる赤トンボが、あつちから
も、こつちからも話をなして無数
にひらひらと高く飛んで行く、
また一種の美しき光景であ
る。

自動車は停々赤トンボに手間がか、
師も同行者もそれを見つ
間のわびしさといふ話か、
ズむ、すると一人が師の上を低く
飛ぶ赤トンボを指して「先生！先
生の術でこの空を飛ぶ赤トンボを
押へることが出来ませんか」と聞く
師はニコリともせず「ウム、よく
見てろ」といふかと思ふ間に空を
飛ぶ赤トンボに人指し指を向け、
何やら口に出文を唱へてその指を
押すと、アキラ不思議や、赤トン
ボは師の指先の廻りに連れて、次
第々々に低く飛び降りてはピタ
リと師の指先にとまつて、職なく
押へられて仕舞つた
この不思議を眼前に見て「アア
だナ、ドレ我等もやつて見やう」と
同行者はみんな師の真似をして
ひと指し指を向けて見たが、赤ト
ンボの方ではどれもこれも知らぬ
顔で飛んで行くのだった、昔武藝
の達人は、ヤツといふ氣合をかけ
ると空を飛ぶ鳥を落とすといふが
達人の通ずるところ、今も昔も空
の廻りがなく、師が師の指先の
あらたかさには一同舌をまいて驚
いたのだつた

師は師の術の人である、城の
人である、この術は塊つて魔
な力となり光りとなり、その一
は實に天の術となつて神妙の効
を現はす事になるのであらう、
しかして人間としての瀧口龍藏は
極めて感得的であり、驚けつり
ある、感得的であるが光風さい月
である、驚けつりであるが光明正大
である、しかしてこゝにまた人間
瀧口の眞骨髄が存在してゐるもの
である
若し野人といふ言葉が許される
ならば人間瀧口は尤なる野人とい
つて差つかへあるまい、師は極め
て天眞らん脱である、さながら神
さまのやうな、また子供のような
無邪氣で純真さがある、日常生活
における、する事、なす事はすべ
て自然の靈である、師はよく笑
ひ、またよく怒り、よく飲み、よ
く語る、直情直行、その行はんと
するところを行ひ、その説するこ
ころを説し、かういふ點について
は殆ど解やく無人である、其の
術はこれを評して「天衣無縫の妙
がある」といつたが、眞に人間瀧
口の眞髓をとらへ得て、くめども
盡さぬ名詞である
従つて師は世渡りの術とか、交

際術とか、世間術とかいふものに
ついては一切無頓着である、され
ば交際術から見ればいはゆる野
人と評されるかも知れぬ、そして
徒然に奇をてらつてゐるやうな
ろ／＼の態度を掲ぐかも知れぬが
決してさうでない、これ實に天眞
の發露である、だから、師は假令
どんなに怒つても怒ちケロリと怒
れて仕舞ふ、涙をしてゐる内にま
た會心の境に達すれば手を叩いて
大笑をあけてかゝとして笑ふ、明
かるくはがらかにその問答のわ
だかまりもない
この人間瀧口をよく知つておいて
師の術に對する時、又更に無限
の驚に打たれる、日常生活にお
いてこそ徒然無心に振舞ふが、一
度その術の境上に立つや、帝王
の權威を以てするも動かすことの
出来ぬ大信託——金ごら不眠の不
眠心を以て、その術を施して決
して驚かないのである
師が小學生時代は名代のあはれ
ツ子で、或時先生に「立たされたの
神童」に選され、大きなソロバン
を頭上高く兩手に持たされて教室

十年の不眠症が

夢のやうに治る

熊嶽師の一大美點

に立されたが、怒りそのソロバン
を投げ捨て、教室を飛び出した事か
あつたといふが、そのおもひは今
でも鮮よく見られる、しかし師が
一應笑ふや、いかにも調和和や

かで眞に泣く子もすがるといふ大
大きな聲がある、師の足は眞
にけいれん筋の如しといふ一説で
書くと思ふ

らゆる手もかひなかつたのが、大
スツカリ全治したといふので、大
喜びで挨拶に来てゐた
瀧口龍藏は耳聾、眼疾科の一家
で、瀧口の名前であるが、熱心な
研究と内外餘りに多忙を極めた、
めに、十年前から猛烈な不眠症に
をかされ、あらゆる醫藥を盡して
も効果なく、非常に苦しんでゐた
然るに或時東京の帝大病院へ来た
時、或患者から、熊嶽師の術を
受けて、あんなの眼があいたとい
ふ話を聞いたが、その時は「そん
な馬鹿げた話があるものか」と一
笑に付してゐたのであつた

ところがどうだ、一回と師の
術を受くるに従ひ、あたかも一
枚紙をはくやうによくなつて来る
そこで、最後の難ひは遂に瀧口の
信用と打つて驚り、遂に瀧口の
術を受けてゐる内、永年の不眠
症はスツカリ全治し、ゆつくりと
七時間もねむれるやうになり、ま
るで夜が明けたやうな驚喜に思
まれたのであると、瀧口さんの喜ぶ
こと！
「夢不思議！ かういふ實例はま
だ、瀧口にある

の不思議とするところも師に取つ
ては少しも不思議ではない、これ
實に師が那智の山奥で、獲得した
「不眠の術」なのである
むかし、武藝の達人は「すきが
あるならサアとこからかも知り込
んで来い、寝て居る時でも、不用
意な時でも一向かまはん」といつ
て門弟を驚かし、驚かせたもの
だ、その門弟達大いに口惜しがつ
て先生が酒に酔つて熟睡した眞夜
中をねらつて、スツ此時とばかり
に打込まうとすると、今までいび
さをかいて熟睡したとばかり思つ
てゐた先生が、いつの間にか眼を
さまして居つて、却て大喝一聲さ
れたといふ邊語が響つてゐるが、
心身鍛練の妙境は今も昔も變る事
なく、この妙境三昧にはひつた師
にして初めてその眞髓が一段の光
明を放つのも、決して不思議では
ない
熊嶽師に取つて特に傳ふべきこ
とは名利にん淡たることである
今の世の中は名利を求めてウヨウ
ヨして我利々々亡者が瀧口ある
師はよく語り、よく説するが、そ

瀧口龍藏師は目下東京に在
住し、第一事務所を芝罘徳川町二
丁目、第二事務所を下谷區
入谷町三七交正俱樂部に、第三所
事務所を芝罘伊豆子四〇萬盛館に設
け、この三ヶ所において連日午前
六時から午後一時まで、その醫術
を施し、奇蹟的效果を現はしてゐ
る、されば、長年の病苦を救はれ
た患者は、甲から乙へ、乙から丙
へと相傳へてその術を乞ふもの
非常に多い、しかもこの東京の施
術所は、昨年十二月廿一日に開か
れ、来る六月末まで日延べしてゐ
たのであつたが、各方面から申込

者殺到し、患者からまた一延
期を切望されるので、師もその希
望を容れて警定を變更し、更に來
る九月二十七日まで延期し、施術
を行ふことになつた

師の醫術を受けて永い間苦しん
でゐた病氣の全癒した實例は瀧山
であるが、ツイ數日前、私が東京の
瀧口邸を訪ねてゐた時、瀧山
瀧口邸院長瀧野醫學博士が十年間
の不眠症が夢のやうに平仲したと
いつて、お禮にやつて来て涙を流
さんばかりに喜んでゐた、また社
會事務局長原保雄氏の坊ちゃん
これも約一年はしかで苦しむ、あ

置いたわけではなかつた

これは約一年はしかで苦しむ、あ

の愛を施していかに入財けをし
て来たかといふことについては、
「問はずんば答へず」の主義で、
自分の口からこれを吹聴するやう
なことは絶対にない、師は恐れ多
くも、さる、やんごとなき方の前
にも招かれてゐる、また日本有数の
某々大富豪の邸宅にも呼ばれて
ゐる、これが世の名利を好むもの
であつたら、葉々しくいと誇り願
に吹聴して、大看板にするであら
うが、師は決して人に吹聴するや
うなことをしない、人に聞かれて
も「サアそんなこともありまして
カナア」といふやうな態度で多く
を語らない

それから師の一大美談はその昔
を忘れないことだ、紀伊と伊勢の
國の堺に有坂山といふ高い山があ
る、その嶺里長島を出で、この有
坂山を越れば、師は天晴れ天下
の隘口眼獄であるが、反對にこの
有坂山を越して嶺里長島に入ると
きは、昔の親垂れ小僧——暴れた
少年時代の昔に返つて、師は少し
の悔もなく、又何等イヤ味もなく
なつかしき故郷の懐に飛び込むの

の家裏といふのはほとんど名ばかりで、
實際にも足らぬ金で、町の人の
や、去る三月の事であつた、八十
歳以上の老人數十名を長島嶺里に
招待し、祝老會を催して慰安し、
茶菓を供し記念品を贈呈し、半日
の歡談に老人達はすつかり嬉しい
気分になり老を忘れて大喜びであ
つた等々、どこまでも平和に祝賀
に町をよくしようとする祝老會の
苦心と、師の真心とはいつてもびつ
たりと合つてゐるといふ

である、人間隘口の人間味はこの
無我の境に一語よく褒められる
師は嶺里に降ることがあつても
その日程は如何にも忙はしく、ま
た慌たしい、その忙はしい中を
多数の來訪者に迎送して郷人と親
しむのであるが、ヒヨツと姿が見
えなくなることもある、すると、
間もなく漁師が——男も女もソロ
／＼とその壯麗な別荘にやつて來
る、家人が「どうしたのか」と出
て見ると、これより先き、師はそ
の漁師町を戸別に訪問して「誰つ
てるものはオラがとこへ來い、お
米位はやるぞ」と無造作に挨拶し
て歩いてゐるのだつた、そこで漁
師町の人々は喜んでやつて來るの
だつた

からいふことには慣れてゐるの
で、家人は少しも驚かない「また
先生の道楽が初まつた」とニコ
／＼しながらお米を出してやる、
こんなことで、十俵や二十俵のお
米は立どころに空になつて仕舞ふ
そして漁師達がボク／＼して歸つ
て行くところへ、いつの間にか師
が外から歸つて來て、その嬉しさ

するので、町の人は「濱口さんは
町の安全べんだ」と推賞してゐる
長島町は一方海に面し、山に圍
まれてるので、宅地が割合に少な
い、そこで師は山を渡つてはその
山を崩して立派な宅地をつくる、
これが費用ははく大で、利殖の點
から行けば從から採算のとれるも
のではない、しかし師は長島の宅
地を増加して土地の繁榮を圖ると
いふ立前から、損とか得とかとい
ふ事は全然除外してかゝるのであ
る、山が宅地になつてそこに家が
建てられる、人が住む、事實は師
の財産の一部となるのだが、結局
はこれで長島町の新財産をつくる
事になるわけだ、師のやり方はす
べてかういふ風に大局に達観して
ゐる、大きいいへばどこまでも國
家本位である

それから嶺里で一つ話となつて
ゐるのは師の親孝行な事である。
師の親父は未だ全く師の成功を見
ずして長逝したが、あとに残れる
哀母に對し、師は子として出来る
だけの孝養を盡くしたのである、
嶺里長島の別邸は、師がほとんど

博愛心に富み

公共事業に盡瘁

熊嶽師に警察の證明

身元證明書
本籍住所共
三重縣北牟婁郡長島町八百
七拾七番地ノ一 濱口熊嶽
明治十一年十二月二日生
右者目下實業七拾方圓を有し博
愛心に富み公共事業に盡すいす
前科無之右證明す
昭和六年九月廿六日
三重縣長島警察署印
これは濱口熊嶽師の嶺里、紀伊
長島警察署から交付された師の身
元證明書の寫しである

濱口熊嶽師は熱烈に慈善愛國を
振出し「愛國の赤旗は先づ郷土愛
から出發しなければならぬ」とい
ふ確信の下に、その嶺里に盡くし
郷黨に盡くせる義事実行は山ほど
ある、この證明書にある通り「博
愛心に富み公共事業に盡すいし」し
てゐるので、嶺里の長老を初め役

かな笑顔で「ホウまた來いよ」と
あの泣く子もすがるやうな、和や
喜んでゐる

此の證明書には、濱口師が「七
十萬圓以上の財産を有し……」と
あるが、これはたゞその嶺里長島
町にある師の財産だけであつて、
この外師は長島町以外、その近接
町村に多大の土地、山林を所有し
外國銀行にも相當の預金あり、ま
た北海道と朝鮮に一大農場があり
東京、大阪、和歌山、名古屋にこ
ろ大なる別荘遊びに土地を所有し
またたはせて珍寶的書畫骨とうを
珍蔵して居るので嶺里の消息通は
濱口師の財産は少くとも百五十萬
圓を下るまいと推察してゐる

町のために公開し常に來往の客が
が宿泊するので、自然出入が多
く、一母の心を傷ましむるが
如きことありでは親子の道にあら
ずとなし、別に隠匿なところに隠
居所を建て、深くしままでの幸
養を盡くし、少しも心をおくこと
ろなく、いと心安らかに、氣の向
くまゝ意の從ふまゝに樂しく、そ
の餘生を送らしめたのであつた

今ほむかし、師が嶺里を出て那
智山の奥に修行を行つた、その
修行を請得して、或時嶺里に歸つ
て來た時には、町民はほとんど相
手にするものがなかつた、ところが、
嶺里に近い三野村の豪家の
娘が、熊嶽師のために大苦しみ苦し
み抜き、切なき時の神様みの格で
師を招いたのであつた、そこで師
は「ヨシ／＼治して上げる」とば
かりに、一喝すると、その痛む齒
が忽ちポロリと抜けて夢のやうに
平ゆしたのである、これを目にし
た郷人は、忽ち師の聖術に感銘し
て、今度は神様扱ひをするやうに
なつたのであつたが、今や師の令
名天下に高く、その嶺里はまた師

擡する外、あらゆる公共事業に盡
くしてゐる熊嶽師は、警察方面にも
我れから進んで献仕し、現に長島
警察署に尙武思神鼓吹のため、囃
劍道場を建築して寄附し、また警
察署内のイス、テーブルその他の
御品をも寄附してゐる

更に熊嶽師について探聞すると
ころによりと、師は常に、町や警
察でやらうとしてゐる施設で、費
料や經費の懸係で延々になつてゐ
るやうな事があると、ホントウに
町のためになると考へれば努力で
ドシ／＼やつて退ける、師黨のた
めに盡くすといふよりも、かうい
ふ事をやるのは公人としての自分
の使命であるやうな氣持で、アツ
サリとやつてくれる、そして對
人にには迷惑をかけず、ウツを云
はぬ、特に老人をいたはりまた貧
しいもの、病むものに對しては非
常に同情が深い

東京時事新報 (安濃津生) 人物風土記 三重縣の巻

岩手では齋藤首相

三重縣では濱口熊嶽

がお國自慢

何處の國にもお國自慢と言ふものがある。名所、名物、人物何れもお國自慢の材料に數へられるが人物風土記は人物お自慢である。早い話が岩手では齋藤首相をお國自慢の一つにして感服してゐる。それは首相が岩手出身だからである。

茲に三重縣の人物風土記を撰するに當つて先づ選ばれる土は政治家として國會開設以來の議員である尾崎行雄先生、實業家として眞珠王の名高き岡本幸吉氏、人身自由黨の創始者として名高きさくさ

郷、御木木氏は志願、濱口氏は北半島縣の出生である。

岩手では齋藤首相をお國自慢とする。これは岩手縣の出生地である。齋藤首相は岩手縣の出生地である。齋藤首相は岩手縣の出生地である。

三重縣では濱口熊嶽をお國自慢とする。濱口熊嶽は三重縣の出生地である。濱口熊嶽は三重縣の出生地である。

がお國自慢。これは三重縣の出生地である。がお國自慢。これは三重縣の出生地である。

を失敬。濱口熊嶽から誕生せしめたことか！

師の出身も熊嶽法の一つであつて、師は醫學が最近に痛感した熊嶽法の必要を數十年前に痛感したものと云ふことが出来る。

師の出身も熊嶽法の一つであつて、師は醫學が最近に痛感した熊嶽法の必要を數十年前に痛感したものと云ふことが出来る。

師の出身も熊嶽法の一つであつて、師は醫學が最近に痛感した熊嶽法の必要を數十年前に痛感したものと云ふことが出来る。

である。これによれば師の術は熊嶽法である。これによれば師の術は熊嶽法である。

熊嶽法の一つであつて、師は醫學が最近に痛感した熊嶽法の必要を數十年前に痛感したものと云ふことが出来る。

熊嶽法の一つであつて、師は醫學が最近に痛感した熊嶽法の必要を數十年前に痛感したものと云ふことが出来る。

熊嶽法の一つであつて、師は醫學が最近に痛感した熊嶽法の必要を數十年前に痛感したものと云ふことが出来る。

濱口熊嶽の施術は 醫藥の効を妨げず 十四歳にして修行の 爲め入山す

あつたとも云へる。熊嶽法は一種として神聖となつた。それは三里も沖合の光り物と云つた事からである。

今日醫學界の進歩は實に目覚ましいものがある。うんぬんを極めたとしても、過言ではあるまい。それにも不測、不治の病に侵されて長壽を全ふし難はざる病者の如何に多きことか。今日醫學界の發達に於て、無数の名薬を容易に服用し得る現状に於て、不治の病の存在は何を物語るか？

師の術も熊嶽法の一つであつて、師は醫學が最近に痛感した熊嶽法の必要を數十年前に痛感したものと云ふことが出来る。

熊嶽法の一つであつて、師は醫學が最近に痛感した熊嶽法の必要を數十年前に痛感したものと云ふことが出来る。

熊嶽法の一つであつて、師は醫學が最近に痛感した熊嶽法の必要を數十年前に痛感したものと云ふことが出来る。

燈の下に小さく籠りこんで黙りこんでゐた」と云ふことである。如く等閑に忘れず出生地を愛する情年と共に深いものがある。

序にもう一つ書いて置きたいのは現在長島町で最高納税者が他ならぬ瀨口熊嶽師であることだ。

現に長島町には師の別荘がある。熊嶽の蔵は美、内部の調度の贅麗なること尋に見る建物で土地の人々が「長島町に過ぎたるものには瀨口熊嶽師の別荘がある」と云つてゐるのを聞いても分る。御承知の通り師は殆ど大阪、東京に在住し餘暇を見ては各地に巡遊して施しを以てて患者を救つてゐるのであるが、長島へ歸ることは殆ど無である。然らば何故に萬金を投じて瀨口熊嶽師の別荘を建築したか？これ師の愛郷心の發露に他ならない。現在の長島町は前記でも述べたやうに紀勢東線の重要驛であり、新州灘に面した一帯港でもある關係上名士の來訪されるものが少なくない。さうした時に名士の休憩、宿泊に適當な設備のないやうでは町の恥辱であるといふ考へから壯麗な別荘を建築してその用に供されたのである。又嘗

熊嶽師の超人的修行 行と眞言三密の法

斯して彼は人身自由術を會得した

十四歳の三月十日熊嶽師——幼名熊嶽——は老僧からの命令で那智山へ修行のスタートを切つたのであるが、入山の用意は前にも述べた様に十三歳の夏老僧夢比に立ち初めて熊嶽に入山のことを告げた時からであつた。

これ等のことは筆者の知る限りでは心算上の術語で云ふ熊嶽師及び熊嶽の所作であつたと考へられる。一應に今の科學萬能、理知主義の時代では、心算の神秘的な作用を忍術師か手品師の魔術化のやうに考へて居る者が多い様であるがそれは大變な誤解である。

心算學者の云ふところによると、理知主義者の誤解の如きは眞の上皮の認識であつて、心算による認識、言葉は換へて云へば熊嶽師一にして無我境に入つた時は所謂眞に

つた老僧の夢であつた。斯くして熊嶽は老僧に導かれて入山したのである。

以來老僧は師匠であり熊嶽は弟子である。師弟山に居住する事四春秋、其の間師匠は峻厳なる教へを以てて弟子を導き弟子は苦行を以て師に從つたのである。それは文字通りの超人的修行であつた。然らば熊嶽のこの超人的修行とは何んな修行であつたのだらうか？

茲で筆者はその修行の委實を述べ前記に筆者が師匠である老僧が如何なる人物であるかの不審を抱かれて居る事と思はれるので、一通り老僧の何人であるかを調べて見やう。然し遺憾なことは熊嶽師自身も此の老僧に就ては知るところが少ない——と云ふのは當時の熊嶽師匠の人となりを知る必要なく熊嶽師も亦自己を語る事が熊嶽の修行に當つて益なきを恐るして居た——ので餘人の筆者より詳しく知る由もないが熊嶽師の記憶によると、この老僧の俗姓は實川氏と云つて當時九十二歳の高僧に生き

白くくしやくたるものがあり白髪白せん、怒れば眼光鋭く人を射るも一服の傳相あり、身は眞言宗の出家であつたとの事である。筆者尋するに實川氏は眞言三密を成就した金ごう不慮の高僧であつたに相違ないと思はれる。

依之觀れば明かなる如く熊嶽の修行も亦眞言三密の號へを應得するの修行に外ならなかつたことを知ることが出来る。

筆者は熊嶽師が自ら語る當時の修行者行をつぶさにして眞言の修行を止める事が出来なかつた。悲壯な決意の下に眞言を體悟して熊嶽水柱の下る那智の飛ばくし身を以てして水ごりの修行の如き、其他の修行の勤々について筆者の聞いたところは次號で述べる事にする。

大きなアザが施術二回で取れた

三重縣宇治山田市會橋町四四廣三平氏の娘枝さん(八ツ)は生れながらにして前額部に大きなアザがあり、其の腫さは生みの親で

も愛を感かすほどであつた。娘の行末を案じて熊嶽は金を惜まず醫者に薬に治療を請けたが一向効目が見えなかつた。偶々熊嶽師が山田市新明寺で熊嶽を公開した時思ひ附つた熊嶽は瀧る、者ワラをもつかむ思ひで熊嶽師を訪ね師の施術を受けたところ驚く可しッタタ三回でその大きなアザが跡形なく取れて別人間のやうに可愛い娘になつた。

いざりが立つ

岐阜市金津吹町二〇番澤保之助君(七)は青年時代の道樂から淋毒が膿血に入り遂にリョウマチスを併發して所謂イザリとなつたが熊嶽師の熊嶽は松葉杖で治療を受けに來た澤君のいざりを三日間で不思議に少しも歩けなかつたのが二三歩づつ、歩け、五日目で松葉杖の必要を認めず、七日目には殆ど全治し同君は勿論家内一同大喜びで師を救世主のやうに尊んで居ると云ふ事である。

胃潰瘍も治る

平城府徳町三十三野田武治氏よりの

愈々修業に入る

狭い岩窟での起居

水垢離と熊嶽師の信念

高僧、熊嶽が深山に草堂を結び又は岩窟に起居して只管心を練り技を磨いた例は史實に明らかである。例へば高僧の例では弘法大師の如き、日蓮上人の如き、武人例では伊東一羽、藤原ト等々の事蹟は一般に熟知せられて居るところである。

熊嶽師の那智山での修業も高僧の熊嶽のそれに似て、場所は那智本瀧の近く、岩窟はお粗末な岩窟と

云ふよりも洞穴に類する不自由な穴の中であつた。

熊嶽師が老僧實川上人に導かれて初めて岩窟に、はひ込んだ時は「人間が果してこんな所で暮らせるのだらうか？」と思つた相だが今迄兩眼に可憐がられて塵の上に寐そへつて居た子供熊嶽には無理もないことである。岩窟の住居で師せうの實川上人と弟子の熊嶽とは一層どう云ふ風的生活様式であつたか？熊嶽の間に於て熊嶽師は「左様、岩窟内は奥まつた一畝廣い所が一坪餘りで、立つて見ると圓のつかへるところと僅に立てるところがあつた。一畝奥に岩が櫛のやうになつて色々なものが並べてあつた。休息、横臥は枯草を敷いて、その上に休むのである。食物はそば粉の練つたものが主で木の芽、草等も食べた」と云つて居る。

筆者尋するに長島の漁村育ちの熊嶽が斯かる山奥で前記の様に食物の制限された生活は想像以上の苦行であつたに違ひないと思ふ。これに就て熊嶽師曰く「最初はとてをそば粉などを口にするだけの勇氣がなかつたが人間の意の中は食慾ほど烈しいものはない。眼が迫つてつい一口、二口たべるとそば粉とて腹に溜つるのはうまい食物と變りない。それが慣れるとうま味が出て來て常食が苦にならなくなつた。ちやが普通の人には決してうまいものではないぞ！」と笑つて語された。

入山後二ヶ月ばかりは瀧の瀧口

へ水を汲みに行く事、そば粉をねる事、二つ以外には別段出す事もなく遊び事したさうだが丁度今の季節の頃で那智金山が雪に包まれたすがくしい初夏の成朝熊嶽は突然師せうから「今日から汝に修行させる故念を入れて水ごりを取つて来い」と云はれた。其の日から愈々本格的修行が初まつたのである。

水ごりと云ふのは今の言葉で云ふと冷水浴の事であるが熊嶽師の云ふ如く剛者は氷の上に非常な相違がある。と云ふのは一脱に冷水浴の効能は既に身體を壯健にするとのみ信じてゐるやうだが、それもよい、然しそれは究末のことであつて本は心——意志——の丈夫になることである。不逞の勇猛心を養ふことである。

此の事が一脱世人に認識されて居ないやうである。

熊嶽は次第に修行を積み九字を切り呪を唱へることが出来るやうになつた、其間不眠の行、瞑息を重へる行から段々至極の行を始め終に切斷を成就するに至つたので

ある。

元來熊嶽の術は一脱神妙である、神通力を有すると聞かれて居るが熊嶽師自身は極めて神妙の力を藉りて非ざれば生活現象を解明出来ないとか、生命の科學——生理學——を専攻し醫學

の進歩を阻がし、迷信を培ふものでなく、飽まで醫學を認め、醫學と共に奮闘して師自身の術によつて熊嶽法に貢献しつゝあるのであつて熊嶽でも述べた通り醫藥の効を擡げないのである。

施術の効果

病患全治の數々

北米よりの禮狀

熊嶽師去る大正元年十二月、熊嶽分館に其後熊嶽師好ならざるを以て當館白人醫院に入院させ診察を受け候處、熊嶽師と説かれ醫藥の効もなく、熊嶽日に昇進候に付き日本醫師を擧げて説經相受け候處、熊嶽師の血の道との説經に有之醫師の指し圖を守り服藥候も其の効もなく、熊嶽に申しん、熊嶽師に足部しびれて一歩も歩行する能はざるに至り、只死を待つのみ候處、折しも先生渡米せられ熊嶽師を相受け候處、熊嶽師の場に於て現はれ一週日の後にはさしもの熊嶽も

熊嶽師は去る大正元年十二月、熊嶽分館に其後熊嶽師好ならざるを以て當館白人醫院に入院させ診察を受け候處、熊嶽師と説かれ醫藥の効もなく、熊嶽日に昇進候に付き日本醫師を擧げて説經相受け候處、熊嶽師の血の道との説經に有之醫師の指し圖を守り服藥候も其の効もなく、熊嶽に申しん、熊嶽師に足部しびれて一歩も歩行する能はざるに至り、只死を待つのみ候處、折しも先生渡米せられ熊嶽師を相受け候處、熊嶽師の場に於て現はれ一週日の後にはさしもの熊嶽も

の進歩を阻がし、迷信を培ふものでなく、飽まで醫學を認め、醫學と共に奮闘して師自身の術によつて熊嶽法に貢献しつゝあるのであつて熊嶽でも述べた通り醫藥の効を擡げないのである。

熊嶽師は去る大正元年十二月、熊嶽分館に其後熊嶽師好ならざるを以て當館白人醫院に入院させ診察を受け候處、熊嶽師と説かれ醫藥の効もなく、熊嶽日に昇進候に付き日本醫師を擧げて説經相受け候處、熊嶽師の血の道との説經に有之醫師の指し圖を守り服藥候も其の効もなく、熊嶽に申しん、熊嶽師に足部しびれて一歩も歩行する能はざるに至り、只死を待つのみ候處、折しも先生渡米せられ熊嶽師を相受け候處、熊嶽師の場に於て現はれ一週日の後にはさしもの熊嶽も

嚴冬の荒行

瀧に懸る修験

熊嶽師切腹して瀧壺に入る

熊嶽師の修行は五臓を苛み、不自由な衣食住を強要することから更に進んで不逞の精神、即身成佛の境地に達することである。

熊嶽師は去る大正元年十二月、熊嶽分館に其後熊嶽師好ならざるを以て當館白人醫院に入院させ診察を受け候處、熊嶽師と説かれ醫藥の効もなく、熊嶽日に昇進候に付き日本醫師を擧げて説經相受け候處、熊嶽師の血の道との説經に有之醫師の指し圖を守り服藥候も其の効もなく、熊嶽に申しん、熊嶽師に足部しびれて一歩も歩行する能はざるに至り、只死を待つのみ候處、折しも先生渡米せられ熊嶽師を相受け候處、熊嶽師の場に於て現はれ一週日の後にはさしもの熊嶽も

熊嶽師は去る大正元年十二月、熊嶽分館に其後熊嶽師好ならざるを以て當館白人醫院に入院させ診察を受け候處、熊嶽師と説かれ醫藥の効もなく、熊嶽日に昇進候に付き日本醫師を擧げて説經相受け候處、熊嶽師の血の道との説經に有之醫師の指し圖を守り服藥候も其の効もなく、熊嶽に申しん、熊嶽師に足部しびれて一歩も歩行する能はざるに至り、只死を待つのみ候處、折しも先生渡米せられ熊嶽師を相受け候處、熊嶽師の場に於て現はれ一週日の後にはさしもの熊嶽も

熊嶽師は去る大正元年十二月、熊嶽分館に其後熊嶽師好ならざるを以て當館白人醫院に入院させ診察を受け候處、熊嶽師と説かれ醫藥の効もなく、熊嶽日に昇進候に付き日本醫師を擧げて説經相受け候處、熊嶽師の血の道との説經に有之醫師の指し圖を守り服藥候も其の効もなく、熊嶽に申しん、熊嶽師に足部しびれて一歩も歩行する能はざるに至り、只死を待つのみ候處、折しも先生渡米せられ熊嶽師を相受け候處、熊嶽師の場に於て現はれ一週日の後にはさしもの熊嶽も

熊嶽師は去る大正元年十二月、熊嶽分館に其後熊嶽師好ならざるを以て當館白人醫院に入院させ診察を受け候處、熊嶽師と説かれ醫藥の効もなく、熊嶽日に昇進候に付き日本醫師を擧げて説經相受け候處、熊嶽師の血の道との説經に有之醫師の指し圖を守り服藥候も其の効もなく、熊嶽に申しん、熊嶽師に足部しびれて一歩も歩行する能はざるに至り、只死を待つのみ候處、折しも先生渡米せられ熊嶽師を相受け候處、熊嶽師の場に於て現はれ一週日の後にはさしもの熊嶽も

熊嶽師は去る大正元年十二月、熊嶽分館に其後熊嶽師好ならざるを以て當館白人醫院に入院させ診察を受け候處、熊嶽師と説かれ醫藥の効もなく、熊嶽日に昇進候に付き日本醫師を擧げて説經相受け候處、熊嶽師の血の道との説經に有之醫師の指し圖を守り服藥候も其の効もなく、熊嶽に申しん、熊嶽師に足部しびれて一歩も歩行する能はざるに至り、只死を待つのみ候處、折しも先生渡米せられ熊嶽師を相受け候處、熊嶽師の場に於て現はれ一週日の後にはさしもの熊嶽も

熊嶽師は去る大正元年十二月、熊嶽分館に其後熊嶽師好ならざるを以て當館白人醫院に入院させ診察を受け候處、熊嶽師と説かれ醫藥の効もなく、熊嶽日に昇進候に付き日本醫師を擧げて説經相受け候處、熊嶽師の血の道との説經に有之醫師の指し圖を守り服藥候も其の効もなく、熊嶽に申しん、熊嶽師に足部しびれて一歩も歩行する能はざるに至り、只死を待つのみ候處、折しも先生渡米せられ熊嶽師を相受け候處、熊嶽師の場に於て現はれ一週日の後にはさしもの熊嶽も

熊嶽師は去る大正元年十二月、熊嶽分館に其後熊嶽師好ならざるを以て當館白人醫院に入院させ診察を受け候處、熊嶽師と説かれ醫藥の効もなく、熊嶽日に昇進候に付き日本醫師を擧げて説經相受け候處、熊嶽師の血の道との説經に有之醫師の指し圖を守り服藥候も其の効もなく、熊嶽に申しん、熊嶽師に足部しびれて一歩も歩行する能はざるに至り、只死を待つのみ候處、折しも先生渡米せられ熊嶽師を相受け候處、熊嶽師の場に於て現はれ一週日の後にはさしもの熊嶽も

熊嶽師は去る大正元年十二月、熊嶽分館に其後熊嶽師好ならざるを以て當館白人醫院に入院させ診察を受け候處、熊嶽師と説かれ醫藥の効もなく、熊嶽日に昇進候に付き日本醫師を擧げて説經相受け候處、熊嶽師の血の道との説經に有之醫師の指し圖を守り服藥候も其の効もなく、熊嶽に申しん、熊嶽師に足部しびれて一歩も歩行する能はざるに至り、只死を待つのみ候處、折しも先生渡米せられ熊嶽師を相受け候處、熊嶽師の場に於て現はれ一週日の後にはさしもの熊嶽も

偉大なる野人

嶽口熊嶽師の

人格と人身由術

三重縣北牟婁郡長島町嶽口熊嶽師、熊嶽師と對峙すべく記者が嶽口に訪れたとき、熊嶽師は記者と對座するや否やいきなり云つた

「彼はうそが一語もひだ。どんなことがあらうとも絶対にうそを云はぬと云ふことが彼の偉大とするところだ」

そして熊嶽師は一枚の寫眞を記者に示した。その寫眞は熊嶽師の寫眞であつた。寫眞を示しながら熊嶽師は更に續けた

「その寫眞の裏を見て下さい。彼がうそを云はぬといふことのもつとも手近な證據だから……」
その寫眞の裏面には次の影行が毛筆で書かれてあつた
身元證明書
本籍住所共
三重縣北牟婁郡長島町八百七十七番地の一
濁口 熊嶽
明治十一年十二月二日生
右者目下資銀七十萬圓を有し、博愛心に富み公共事業に盡す、前科無之を認む
昭和六年九月廿六日
三重縣長島警察署印
そして熊嶽師は自分自身について

「それから熊嶽師のみが持ち得る人身自由術について語り始めた。それを語る熊嶽師の態度は如何にも粗野な感じである。然しその粗野な感じは對峙する者に驚かすの不快も感じさせぬ、自己が斯くありと斷言したことをゴツンゴツンと云ふやうな感じで師は語り續けるのである。斯くそれは斯くの裝飾もない赤裸々な濁口熊嶽師を自身に對するといふ感じだ。そして記者が更に感じたことは、對峙中の師から受ける感想は師が偉大なる野人であるといふことであつた。偉大なる野人とは熊嶽師が三年の修行を積んで那智の山奥から再び此の馬界へ歸つて来た時に人々がおそらくは受けたであらう神々しき野人としての感想も、さだめしき偉大なる野人としての感想師である、そして對峙中はつきり感じられることは師の持つ信念の強さと眞實の大きさと深さと更にそれに加算される師が持つた、かかな人間味である。これは明かに師の人格の大きさを測る所である、それらで

なければならぬ。信念の強さ、眞實の大きさ、そして人間味の豊かさを流身に浴びながら記者は熊嶽師の語をしみじみと聴いて来た。そしてそれを聴きながら師の語りかへ師の語に對してはさむ餘地のなかつたことを記者はこゝに明言し得る。まことに濁口熊嶽師はうその大嫌ひな人であるといふ印象をはずり受けたのであつた。

熊嶽師が行ふところの人身自由術の術の眞髓については到底口や筆では表現し得ぬ至極妙奥の極所であるが、敢ていふならば、那智山で師の奥師實上人が熊嶽師の三密法を傳へて、師を再び社會へ歸す時、
「汝が授かつた金ごう感動力を以て一切衆生の病患痛苦を救へ。世間苦の只中に汝の身を置く時、そこにはじめて佛法の善果を得ん」との遺訓を興へられて出山以來卅有餘年、全世界の師と對峙する病患痛苦のために、此の突撃して無形の利劍を揮ひ、その痛苦を救済して来たのである、病患痛苦の者が師と對峙して人身自由術の術を受ける時、その不治の病患は師と對峙者とが一身同體となつた時忽然として消滅される。そして濁口熊嶽師はその出山以來卅有餘年間、日本内地は勿論のこと三たび歐米を周遊して、一位不羈の術を續けて来た。大衆の眞只中にその一身を投げ出して大衆の病患煩悩のために、その身代りとなつて今日現在尙病患痛苦と闘ひつゞけてゐるのである。
そして恐らく熊嶽師はその終生のこれら病患痛苦の大衆のために犠牲となつてた、かひつゞけるであらう。

長島に就て記者に語つた際、「人間成功して故郷を忘れ去るやうなことではいけない。成功不成亦に抑はず自分の故郷は何よりもなつかしいものだ。だから故郷は故郷のためには如何なる犠牲でも犠牲つもりだ。全財産を失ふとも故郷長島町のためには惜しくはない。そして町のためには今まででも出来る限りのことはして来たつもりだ。」

師の愛郷の心は眞に切なるものがある。一年の殆どを故郷以外に暮らす身でありながら、長島町の海に面して雄大な別荘を既に廿年前に建設した。そして此の別荘を長島に往來する名流名士のために、無償で開放してゐるのだ。その精神の根本も亦師の愛郷心からの眞實の發露の他何のものもないのだ。

を現はしてその頃の世人を、爲政者を驚かし、慶賀なる法事を舉げて七百年の今日一衆の祖として又、人間日蓮として百萬の信徒の心に今日とともに生きてゐる。

過去と現在、その時代こそは異つてゐるが、今日に至る濁口の熊嶽師の精神は記者はことごとく此の人間日蓮に似たものを感じさせられる。こんなことは濁口熊嶽師はおそらく考へてみたこともないことであらう。又記者が熊嶽師に「貴方は大徳日れんに通ずるものを持つてをられる」などと云つたとしたら熊嶽師は恐らくあのけいけいたる眼を張つてそんなことを云ふ記者を怒鳴りつけて怒るであらう。しかし記者がそれを云ふ眞實の氣持は熊嶽師に對するお世辭でも何でもなく唯最初に熊嶽師の姿を見た時、その雄偉と深い自信に満ちた態度とに依つて冷然と客觀的な立場からさう感じたのであつた。世の譽者が日れんを呼ぶのに「人間日れん」と云ふ如く記者は濁口熊嶽師を呼ぶのに「人間熊嶽」なる言葉を熊嶽師の全は

快方に向つてゆくのである。無識患者自身は熊嶽師がその掌形と眞とを手にして何日何時に術を行つたかを知らない。熊嶽師の人身自由術は此の掌形への術術だけでなく實際に熊嶽師と對峙する患者に對しても亦、全統その患者の身體には手を觸れないのである。唯眞實をたき御幣をさげて熊嶽師は眼を半眼に、印を結んで空間に九字を切つて「メエツツツ」

人間日蓮と人間熊嶽

科學を超越した

神秘的な透視力

よく世の譽者が日蓮上人を呼ぶのに「人間日蓮」と云ふ言葉を常用する。日蓮の名の上に人間の二字が冠せられる時、日蓮の全貌はより遠かに判然と立體化される。日蓮の偉大さは畢竟するにその「人間」であることによつて、世紀の譽せんにつれて世の大家の心と供は決して偶像化されてをらぬ。

でも人間日蓮としてその偉大さを今日に於ても具現してゐる。此の日蓮も漁夫の子として房總半島の一角に孤々の巖を擧げた。太平洋の怒りの音を子守うたとし、朝夕海風に吹かれて茅屋の下に夢を結んで成長したのでありそして齠髫として悟るところがあり身延の山をくだつた時には既に一衆の祖と成つてまた立つて幾多の奇蹟

を現はしてその頃の世人を、爲政者を驚かし、慶賀なる法事を舉げて七百年の今日一衆の祖として又、人間日蓮として百萬の信徒の心に今日とともに生きてゐる。

しかも、熊嶽師は師と對峙する不治の病者に對してのみその不可思議の術を行ふのではなく、遠地の病者に呻吟する患者をも、到底われわれの常識では判然と出来ぬやうな不可思議さを以て快癒せしめるのである。

如何なる方法を以て熊嶽師はそれを行ふかと云ふと、遠地にある患者から患者自身の寫眞と掌紙に蓋で押した患者の掌形とを送らせ、それに向つて熊嶽師は對峙する人の如く同じ術を行ふのである。そして此の術を施された當の患者は癒されたその日から次第に

立つて遠く沖合三里の海に...

である。幾度も云ふやうであるが...

に事に眞に愛する者にして...

國民新聞 郷土と人物 三重縣の巻

郷土愛の發露から出た

愛國奉仕の一念

靈界の傑物濱口熊嶽師

偉人とか傑物とか云はれる程の...

れる。キリが袋を破つて出たのは...

に事に眞に愛する者にして...

郷土愛の熱烈

盡忠報國の一念

郷土と人物——此の傑物を輩出した...

村の者の多くは其

の日稼ぎの漁夫で

あつた、熊嶽師の家も御多岐に...

愛郷心は烈々と燃

え其の兩親に對し

は至孝至誠、あらゆる難事を...

人類愛の發露

病者を救ふ靈術

豪放果敢、金ごう不壞の一大...

世界に會て類例を 見ない師の靈術に

よつて被害に憐む者を救ひ公衆の爲めに東奔西走する所以であつて熊嶽師の人身自由術は此の意味から云つて正に人類愛の偉大なる愛と稱するも決して過言ではない現在の熊嶽師は既に巨萬の富を重ね天下の諸口熊嶽として名譽が高いが、之れ皆師の權性的靈術の得られた結果であつて佛法の所謂救世果の理法に外ならない、若しこれが金儲けの爲めや自分の名譽心を満足させる爲めの術であれば決して

今日の名聲は

かち得られないと同時に、何時かは馬脚をあらはさずには居なかつたであらう然るに如何なる馬りさんぼうも中傷も遂に師の靈術に盡が立たなかつたのは熊嶽師術の目的が眞に稱める者の苦患を救ひ又病魔の爲めに尊き人命をぢめたり自暴自棄から思想が感化したり厭世的行動に出る者などを救済して眞に世の中を明るくしたいと云ふと云ふとい信念から出發したからであ

豪放で信念の強い 熊嶽師も一面には

血も涙もあり決して自射一個の慾などを考へてゐない、雄に國家社會の爲めに利益のある事なれば時に犠牲を與へるにやぶさかでない自己の儲ける處には千萬金を投じてでもビクともしない代りには、たなボタ式の金儲けなどを持込んだも一切取にも入れないのは當然である、こんな風に萬事一貫した信念の下に行動してゐる爲めに熊嶽師にオダテも利かなければ脅かしも利かない、いつか鹿島で術を公開した時に熊嶽によつてすばらしい人氣で連日術を受ける者が殺絶するのを見た土地の無賴漢が一帯師をおどかし金にしようと思ふので師の宿所に乗り込み抜刀で脅迫したが熊嶽師は泰然として動かす只此のあはれ者を見て笑つてゐたので、さすがの無賴漢も涙氣味が感づくなつて

一切保證に 立たぬ理由

熊嶽師の信念の強い一側としては師は決して人の保證に立たない試みに濱口熊嶽家憲の一節と云ふのを見る
熊嶽師には絕對何人に關せず捺印する事を義務し當主濱口熊嶽自身に於ても獨自の行爲を禁ぜり、事情の已むなきに依り印鑑の使用を許すはあらざる時は親族會議の協賛を得たる後印章の脇に自筆を以て記名の鑑定なければ印鑑の押捺あるとも記名なきものは總て無効なる事を天下に表明す
とあり、之れは明治三十八年に定めたもので爾來此の案憲に従つて萬事を處理してゐる、何故師は絕對に人の保證に立たぬかと云ふと保證に立つても好い程の人ならば其の金をやる又貸す位ならば其の金をやると思つて決心したから此の決心をさせたるに就ては師の熊嶽里長島町の狀態から駭かぬべからぬ、長島町は山を仰ぐ海に臨み僅か

萬病即治の靈術

三密修法の結果體得した
濱口熊嶽師の人身自由術

濱口熊嶽師が、世の病苦に憐む者を救ふ師のいはゆる「人身自由術」とは果して如何なるものであらうか又師は如何にして此の不可思議の靈術を感得したのであらうか一般の人々の是非知りたい處であらう夫れには熊嶽師の世に比ひなき修行と其の動機とを語らねばならない。
海上三里の屍體を感得
漁師靈感に驚嘆
阿彌陀と云はれて遂に小學校から

何分にも沖の光 り物が氣になる

のと平素はよく物も言はぬ阿呆熊が頭として主張するので漁夫の中にあつた師の父長松を初め他の漁夫も半信半疑で船を出すと何とそれが正しく十五日間行方不明の熊嶽師の死骸であつたので今までの態度はガラリと變つて阿呆熊の聲の的中に驚くと共に恐れをなし殊に土地熊嶽師長からは神童と云はれて阿呆熊は一躍して長島町の人々から尊敬を受ける様になつたこれは云はゞ師の靈術が初めて無意識のうちに衆人を驚かす結果となつたものであらう。

那智山中三年 の斷食苦行

三密の修法會得
其の時の八月熊嶽小僧として土地の靈術に傾はれて働いてゐる或夜忽然として現はれた不思議の老僧に那智入山を勧められ翌年三月十日の未明熊嶽さんは家人にも告げず一口の短刀と老僧から與へられた

全く斷食で熊野 の奥那智の山深

く入つて熊嶽師の如き老僧の膝下で一切衣食を斷つて修行苦行を爲し那智の巖に打たれて、言語に絶する苦行を遂げる事實に三年其の間心身の鍛錬と密經の奥義を究めて三密の修行を感得し遂に世にも稀なる靈術を得たこれが師の云ふ人身自由術であつて師の靈術は眞言密經の法から出て更にこれを究べきにしたもので全く熊嶽師獨特の術と云つて好い。

科學萬能の夢 全く破る

精神療法の偉力
明治大正にかけて我國の醫學は歐洲醫學に風びされた數千年來の日本醫學は全く顧みられず何事も科學萬能の夢に心酔して和漢の名薬は一切は棄され靈藥會は全く影を消めた然るに歐米醫學の進歩と科學の進歩が益々研究されて

古來不治の病と 稱されるものは

元より靈性疾患に對しては更に全治の秘法が生れて來ないのみならず却て先進國と稱される歐米の醫學が興つて我國古來傳はる漢方薬を珍重し又は漢方療法と稱するものが用ひられて來たこれと同時に醫學療法偏重の人心は近年熊嶽として熊嶽療法を重視する傾向となつた是れは云ふまでもなく醫學で萬病を治癒することが出來ないからで明らかに科學萬能の夢が破れたものである。

つまり幻滅の悲 哀とでも云ふの

であらう、日本古來の醫學はあらゆる靈驗と研究とから生れた靈い靈驗を基礎としてゐるのに對し歐米醫學に科學の進歩による應用醫學である隨つて幾百人に對して實驗された日本醫學の基礎は理屈よりは實際的に効果のあると云ふ校長を有するに比べて歐洲醫學は幾までも學理を以て説明し得べき

此の妙境を三密 の功力と云つて

ある。然らば三密とはどんなものかと云ふとこれは一寸言葉では言ひ現はせない何故なれば其の秘法を授けられた熊嶽師に達したものでなければ理解出來ないからである師はこれに就て左の如く云つてゐる
常住坐臥一切三密

熊嶽師曰く「三密とはどんなものか私にはよく知らずして腹の中に一杯になる程有つてゐるが之を言葉では説明出來ぬと云つてこれを言つて置かねと私の靈術は知らぬから言へるか言へぬか知らぬが物にたとへて説明して見やう確へて云ふならば三密とは、私が今茲に自身の靈術を語らうとしてゐる意（こゝろ）とそれを言葉に現はして居る即ち此の身體と此の三つの他は知らず私は秘法の力で此の三密がいつ如何なる場合でも金ごう不慮であるそれは熊嶽師の力は

を出産の時御神託の如くに感じ「熊のお経が今日は威勢が好いから漁があるぞ」とか「けふはアツク」云つてゐるからしだけだ」とか云ふ様になつて夫れが不思議にも驚るので何時となく熊のお経は熊がきて來た、後日熊嶽師が熊嶽を感得して長島町に歸つて來た時土地の人は「道理でアノ子は

子供の時分から 不思議と水垢離

を取つてゐるとか「お経を讀んでゐた」とか云つてゐたが師にして見ればこれは全く熊が判らず無意識のうちに水ごりのさう快を覺えたのだつた、さう斯うしてゐるうちにある日丁度師が十三歳の三月土地の漁師と共に長島町の濱邊に立つてゐた時突然海上の彼方に光り物を発見して夫れを十五日前に出漁して行方不明の漁夫音次郎の死骸であると暗示した元より居合せた漁夫等は嘲笑と異議とを以て之れに答へた
「三里も先の海にある物が判る筈があるか」と相手にしなかつたが

かりでなく一ツは天性にもよるの
であらうと思ふ、和州の濱に
ひいてゐる遊戯色の舞臺小僧
名も財源も素性もない漁師の伴
蔵の夢枕に師匠が立つて「小僧
野へ来い」と云はれたのも私の天
性があるに違ふと見込まれたの
である私が斯うして歴史をして
あるのも無縁金ごう不慮の三徳食
事をする時も寝る時も常住坐臥す
べて三徳三まいである、三徳と云
へば佛くさく聞く人があるかも知
れぬが三徳は強ち佛法に限つた事
はない一切世間法悉皆三徳である
が世間の人は飯を食ふ時に商賈の
事を思ひ、寝る時に金儲けの算
を酒を飲んでゐながら女の方に
向ひ口先で貴方は好きな人だとい
つて腹の中でいやな腹だと思ふこ
んな腹に三徳が少しもとのつて
ゐない、私の腹から見ればお氣の
毒ながら世間の人間は大方は不具
者である私は飯を食ふ時は飯、酒
を飲む時は酒、女に對すれば女、
術を使ふ時は時處に應じて相手
の物に全精神を打込む」と述べて
ゐる萬利即治の妙ていは師にして

初めて時はふ事が出来るものであ
らう。

都新聞 昭和人物傳 三重縣の卷

大衆を救ふ靈術 近代の超人

我々として聖業に精進する 濱口熊嶽師の片鱗

聖業の使徒

日常、よく誠意を説き、誠意を説き、所謂靈的生活を標榜して響き、自ら高く持せんとする底の人は現代必ずしも乏しくはないが眞なる口舌の端に非ずして眞に神魂の靈を操り、百折不撓の勇氣をもつて身自ら大苦行に當り、竟に宇宙の大無常に對し活眼を開き得た人は蓋しれう／＼としてまれであらう。更に一切の苦難はうへんを厭はず大衆の爲めていし身術に達

出し、自己の獲得せる凡ゆるわらうを惜みなく公開し、一意救世教民の具現に使命を獻ぐる人に至つては現代何處にこれを求め得べきか、桃李もの言はず、下自ら徑をなす。聖業の使徒、濱口熊嶽師が斯うして朝野さん仰の的となるに至つた所以はここに存するのである。

偉大な神力

明きら樹に云へば熊嶽師は過去何十年の間或は山師と見られ、或は妖術と云はれ其の行ふ靈術の術を以て一種の妖術であるかの如く宣説されて来た、だが、眞に眞實なるものにやがて認められる、春風秋雨幾十年、不屈不撓の爲め人の爲めに凡ゆる迷妄短見の上に懸絶し、ただ自分の能する處に向つて邁進して来た、其の神力は遂に認められて今日では熊嶽師を疑ふ者はなく遠路其の靈術を慕つて旅術を受けに来る者日々幾千人を算しかく／＼たる其の名聲は文字通り天下を風ひするものあるに至つた

天稟の靈威

濱口熊嶽師は、明治十一年、紀州の漁村長島町で生れた、當時は戸數五百に足らぬ寒村で、村の者多くは其の日稼ぎの漁夫であつた、熊嶽師の父長松氏は土地では體釣りの名人として、俗に佛の長松と云はれた程の好人物で仲間からは随分愛されてゐたが夫で矢張り物質には恵まれずいつも貧乏は付いて廻つた、其の小作に生れた熊嶽師の熊嶽は幼時からよく因言缺乏に堪へ、天りんの靈威のひらめきは早くも常人と異なる所があり、當時既に師の靈威には「明眼より光明へ」の稱々たる靈威と信託が燃え立つてゐた、斯う、後年大衆の苦痛一洗を期し、那智の深山に三年の修行を積む處をなしたのである。

人身自由術

熊嶽師が行ふところの人身自由術の靈術の真髓に就いては到底口や筆では表現し得ぬ至深奥の極所であるが、敢て云ふならば、那智山で師の恩師實川上人が熊嶽師の三徳法法の成つて師を再び社會へ歸す時、
「汝が授かつた金ごう威神力を以て一切衆生の病患痛苦を救へ。世間苦の只中に汝の身を置く時、そこに初めて修法の善果を結び得ん」との訓諭を與へられて出山以來有餘年間、全世界の師と對摩する病患痛苦のために叱た突撃して無数の利剣を揮ひその痛苦を救済して来たのである、病患痛苦の者が師と對摩して人身自由術の靈術を受ける時その不治の病患は師と被救者とが一射同體となつた時忽然として消滅される。

そして濱口熊嶽師はその出山以來卅有餘年間、日本内地は勿論のこと三たび歐米を遊歴して一位不羈に靈術を續けて来た。大衆の眞つ只中にその一身を投げ出して大衆の病患痛苦のためにその身代りとなつて今日現在尚靈術靈威と闘ひつゞけてゐるのである。
そして恐らく熊嶽師はその終生をこれら病患痛苦の大衆のために犠牲となつて闘ひつゞけるであらう。

郷土の誇り

斯くて熊嶽師が眞實の人として世の爲め人の爲めあらゆる努力を拂つてゐる事は今日誰も知らない者はない、然し、師がその誕生の地たる紀州長島町の爲めに觀光的に靈してゐる事も亦有名なものである、町財政を助ける爲めに、進んで長島町第一番の旅館を負擔し、更にこう社な別荘を町に建て、町民の爲めに開放し、又公共事業に對して贊助し、其他公私とも隠れた美談は枚舉にいとまがない、師は常に次の如く云つてゐる。
熊嶽を要する程の者でなければ

師に學ぶことが出来ぬ、學を盡す者でなければ眞に國を愛する事が出来ない、郷里を愛し、國に愛する者にして初めて忠君愛國の至誠の發露を見る事が出来るものである、偉人ほど忠君愛國の念は強い、師にして此の信念あればこそ師をして今日の偉業を完成せしめたものである、師の長島町に對する愛郷心は郷々々々燃え其の兩眼に對しては至誠至誠、あらゆる榮華を盡して其の晩年を送らしめ、又國家に歸して報ずる事無く、皇聖に歸するの念一日として忘るゝ事がない、正に郷土が生んだ偉人として長島町の誇りである。

犠牲的精神

敵愾果敢、金ごう不壞の一大信念の下にまい進して何者も恐れぬ所が熊鷹師の今日あらしめた所以ではあるが其の一面に於いて郷土に對する愛郷と忠君愛國の至誠に至つてはたゞ一たる思想變化の現代に於いて正に一服の清涼劑であらねばならない、氏の己れを空

しくして國に報ずるの一念は世界に於て類を見ない師の偉業によつて郷土に愛する者救ひ公共の爲めに東洋西走する所であつて熊鷹師の人身自由は此の意味から云つて正に人類愛の偉大なる愛と稱するも決して過言ではない、現在の熊鷹師は既に百萬の富を盡し、又天下の港口熊鷹として各處が慕ひ、之れ皆師の犠牲的精神の報いられた結果であつて佛法の所謂因果報の理法に外ならない。

不朽の足跡

若これが金儲けの爲めや自分の名譽心を満足させる爲めの術であらば決して今日の名譽はかち得られないと同時に、何時かは脚跡を塵はさずには居なかつたであらう然るに如何なる風雨さんぼうも中斷も途に師の偉業に立たなかつたのは熊鷹師の目的が眞に病める者の苦難を救ひ又愛郷の爲めに命を犠牲にしたり、自暴自棄から思想が善化した、現世の行動に出る者など概して眞に世の中を明るくしたいと云ふ偉大な信念か

限なき博大の愛

「人間熊嶽」の横顔

傳説的の神人ではない

兒島生

熊鷹師は(城名熊嶽)十四歳の時、三月十日熊嶽長島を襲し、那智山へ向つた。途中山河重疊、数千里の道程を徒歩空襲とた、かひ難度が難れ、難度が失心せんとしたが、心底に燃ゆる烈々たる信念の炬火は心身の困ばいを超越して、明々と前途を照らし遂に夢原にも忘れ得ざりし老師とかいごうし、その偉業によつて入山した。斯くて師は幽寂荒涼たる深山に籠る事前後四春秋——此間の苦行修行こそ人間熊嶽に宇宙の神秘的魔能を感得せしむるに至つた期間であつて、眞に骨を削り、身を刻み、形骸を脱して萬象の靈氣にこ

愛國の赤誠

身元證明書

本籍住所共

三重縣北牟婁郡長島町八百七十七番地ノ一

明治十一年十二月二日生

右者目下資銀七十萬圓を有し、愛心に富み公共事業に盡す、前科無之を認む

昭和六年九月廿六日

三重縣長島警察署印

これは瀧口熊鷹師の郷里、紀州長島警察署から交付された師の身元證明書の寫しである。瀧口熊鷹師は熱烈に忠君愛國を標榜し、「愛國の赤誠は先づ郷土愛から出發しなければならぬ」といふ信念の下に、その郷里に盡くし、郷土に盡せる熱心な行は山ほどあ

る、この證明書にある通り「愛郷心に富み公共事業に盡す」としてゐるので、郷土の長老をはじめ、警察、學校其他の各方面より郷土の偉業と敬意を集中してゐる。

公共に盡す

この證明書には瀧口師が「七十萬圓以上の財産を有し……」とあるが、これはたゞその郷里長島町にある師の財産だけであつて、この外に師は長島町以外、その近接町村に多大の土地、山林を所有し、外國銀行にも相當の預金あり、また北海道と朝鮮に一大農園があり、東京、大阪、和歌山、名古屋等に大なる別荘並びに土地を所有し、またあはせて珍奇的書畫骨とうを珍蔵して居るので郷里の消息は瀧口師の財産は少くとも百五十萬圓を下るまいと推測してゐる、町のためには町一帯の納税を負擔する外、あらゆる公共事業に盡くしてゐる熊鷹師は、警察方面にも、現に熊鷹師は、現に長島警察署に尙武思想鼓吹のため、警備道廳を建築して寄附し、また警察署内

敬老と救貧

熊鷹師は、師は常に、町や警察でやうとしてゐる施設で、算や經費の關係で延々になつてゐるやうな事があると、ホントウに町のためになると考へれば、力にドシ／＼やつて退ける、郷土の爲めに盡くすといふよりも、かういふ事をやるのは公人としての自分の使命であるやうな氣持で、アツサリとやつてくれる、そして、對人には迷惑をかけず、ウツをいへぬ、特に老人を勞はりまた貧しい者、病むものに對しては非常に同情が深い、困つてゐるものを救ひ、病むものを助け、憐れなものを慰むといふ師の同情に對しては、警察としても、瀧口師の敬意を拂つてゐる、また師は數十萬の資金を持つてゐるがその資金といふのはほとんど名ばかりで、修繕費にも足らぬ安しい資金で、町の人に貸して居るといふ事や去る三月の事であつ

郷黨の崇拜

た、八十歳以上の老人數十名を長島警察に招待し、敬老會を催して慰安し茶菓を供し、記念品を贈呈し、今日の歡談に老人達はすつかり嬉しい氣分に、長老を忘れて大喜びであつた等々、どこまでも平和に、賢賢に町をよくしようとする熊鷹師の苦心と、師の眞心とはいふもびつたりと合つてゐるといふ。

母への孝養

それから郷里で一つ話となつて居るのは師の親孝行な事である、師の敬父は未だ全く師の成功を見ずして長逝したが、あとに残れる慈母に對し、師は手として出来るだけの孝養を盡くしたのである、郷里長島の別荘は師がほとんど町のために公開し、常に來往の名流が宿泊するので、自然人の出入が頻く、萬一慈母の心を傷ましむるが如き事ありては、孝子の道にあらずとなし、別に隠居なところを隱居所を建て、深くましきまでの孝養を盡

大阪毎日新聞記事

世界の靈界に

大センセーシオンを捲起し

歐米各新聞紙は筆を揃へてジャバニス・セコンドシヤカを賞讃し現代科學を超越せる靈界の權威

日本熊野が生んだ

濱口熊嶽靈術師は

歐米漫遊七年振りに

神戸、大阪、京都に現れ

六ヶ月に亘る大施術益々素晴らしき盛況又々日延べは何がさうさせたか断然難病治癒百パーセントを立證す

神靈界の快傑

濱口熊嶽

自然の科學が發達し文化を高潮す

存在し各人の心靈を支配してゐることは誰も疑はぬ所である。靈界の靈術師が時の靈術師に並せられつゝなほ且つ靈術としてその靈術を保持し靈界の權威を保持し世を救ひ人を扶けた如く靈術師の大偉人濱口熊嶽は十三歳は一介の漁師の伴にて阿呆熊嶽と云はれつゝ毎日世人に種はれ勞働して居たりしが十四歳の時より那智の深山に於て白髮靈術の靈術師に從ひ共に深山に住居し孤りを友として晝夜不眠の修行苦行の修行を爲す事三年にして靈術を修め阿呆熊嶽の靈術より靈術師を救ふの秘法を得たるに依り官意に認められ稱せられて檢束をうけたる事八百餘回司直の手をわずらはしたること數十回に及ぶと雖も靈術師の秘法を以ておろし前記の苦行から光明の靈術に導いて居る救世主である。

今や日本が生んだ靈術師の哲學者として世界に其名を轟かす熊嶽米各國では第二のキリストの再来と賞さんし東洋には弘法大師の再誕と信仰され流ころの靈氣をこめたる不思議の一場に依りイザリを立たしめツツギを聞かえしめ四股不慮の不慮者を直に立たしめ思慮を断絶に全消する不可思議なる靈術は京師大學の醫學士は靈術靈氣と云ひ帝大の心理學者は感應術と

三重縣風物記(抜)

御木本と熊嶽

「御木本と濱口熊嶽はどちらが偉い」筆者は或人からこんな問題を出された「サーごはんとラチオと君どちらが好きだ」とやりこめてやつたら、其人はナールホドそのロジックだねと云つたきりだつた。然し筆者は其人の靈術に對して興味を覺えたのである。

那智山の荒行

靈術師にもよく似た靈術の靈術師が追隨して来た。彼は彼の靈術を大阪に出張して專一其の靈術を大いに發揮して居る。其の靈術は相似たところが多かつた……

コロドラ新聞

濱口熊嶽はダウンタウンで施術をする事になつたので患者は頗る多し、施術所の二階の床がミリミリと鳴り出す大騒動をして衛生局員や探偵も多く乗り込んで買収したので市中では熊嶽が逮捕されるだらうと云ふ噂は立つた。然し之は虚言し、熊嶽は熊嶽から術をうけた白人ヤカナカを別室へ呼んで説教をしたが白人は「脚が痛かつたが又痛くなかつたのを熊嶽が何やら日本語で變な具合に手を扱つたのでなほつた」と云ひ齒の悪かつたカナカも熊嶽のことを云つたので熊嶽自身も不思議な靈術をして只呆然として居たとの事である。

ようと試みて居た。こゝに仙人も遂に世外の人でなく穢からとつたこゝは人を驚いて行かねばならぬ現實世界があつた。熊嶽は功名を能言と呼んだ。彼は紀州長島の一漁師の息子として孤々の聲をあげた。この熊嶽が後年人身自由なる名譽のもとに「どんな人間でも自由にする」

ら折かんされる水を幾度も幾度も汲みかへあびせられながら「ツツ、ツツ」と六日目は二千六百を、かぞへ七日目には二千六百丁度と、かぞへた。どうも修行と云ふのは靜かに数をかぞへても寸時も眠を休め體を横にせぬ行だつたらしい。かくてある時は自給までしようか、と遂にとんだが不思議だ大和の十津川ままとんで行つて居た。かくて修行の術から遂に極意の靈術をうけ下山したのである。下山した熊嶽はそれから「天狗嶽の小僧」と呼ばれいざりを立てたり靈術を授けたり奇蹟不思議の限りをつくしたのである。先づ和歌山に行きある農家の婦みで一人娘の靈術をなほしてからいゝんな病人が彼の後を追ふようになった。そこで七日間施術をやると内村入田島など云ふ土地の名醫がやつて来て熊嶽を京都のどこか印事學校へ入職させてくれ

濱口熊嶽師が

大鼠を喝殺した話

天井裏で騒ぎ廻り
安眠を妨害するのて

新聞日報、昭和五年四月十九日登
高知市中村町に於て師が施術
出張中、その滞在したる同町東下
町紅葉館に於ての出来事であ
る(原文)

熊嶽師はかねてその師より秘傳を
授けられた。
「決して驚いてはならぬ、驚一駭
せば近視者に大病人か死亡者を出
すから」と懇々戒められてゐたの
で、その後の機嫌をそれとなく氣
がかりで見たところ、紅葉館旅館の
天井から騒しい「うじ」鼠が落ち
て来るので不審に思つた主人其太
郎氏は、天井裏をしらべて見ると
數匹の大鼠がへい死してゐたので
早速この旨を通知したが、時恰も
熊嶽師は親戚に大病人があり、直
に歸郷せよとの急電に接し、清水
町から高知に出で田中知事を訪ふ
て最も早い歸郷のダイヤグラムを
しらべてみた際とて大いに驚き、
里に着くや實成も浴して病氣平

素晴らしき盛況に

神戸、大阪、京都の施術所
引續き日延べ又々日延べ

熊嶽師靈術場巡り

靈力の一喝に病魔感服し
歡喜と渴仰の絶頂に達す

大阪施術所

午前午後毎日
二回施療す

熊嶽師が電可不思議なる人自
由術を施すと聞き余も實感せんと
七月九日午前八時山通二丁目自
由館施術所に到るに門外患者を
乗せられる十數輛の車ありて靈法
の業は四隅に透徹す堂に上り座に
入れば數百人の患者堂内に充溢せ
り彼の熊嶽師は正面に白衣座し
て遊居たる患者を順番に呼び出し

京都施術所

貴婦人紳士で溢れる
濱口熊嶽師の靈術と云はうか人身

靈の施療をなし平に恢復するに至
つたので初めて熊嶽師を聞いたので
あつた……と高知市中村町に於
ける有名な熊科醫町田其彦氏の
話である。

ある所を設き其養生方をさす老要
あり四肢をふるはして前に進す師
は曰く老衰こまきた術を施すに及
ばずと速かに去らしむ此の如く施
術を施さずして金を返して去らし
むる者數人あり皆數日の施術を受
けしめ其全癒を嘗ふ皆歡喜感涙を
流して歸る多きは數年のこ疾にし
て醫療の及ばざる患者あり悉く
治癒の感涙を受けしめ快氣の光を
得せしむ。
十數年の研究にて彼は透視術及
暗射術を自得せし如し古來物故者
の所謂神通力を得たる者が余に觀
せたる歐米各都市巡遊の際に各新
聞の記事を切り抜きたる一冊子を
以て各國の記者彼の施術の奇特
なるを報道せり中にも倫敦タイム
ズの如きは感嘆に記して再生の細
道と記せり嗚呼濱口師は日本の濱
口師にあらずして世界の濱口師た
り我邦古來よりの歴史によれば鳥
變業役の小角の亞流ならんか。

自由術と云はうか所謂電可不思議
な靈術の施療は去る五月十三日よ
り京都に於て開始したのであつた
が七年前に治療を受けて全治した
連中は勿論市内郵部から遠くは他
府縣からも多數の患者が集まつて
来るのでさすがの大廣間も隔から
隔へ患者で滿員の状況を呈して居
る、又實際を聞いた事もない人々
は此熊嶽師の施術場に對して一種の
疑問と好奇心とを抱かずには居ら
れない事だらう、京都市左京區岡崎
西條の川町一六(但市電線沿前電
停(半丁西入)横田別邸に於ける
師の京都施術所でも外來患者が
初日にまであふれて殆ど足のやり
置もなくすし詰のやうになつて噴
霧の來るのを待つてゐるのに一驗
を喫した施療室の方から「エーエ
ー」といふやうな奇妙な聲が響
もれて來るのが妙に患者の神志を
支配して居るやうに思はれる多數
の人を押分けて漸く施術を行つて
居るやうに思はれるやうに思はれ
るの熊嶽師は白衣白袴の白帯束で兩
の袖は背に結ばれ腰の邊りへは同
じく白い腰布圍を巻いてゐるその

熊嶽師には大きなたらのの中へ濱戸
引の洗面器が置かれその中には微
温な湯が入れてある、前には一枚
のごさか敷かれ左端には鼻紙が二
三十枚と思ふ程置いてある、前は
三尺位のあき地を置いて三間も打
ち通したと思はれる大廣間には既
にひしひしと患者が話かけてゐる
巨大な頑強な體をどつかと握て
鋭い眼を光らし、「靜かにしてろ
動いやいけなさい」等大きな聲を
張り上げながら片づばしから施療
してゆくのである、先づ患者は受
付けで置つた施療券(之には病名
が書いてある)を示して前へ進む
と熊嶽師はその患部に向つて右手を
彼の黄濁湯に浸してそのしずくを
振りかけながら「エーエー」と氣
合をかけ更に呪文を唱へたり印や
九字を切るのであるその間は約一
分か二分といふよりも何秒と言ふ
位の早さで、何うして之が靈感を
起させるか不思議に堪へない、患
者には老若男女は勿論生れた許り
の子供もあれば學生もあり貴婦人
もあれば洋服の職士もある某親知
事からの紹介状を持つて來るのも

あるそれが皆平等同一に取扱はれ
て同じ微温な湯水を振りかけ
られ氣合をかけられるのである、
々な患者が出て來るが熊嶽師は殆
ど聞かない、この子は二年前に腸
炎をわすらつた君は梅毒性の腫
瘍や貴女は左の卵巣が腫れてゐ
ると手を握れず診察もせずにはん
(言ひ當る而も施療はその患部
に手を握れる譯でもなく只氣合と
呪文印一方で押し通してゐる此れ
で癒れば此位有難い事はない譯で
ある然し斯う集まつて來るのを見
ると驚かない譯ではないと見える
五十歳位の肥満した男が十五年前
から身動きも出来ない程の

あるそれは一見して施療を絶し
て料金を返還し患者の下へ走
らせる自分の手におへないもので
あると見れば驚くから驚である又
全治するか否か不明なものには無
料の印を押して數日でもやつて見
るといふ事になつてゐる從らに
◇欺罔して 料金を食らう
とするやうな事はしない處に熊嶽
師の高潔な氣質が窺はれるのである
から、醫師の診察を妨げるとかい
ふやうな行爲は少しもない。
「他の術はまあ天下無歩と言へる
ぢやうらう」と濱口熊嶽師は靈氣のな
い語氣で言つた、熊嶽師が施す所

術は天下無歩であるに相違ない。
◇横田別邸 を濟まして直
に京都府物産院京都相模會館に行
つてみれば是又數百人の患者で溢
れてゐた熊嶽師も此の有様には驚く
の外はないのである彼が靈力の
◇偉大なる 事元氣の旺盛
なる事は眞に驚かざるゝばかりで日
日數千人の患者に向つて奮ける心
胸の一喝を試みて更に驚かざるゝ
がない、「一日六千人迄は大丈夫だ
だ」といつてゐる熊嶽師がその術の
上に於ける靈力は眞に神の域に在
る事を思はしめるのだ。

神戸施術所實況

熊嶽師一人の權威者として救濟の
神と賞さんさるもむべなるかな
神戸海川トンネル西一丁山崎西
俱樂部は師が五月十三日より引續
き五月に亘る大施術場である。
既に東京方面の有志から懇望され
行くことを報告せる師も、京阪神
三大都及び其近郊の町村より來る
患者の熱願もだしがたく遂に

に日延べを感行せしが筆者は偶然にも師が数百人の病者に不待止日延べする術を授けし時參觀して居たりしが多くの人は日延べと聞くやホト安心せしむるしき感の湧に只驚なく平伏せる實況は實に筆者も涙を感したものである。かくて一編の演説を終り講堂を空き式を行ひ片づきからパー／＼と無難作に演説を行ふこと平日の如く折から播州の人から六ヶ年苦しみし疾患が全快した喜びに感服状が来る、二人の婦人に伴はれて来た紳士はリウマチスと心臓病の由一回の演説にリウマチスのいたみは止まり心臓の動きが癒つたと本人は喜び感涙を上下しても師の苦痛も驚えぬと喜んでかへる。四五歳のつんぼの女の子が昨日初めて演説をうけて感涙こぼる様になつた、四歳の子は左足が少し短く坐骨が違々當つて来る癖である非常に痛がつて居たが三回の演説に正直に痛くはないと答へる。癩に不思議は乳の出ない婦人の乳房からパー／＼の一喝に膿前直に乳汁を出して見せる、一同は今更アツと驚嘆した。

は他日其決して不思議でなく信仰を有する者には斯かる可能性が出来る所以を能く物心一切を超越せる神祕力の偉大なる所存の靈術界に絶対の敬意を表し一人でも多くの患者が救済せらるることを心から祈り會場を辭したのである

大阪朝日新聞記事

神秘の力を自由に發揮する

靈術の行者濱口熊嶽

△偉大なるかな濱口熊嶽師の演説
！我の力は至極奇蹟、天地萬物を照燭してあますところなしとかくて初めて演説も苦現も驚愕の秘法によつて感服し得る偉力

私の眼からは 不具者が多い

世間の人の大方は
口と心と違ふから
常人を超越した
靈界の偉人の言

世の中には、如何に文化をはこる一今日でも、現在の科學の知識では

ゆる真言秘法の法にあらずして物心一切を超越せる神祕靈力の實現である。

△濱口熊嶽師は大阪市天王寺區山通り二丁目事務所を置き、さかんに病者に靈法を施して治癒を行ひ、或は各地方に出かけて病者を多く救つてゐるが、最も進歩した現代の醫學によつて不治であるとサジを投げた病者に、師の阿云の一喝によつて速かに回復の喜びを興へつゝある、けにも科學の進歩した世において、なほ不思議なるは神祕靈術の偉力である。(渡邊生)

解決の出来ない「神祕の力」が存在してゐる。例へば世間から修行者となる意味において罵られ、また醫問の人として敬遠され或はその偉者は神の如く佛の如く感嘆してゐる靈術界の偉人濱口熊嶽の如きは斯く神祕の力の偉大なる所存者であるといはねばならぬ。神祕の力は、人間には誰しも相當に持つて居るものだ。しかし平凡人はその偉大なる力を所有しながらあ

まりに所謂人間であるがゆゑに、この偉力を發揮することが出来ないのだ。濱口熊嶽もまた人間である、生きて居る間は、普通人と同様に衣食住によつて生きてゐる間は人間であらねばならぬ、決して神でも佛でも神祕力を有する靈術でもないのだ。だがしかし、普通の平凡人は自己にかまけて、神祕の力を發揮し得ないのに、熊嶽は偉大なる神祕的靈力を充分に發揮し得る人間である、即ちそこに普通人の及ばない靈術を持つて居るのだ。濱口熊嶽みづからもこれを「人身自由術」と呼んで居る。靈術的作用によつて術をほとこすのであることを認めて居る、つまり人間であることを認めて居る。神祕の力すなはち術である。術によつて小男が大力無双の大男を手まりの如く自由に扱ふ、或は野術によつて野馬を小猫の如く乗りくづす術では術であるのだ。濱口熊嶽が人間でありながら、同じ人間の神祕靈術の偉力を易々と一喝によつて睡服治癒するこれもまた靈術の偉力による術である。濱口熊嶽は

決して世にいふ修行者でも聖賢でもなく、神祕の力を自由に發揮し得る人間であつて、そして專術の術者であるのだ。しかし人間であつても靈の力に堪ふる事が出来る、つまり所謂神の力を人間でありながら術によつて行ふことが出来る、それは平凡人では到底出来ぬないところで、そこが普通人と違つた偉大な神祕の力を持つてゐるらしい人間であるといはねばならぬ。當然生れながらにこの偉力を持つて居るのであるが、同時に修行を行つた靈法の功によつて、自由に神祕的靈力を發揮し得る巨人といはねばならぬ、熊嶽は曰く「常に金剛不壞の三密を毎日七百人以上の病者に對して術をほどこして居る時も、食事をする時も、常任坐臥一切すべて三密三まいである、一生懸命である世間の人は飯を食ふ時に商賣のことを思つたり寝る時に金儲けの算盤をしたり酒を飲んで居ながら眼は女の方に向つて居たり、口先ではあなたが好きなんだといつても腹のなかでいやな奴だと思つた

り、こんな風に三密が少しも、のつて居ない、私の眼から見ればお氣の毒ながら、世間の人間は大方は不具者だ」と冷笑して居るが實際徹底して事に當るといふことは普通人ではむづかしいといふよりはむしろ出来ないこと、これを成し得る眞實な修行者である大きな力を持つた眞實の行者であつて、どうしてもえらい人だといはねばならぬ。過去から現在に渉

難病を威伏し

子寶を得た話

修験功力の靈法は
事實が何より證據
摩可不思議である

それではどんな靈法であるかといへば、頗る醜態で、たゞあんなの一場は、摩可のエキズであつて、瀧口熊師の靈術集合ひのげにも神妙摩可不思議の一撃が、一度ひ摩可に感しては、げにも莊嚴威聖的に、どんな醜態も平伏して、苦

ふりまいたりして行をするのであふ、これは患者の精神力を集中する一つの手段であつて、摩可といふ無我の境地に自然に墜つてゆくので、妙な手つきで宙に九字を切つて、さて一種の靈的氣合ひを掛けるだけである。筆で記せば醜態でまた實際に靈術を見て居ても、醜態であるが、さてこの醜態な醜態法が決して素人で出来ることではなかつたといふ世間で醜態を何んと第三者が評したとて、この醜態法は俗人では出来ないこと、そこに醜態の人物が存在なしとしてえらいところである。乳の出ない母親が直に乳のほとばしり出づるやうになつたり、瘧疾の治るくらゐはおろか、いざりが扱き出したり、患者が言葉を失したり、總ての患者が悉く快癒するか、又は非常に輕快な氣持になつるといふ、免にかく科學や知識で醜態の出来ない不可思議といはねばならぬ。靈的人物の眞に摩可の統一がほど偉大なるものはなく、不治の難病であると失望して、たゞ死を待つてゐた重病者が、靈術の

阿房熊が神童となる

無意識のお經の聲で
天才はかくして生る

山ある卅三歳の婦人が結婚後十年を經るも子寶がなく、摩可を受ける一ヶ月を經ずして受胎して、そして玉のやうな男児をもうけたり、廿八歳の眞實師の妻が結婚後八年して子寶がなく家庭の寂びを嘆じてゐたのが、摩可を受けて女子を安産したり何れにもせよ毎日その摩可術へ脚氣、胃氣、心氣、腎氣、神氣、リウマチスとその他あらゆる患者が押しよせてゐるがこれ等の病者が摩可術の一喝によつて全癒するといふのは、これを批評論議する前に、まづ事實によつて證明せねばならぬこと、摩可の天威の神妙の力、摩可功力の靈法に對しては、たゞ奇蹟とか不思議であるとかいふより外は、究明の方法がないのである。

法の靈法だけでも知るために、摩可はどんな人物であるか、如何なる生立ちと過去とを持つてゐるかを先づ知つて、摩可の力を究明し、摩可せねばならぬ、靈法術を世に發表して以來、世にありふれた香具師大山師の親と目され、各地の靈法に傳授されたこと實に七百何十度、法廷に立つこと四十七回、いつも摩可によつて例の如く摩可不思議を唱へて、摩可不思議で通つて來た、げに摩可不思議である。摩可は北平奉天郡長島町といふ漁師町の生れで、父は濱口長松、母はテツといつて、朝から晩まで荒浪や潮風と戦つて細々と生計を立てゝゐた貧苦の中に育つたので、父は佛の長松といはれるほど種々な人物であつたが、母は氣性者であつた。摩可は赤ん坊の時から他の子供といはゆる變つた處があつた、摩可あはれ者だつたから鬼眼、阿呆眼、ヘナ眼などのあだ名をつけられたが、摩可小僧にいつても、いろはさへおほえはい、はたからは阿呆に見えた、つまり天才はかくして生れたことが

持てはやされるに至つた。大自然は天才兒をかくの如くにして能力を發揮せしめたのであらう。

夢に老僧現れ

那智山の荒行

母親のために宏壯な邸宅
公共的には萬金も惜まぬ

夏のある夜、摩可が十三歳の時である、老僧が夢に立つて那智の山へ來ると、摩可の一行の一行を與へたのが摩可で、翌十四歳の三月十日、星あかりをふんで故郷を出発して老僧に示された那智街道を那智山へと志したのである。空腹に驅られ人家に食を乞ふて非人よと怒鳴り立て追ひ立てられ、苦難をなめながらも一念は不思議の力を得て那智山へと一歩／＼とあゆみ行き、尾鷲を通り越して夜の九時を過ぎ、身體は極の如く疲れ、空腹に絶えかねて身體を岩壁に投げ出して、昏々と夢の境地に入るとやがて頭上「小僧」と呼ぶ聲がした、それは誰あらう前年の夏夢

と呼ぶ九十四歳の他人に出込まれて、足かけ四年振りで里へ現はれた時はすでに昔日の阿呆眼ではなく、神妙靈法の術を披露してゐたのだ。摩可は里から里へと現はれるのが歩き出す、近隣の病人が押寄せる有様で、つひに和歌山の名醫家に傳を得て京都のどいご印、那智山へ入學の手續きをしてくれたので、十九歳で卒業し、度々和歌山市小人町安養寺の住職となつたが、結核菌とあつて、いよ／＼大衰を蒙つて御祈願を奉じて、病者のため憐れむ者のために全國をまはるやうになつたのだ。然し瀧口熊師といふ人は、いはゆるお金ほしさの世にありふれた修験者ではない。摩可行であることも知る人は知る通りで、五十歳の老後をなぐさめるために摩可里長島町に五十萬圓を投じて廣壯な邸宅を建築した。また社會奉仕の爲めには萬金も惜まず投じてゐる。かつて摩可に米屋の突發した時は、役場へかけこんで「摩可を救つてくれ」と博中から一千圓を投出したり各所からつど

ひ来る寄付金も公共的の事業なら
決して疑はらぬが、たとひ三密
三昧であるといつても眼識式の他

奇瑞奇特の

靈術秘法の公開

人間の病惱一切は自から迎へてゐる速に無明を出でよ

大日本天命學院

天下に獅子吼して

濱口熊嶽が創設

濱口熊嶽、天下に告げて曰く「予
は感ずるところあつて、このたび
大日本天命學院なる一機関を創設
し、予が秘傳して大成したる
「及無邊際之靈力」と「摩訶不思議
の妙術」とを、廣く進歩の求道
者に傳へんことを企てたのである
が、そも「予の此「靈力」「妙
術」とは、予が平生の至寶にして
容易に他にこれを傳つべきにあら
ねども、時勢が急速度をもつて展

せざるが爲に、憐むべき悲劇に
墜し去るのである「靈」は力であ
る、靈の力なきは「我」はうその
「我」である。眞實の「我」
を築きあぐる精々進々は、たゞ予
の靈識においてこれを求むるのみ
である。熊嶽六尺の身體は小なれ
ども、求法の妙ていにおいては、
自ら大なることを信ずるものであ
る。人間の病惱一切は、人間自ら
これを起すのであるが、いまだ
これを「我」に歸するものはない
あ、おろかなる人間よ、何ぞすみ
やかに無明を出で、眞實の實を
歸らざる。予は予の「靈の力」に
よつて得たる「奇瑞奇特の法術」
を自ら秘するに忍びない、これを
起ふるものに授けて、眞實の眞、無
け大自在の靈識を建設せしめんと
す。大日本天命學院は、この意味に
おいて予の王嶽である、予はこの
王嶽において、多くの至道なる靈
識の弟子たちと共に、天下に吼し
て大獅子吼するを止まぬものであ
る」と、天命學院の使命は實に大
である。しかして天命學院は濱口
熊嶽の足跡の印するところに建設

せられ、道を求むるところのもの
は、靈所にこれを得らるゝであら
う。熊嶽の秘法を傳へて自ら全か
らんとするもの、今や天下にその
聲あまねきを致すがゆゑに、求法
の妙ていを傳ふる學園として、大
日本天命學院を創設したのである
この熊嶽の秘法を傳へ求めんと思
ふものはその講習生となつてその
秘法の講習を受けることが出来る
希望者は大阪天王寺區の濱口事務
所に申し込めば直に講習録を送付
される。

大日本天命學院憲章

講習生は天命學院より發行の講習録を一讀し、その上、實地講習により印の部二十五を習得せしめ
その印、又は九字につき一々その病名に基き、施術の方法を教へるものとす、而して之を普通科講習
生と稱す。

講習生にして、普通科を卒業し、進んで高等科に入らんとする者には、高等講習として、印の部百
五十を講授す、而して、高等科を卒業せし者には、天命學士、又は天命正士の稱號を與へるものとす。
天命特別大學部と稱し、印の部五百四十五以上に傳授されし者には、院長の代理又は、二代目院長
を引受しむ。

本院に發行したる講習録六卷、秘密解放録一冊、印の部一冊、及び摩訶不思議を添へ、計九冊を以
て金拾貳圓とし、その上、實地講習にて教へ、金八圓、計二十圓とす。

實地講習を受けたる者は、何處に於て施術爲すとも、法に觸れることなく安全に病者に施術するこ
とを得。

遠路の人に於て、講習生たらんとする者は、前記の講習本九冊を一讀し、それにて研究したる者に
免狀を與ふ。但し、(金拾貳圓とす、實地講習料八圓)

本院の講習生たらんとする者は、簡單に住所、姓名、生年月日を本院へ通知し、後、本人の寫眞一
枚、並びに品行方正、詐欺的行爲なさらん事の誓書を差出すものとす。

昭和八年十月五日印刷
昭和八年十月十日發行

（非賣品）

三重縣北牟婁郡長島町
發行所 濱口 稔

東京市芝區新橋六ノ三四
印刷者 明神信吉

東京市芝區新橋六ノ三四
印刷所 天命學院印刷部

東京市芝區高輪車町六番地

發行所 大日本天命學院本部



急告

濱口熊嶽當地方ニ來タル
一般病患者ハ來タリテ師ノ
施術ヲ受ケラレヨ

終